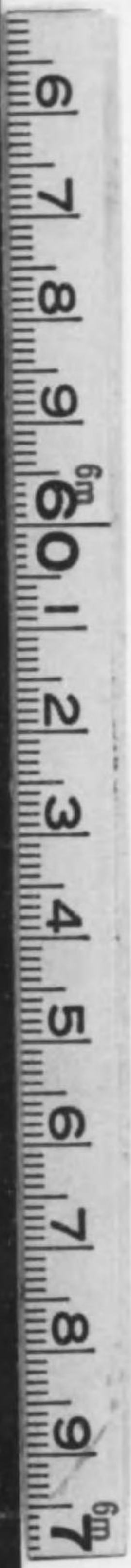


續國譯漢文大成

文學部 二十四の下

309
65

鉄
入



始



續國譯漢文大成

吉田待郎氏

寄贈本

文學部 第二十四册 (第六帙の下ノ四)
杜少陵詩集 下の下ノ四



杜少陵詩集 卷二十二

暮歸

暮歸

霜黃碧梧白鶴棲。

霜に黃なる碧梧に白鶴棲む、

城上擊柝復烏啼。

城上擊柝復た烏啼。

客子入門月皎皎。

客子門に入れば月皎皎たり、

誰家搗練風淒淒。

誰が家か練を搗く風淒淒たり。

南渡桂水闕舟楫。

南桂水を渡らむとすれば舟楫を闕く、

北歸秦川多鼓鞞。

北秦川に歸らむとすれば鼓鞞多し。

年過半百不稱意。

年半百を過ぎて意に稱はず、

明日看雲還杖藜。

明日雲を見て還た藜を杖かむ。

【題義】暮に吾が家にかへりしときの感をのぶ。仇氏は大曆三年暮秋、公安（荊州府公安縣）にての

【字解】

【一】暮歸。ひぐれに吾

が家にかへる。【三】客子。自己を

いふ。【四】皎皎。光白き貌。【五】

搗練。きねたにてぬりぎぬをつく。

【六】淒淒。つめたきさま。【六】

桂水。廣西桂林府興安縣海陽山より

出て南流す。瀘水ともいふ。湘水は

同じ山より出でて北流す。作者湘水

を奔りて更に桂水にも極さし南行す

る意あり。【七】秦川。長安杜陵の

樊川をさせるならん、卷二（九七頁）

句解をみよ。

作とし、浦氏は江陵にての作とせり。浦氏の説可なるに似たり。

【詩意】霜のために葉の黄ばんだ碧梧に白い鶴がやどつた。城のうへには柝をうつおとがしたりまた鳥の啼くこゑがする。たびびとたる自分がいまでもとつて門にはひらうとすると月の光は皎皎とかがやいてゐる。どこの家だか衣をうつ音がして風がつめたさうに吹いてゐる。自分は南行して桂水を渡らうとすれば舟楫の便がないし、北のかた故郷の秦川へかへらうとすれば兵亂の太鼓やつづみの音がやたらにしてゐる。五十歳以上にもなつて（このとき五十七歳）萬事はおもふやうにならぬ。あすはまた雲を看ながら藜の杖でもついてくらさうかい。

哭李尚書之芳

李尚書之芳を哭す

漳濱與蒿里、逝水竟同年。

漳濱と蒿里と、逝水竟に同年。

欲挂留徐劍、猶迴憶戴船。

留徐の劍を掛けむと欲するも、猶ほ迴す憶戴の船。

相知成白首、此別間黃泉。

相知白首と成る、此の別、黃泉を問つ。

風雨嗟何及、江湖涕泫然。

風雨嗟何ぞ及ばむ、江湖涕泫然たり。

修文將管輅、奉使失張騫。

修文管輅を將る、奉使張騫を失す。

史閣行人、在詩家秀句傳。

史閣行人在り、詩家秀句傳ふ。

客亭鞍馬絕、旅櫬網蟲懸。

客亭鞍馬絶ゆ、旅櫬網蟲懸る。

復魄昭丘遠、歸魂素湮偏。

復魄昭丘遠し、歸魂素湮偏なり。

樵蘇封葬地、喉舌罷朝天。

樵蘇葬地封せらる、喉舌朝天罷む。

秋色凋春草、王孫若箇邊。

秋色春草凋む、王孫若箇の邊ぞ。

【字解】「一」李尚書、李之芳なり。之芳が事は已に屢見たり。之芳は唐王李暉の孫なり。安祿山かつて奏して范陽節度となす、

嶽山反するや之芳自ら投じて京師にかへる。代宗の廣德二年、御史大夫を兼ね吐蕃に使し留めらるること二歳にして歸ることを得たり。禮部尚書に拜し、太子賓客に改めらる。黃生が注に、作者公安にありて李は江陵に没せしなりといへり。公安にての作なるや否は明かならず。漳濱與蒿里、逝水竟同年。漳濱は魏の劉楨が漳水の濱に疾にかかつた故事、蒿里は死者を送る畏歌、この二事並に李之芳をいひ、之芳病みてやがて死せしをいふ義となす。是れ舊解なり。余は漳濱は作者自己の江邊にやむをいひ、蒿里のみを李之芳についていひしものとみる。劉楨は魏の太子賓客たり、李之芳も太子賓客たり、故に漳濱は之芳をいふとは舊解のとる理由なり。次の「重題」の結尾二句はその理由にて應、劉をもて之芳に擬したり。然れども卷二十一「登高別直」詩に、長卿消渴再、公幹（劉楨が字）沈疴屋、とある公幹の句は作者自ら劉楨に比するなり。余は此の句もそれと同じからんと考ふ。逝水とは歲月の去りてかへらざるをいふ。同年とは同時の意、二句の意は同じ時の流れにあひて、之芳は病死して蒿里の畏歌をうたはれ、自己は江邊に疾むといふなり。留徐劍は延陵の季子（徐國を過ぎ、徐君が己の佩びし劍を欲せしを知り、心に許しつづつ與へずして去りしに、のちに徐を歸しに徐君已に死したればその墓に劍を掛けて去りしといふ故事。句は李を弔せんと欲するをいふ。猶迴憶戴船。王子猷が戴安道を訪はんとて雪夜に船を出し、途中にて興盡きてかへりし故事。仇氏は李が方に赴かんとして赴かざるをいふ義とす、これは逝を字義どほりに見しなり。

爾して楊倫注には李の未死を疑ふ意とみたり。これは憶載の船を、こちらからあちら（李の方）へむけかへるとみるなり。楊注まされるに似たり。【五】風雨。「詩」に「風雨あり、君子を思ふ詩とせらる。實際の風雨をかれていへり。【六】江湖。公安の地方をいふ。【七】修文。顔回死して修文郎となりし話。卷十四（二三五頁）句解をみよ。【八】將管轄。魏の管轄未承の事を知る、弟に向ひて天は我に才明を興へしも年壽を興へざれば四十七八にならば死なるといひ、その如くに死したり。將とは天につれてゆかれしをいふ。【九】奉使張雲。之芳吐蕃に使せしを以て張雲を以て比す。【一〇】史闕。國家の歴史の編修所をいふ。【一一】行人。使者のこと、「周禮」に、大行人・小行人の職あり。行人在とは使者としての事功存するをいふ。此の句は上の奉使張雲を承く。【一二】詩家秀句。この句は上の修文の句を承く。【一三】客亭。李の寄寓の亭をいふ。【一四】鞍馬橋。主人在らざれば奉訪する鞍馬もなし。【一五】故壘。故壘の壘。【一六】荆門。蜘蛛のす。【一七】復魄。死者のたましひをよびかへすこと。【一八】昭丘遠。昭丘は楚の昭王之墓、荆州富陽縣東南にあり。已にみゆ。荆州江陵にての死なれども附近の名所をあげしなり、遠とは李の故郷よりとほきをいふ。【一九】歸魂。故郷へかへる李のたましひ。【二〇】素淫個。淫は水の名、長安にあり、素は水の白きをいふ、個とはかたよる、荆州よりみて僻遠なるをいふ。【二一】樵蘇。まきとりに、しばかり。【二二】封。地もりをすること。【二三】喉舌。尙書の職をいふ、「後漢書」李固傳に、牛爲天之喉舌、尙書亦稱之喉舌とみゆ。【二四】龍朝天。朝廷へ參内することやみたり。【二五】海春草。草のかれしほむをいふ、時節をいへり。【二六】王孫。王孫遊、令不歸、春草生、令憂妻、とみゆ。王孫は「とのこい」といふこと、ここは李をさす。【二七】若箇。「いかなる」の意、俗語なり。

【題義】禮部尙書、太子賓客李之芳の死を哭した詩。大曆三年秋の作。黃鶴は江陵にての作なるべしとせり。余も然らんと考ふ。

【詩意】時の流れは逝く水のかへらぬごとくであるが、同じ時にあなたは病没せられて蒿里の挽歌をうたはるるに至り、自分は漳水の濱ともいふべきここで疾にかかつてをる。自分は延陵の季子のやう

にあなたの墓に對して徐國にとどめたといふ劍を掛けようとはおもふが、やはりあなたがいきでゐる様な気がして憶載の船をあなたの方へさしむけようかともおもふ。おたがひわかいときから知りあうていまは白髪あたまになつた。このたびの別れは黄泉をへだてることになつた。風雨のせりにいくらあなたを思うてもそれはおひつかぬ。江湖の地で泣然と涕をながすばかりである。天は文章をつくらせるため管轄の様あなたをもつていつてしまつた。使命を奉じて異國までいつた張翥の様あなたには失はれてしまつた。ただ行人職としてのあなたの事功は歴史の編修所にのこつてをり、詩家として秀句が世間につたはつてをる。いまあなたの客館では鞍馬のおとづるものもとだえた。旅の靈柩にはくものすがかかつてゐる。たましひをよびかへすにも昭丘はとはいし、ふるさとへかへるにも涟水はあまりに僻遠である。樵蘇のものがではひりするあなたの葬地は地もりされた。喉舌の職にあつたあなたも參朝するといふことは永久にやんでしまつた。いまや秋げしきに春の草はしぼんでしまつたが、古歌にうたうてある様にはんに慕はしいのごともいふべきあなたはどこにどうしてござることやら。」

重題

重ねて題す

涕灑不能收。哭君餘白頭。

涕灑きて收むる能はず、君を哭する白頭を餘す。

兒童相識盡。宇宙此生浮。
江雨銘旌濕。湖風井徑秋。
還瞻魏太子。賓客減應劉。

兒童相識盡く、宇宙此の生浮ぶ。
江雨銘旌濕ひ、湖風井徑秋なり。
還た瞻る魏の太子、賓客應劉を減せしことを。

【原注】李公榮、
於太子賓客。

【字解】(一) 此生浮 生涯のたよりなきをいふ。(二) 銘旌 死者の姓名を録したはた。(三) 井徑 田地のこみち、田間を過ぐるによりていひしものならん。或は墓の隣道をいふとの説あるも、李の墓はここに埋むるものにあらずればしか見なすことを得ず。

【題義】前篇已に李之芳を哭してなほ足らず、重ねてかきつけた詩。

【詩意】自分は涕がそがれて始末にをへぬ。あなたを哭するものこの白髪あたまの自分だけがのこつてゐるのだ。ことものときからの識りあひはあなたでみんなおしまひになつた。江上の雨にあなたの銘旌はうるほされだにじぶんの生涯はふわふわ浮いてゐる様なものになつた。江上の雨にあなたの銘旌はうるほされる、湖邊の風に田間のこみちの秋をおぼえる。あふぎみれば魏の太子もその賓客としての屬僚に應劉の如き文才ある人が減つたとおなじである。

哭李常侍嶧二一首

李常侍嶧を哭す 二首

一代風流盡。修文地下深。

一代風流盡く、修文地下深し。

斯人不重見。將老失知音。

斯の人重ねて見えず、將に老いむとして知音を失す。

短日行梅嶺。寒山落桂林。

短日に梅嶺を行く、寒山に桂林落つ。

長安若箇伴。猶想映貂金。

長安若箇の伴か、猶ほ想ふ映貂の金。

【字解】(一) 李常侍嶧 散騎常侍李嶧、散騎常侍に左右あり、左は門下省に、右は中書省に隸す。過失を規諷し、侍從顧問を掌る。(二) 修文 前篇「哭李尚書」詩句解をみよ。(三) 斯人 李常侍をさす。(四) 行梅嶺 梅嶺は大庾嶺、梅を以て名あり、廣東北境にあり。行とは常侍の旅櫬のゆくをいふ。仇注に李常侍は蓋し廣南に死して長安に歸葬するなりといへり。(五) 寒山落桂林 寒山は秋より以後の山をいふ、落桂林とは桂樹の葉落つるをいふ、以て常侍の死を比す。謝靈運が詩句に、桂木澗寒山とあり、今遂に用ひたり。(六) 若箇伴 若箇は若干箇(いくばく)なり。伴は伴側。(七) 映貂金 唐制、侍中の冠には金縷をつけ貂尾を挿む。映貂金とは貂尾に映する金縷の色、即ち常侍の冠飾をいふ、其の生時の姿を想ふをいふなり。

【題義】散騎常侍李嶧を哭した詩。第二首に「江漢」の語あれば、大曆三年秋冬間、荆南にての作なるべし。黃鶴は冬江陵作とせり。

【詩意】君は地下に深く文を修め去り、一代の風流もここに盡きた。君の如き人は二度と見ることができぬ、自分は老いかかつて知己を失つてしまった。君は寒山に桂樹の落つるとき、日景の短きとき

に梅嶺をとほつて長安へかへる。長安ではどれだけの舊友がゐて金蟬に貂尾をはさんだ君が生前の姿を想ひうかぶるであらうか。

〔一〕

〔二〕

青瑣陪雙入。銅梁阻一辭。

青瑣陪して雙び入る、銅梁一辭に阻たる。

風塵逢我地。江漢哭君時。

風塵我に逢ふ地、江漢君を哭する時。

次第尋書札。呼兒檢贈詩。

次第書札を尋ね、兒を呼びて贈詩を檢せしむ。

發揮王子表。不媿史臣詞。

發揮す王子表、媿ぢず史臣の詞。

【字解】〔一〕青瑣 宮門をいふ。〔二〕陪雙入 常侍に陪從して二人にて入る。〔三〕銅梁 重慶府（唐時の渝州）に屬する縣の名。事は明かならず、作者必ず嘗て李と銅梁に會して之に別を告げしことあるに似たり。李は當時銅梁に官たりしものか。〔四〕阻一辭 一辭以後阻隔するをいふ、一辭とは一たび辭去するなり。〔五〕風塵逢我 銅梁にての會をいふ。〔六〕江漢哭君 荆州にての哭をいふ。〔七〕次第 順序をおひつぎつぎに。第は弟の音、兒と相對す、詩家之を借對（字音を借りたる對句）と稱す。〔八〕書札 常侍が作者に寄せし書。〔九〕贈詩 常侍が作者に贈りし詩。〔一〇〕發揮 表をして光輝あらしむるをいふ。〔一一〕王子表 史には王子表あり、宗室の人人を表につくりて示す、李常侍は宗室なれば王子表中に記載さるる人なり。〔一二〕不媿史臣詞 史臣は修史官をいふ、史官の記する言に對して愧づる所なきりつばなる行あるをいふ。

【詩意】 自分のみやこにゐたときはあなたに從ひ青瑣の宮門をふたりしてはひつたものだ。それが銅

梁でおいとまごひしてからへだたつてゐた。あのとき風塵のなかでおであひしたところ。いまはまたこの江漢の地でああなたの逝去を哭するとき。（なんとといふ變化であるか）。あまりの慕はしきにつぎつぎとあなたのお手紙をたづね、ことにもいひつけてあなたから贈られた詩をしらべださせる。あなたの如きは史上の王子表の光輝をますものであつて、史臣のはめことばに媿ぢぬ行ひをもつたものである。

舟出江陵南浦奉寄鄭少尹審

舟江陵の南浦を出づるとき、鄭少尹審に寄せ奉る

更欲投何處。飄然去此都。

更に何の處にか投せむと欲する、飄然として此の都を去る。

形骸元土木。舟楫復江湖。

形骸元土木、舟楫復た江湖。

社稷纏妖氣。干戈送老儒。

社稷妖氣纏ふ、干戈老儒を送る。

百年同棄物。萬國盡窮途。

百年棄物に同じ、萬國盡く窮途。

雨洗平沙淨。天銜闊岸紆。

雨に洗はれて平沙淨く、天銜みて闊岸紆る。

鳴蜩隨汎梗。別燕起秋菰。

鳴蜩汎梗に隨ひ、別燕秋菰に起る。

棲託難高臥。饑寒迫向隅。
 寂寥相响沫。浩蕩報恩珠。
 溟漲鯨波動。衡陽雁影徂。
 南征問懸榻。東逝想乘桴。
 濫竊商歌聽。時憂卞泣誅。
 經過憶鄭驛。斟酌旅情孤。

棲託高臥し難し、饑寒向隅に迫る。
 寂寥相响沫す、浩蕩たり報恩の珠。
 溟漲鯨波動く、衡陽雁影徂く。
 南征懸榻を問はむ、東逝乗桴を想ふ。
 濫竊商歌に聴く、時に憂ふ卞泣の誅せられむことを。
 經過鄭驛を憶ふ、斟酌せよ旅情の孤なるを。

【字解】(一) 江陵南浦。荆州の南方江浦。(二) 鄭少尹。江陵少尹鄭審、已に屢見ゆ。(三) 此都。江陵をさす。(四) 老儒。老儒は自己をいふ。蓋とは干戈のために逐ひやられつづつあることをいふ。干戈に送らるといひなせるなり。(五) 兩洗。以下の四句は南浦の景をいふ。(六) 鳴。響はつくつく法師といふ。法師。水にうかべる棒切れ。(七) 蓋。まこも。(八) 追向隅。向隅の時にあたりて迫り来る。向隅とは衆人の中にて一人隅に向ひて悲しむをいふ。滿堂飲酒。有。一人。向隅。則滿堂之人、皆不樂矣。と「漢書」刑法志「説苑」にみゆ。(九) 相响沫。响沫とは魚に水あわをいふ。ふきかぐるなり。「莊子」にみゆ。鄭が自己に恩恵を施してくれしをいふ。(一〇) 清高。とりとめなき貌。(一一) 報恩珠。漢の武帝昆明池の魚を助け、魚之に珠を報いし故事。自己の報恩の志をいふ。(一二) 溟漲。大海をいふ。江湖の水をかくいふ。(一三) 衡陽。湖南の衡陽府。作者のゆかんとする地。雁は衡陽に至りて回るといふ。(一四) 懸榻。後漢の陳蕃、高士徐穉が爲めに一榻を懸け、穉來れば供せしこと。穉は江西南昌の人、句は南昌を問はんとするをいふ。(一五) 乘桴。「論語」にみゆ、いかに乘りて海に浮ぶなり。(一六) 濫竊。みだりにぬすむ、謙遜の辭なり、鄭が下の様なことをしてくれしをいふ。(一七) 商歌。商歌は向隅の歌なり。此の句は齊威の故事を用ひしや曾子の故事を用ひしや

不明、成が事は「呂氏春秋」に、曾子の事は「莊子」に出づ。竝に已にみゆ。(一八) 時憂。自己が憂ふるなり。(一九) 卞泣。卞和玉璞を得て楚王に獻じ、王に非ずとして足をきられ、璞を抱きて荆山の下に哭す、と「韓非子」にみゆ。自己の危きをいふ。(二〇) 鄭驛。鄭當時驛を設けて賓客を接待せしこと。已にみゆ。以て鄭審が自己を歓迎せしことに比す。(二一) 斟酌。鄭に我が情をくみとつてくれといふなり。

【題義】南方への旅行をはじめようとして自己ののれる舟が江陵の南浦を出たときに江陵少尹鄭審に寄せた詩。作者この時公安に向つて出發せしなり。浦氏・楊氏等は作者は先づ江西に遊ぶ考なりしが中途に變更して湖南にゆくこととなせるなりといへり。ただ作者は山陰にゆきたしともいひ東海に浮びたしともいへば江西にゆきたしといひしとしてその意志確立しをれりともいひひがたく、余は湖南行が初志にて江西行はきまぐれの希望ならんと考ふ。詩は大曆三年秋、荆州を發せんとせしときの作。

【詩意】このうへまたどこへ身を投じようとするのか、自分はぶらりとこの都からたち去るのである。じぶんのからだは土木の如くみなしてあるがまた舟楫を以て江湖にのりだすのである。天下には妖氣がまとひ、干戈はしきりにこの老いばれ儒者を逐ひやるのである。吾が百年の生涯は全くうちすてられた物同然であり、萬國いたるところみちがゆきづまつてをる。(いま舟でみると)平かな沙は雨に洗はれて淨らかに、廣き天に吞まれて闊い江岸がうねつてをる。うかべる棒切れにくつついたままつつく法師は鳴いてゆく、立ち去らんとする燕は秋のまこもから飛びあがる。じぶんはその身のおちつきばしよには枕を高くしてねてゐることはむづかしく、ひとりて悲しんでゐる際に饑寒がせま

つてきた。これまでさびしい生活のときあなたはこの濁れ水にすむ魚の様な自分に水泡のいきをふきかけてくださった。それにじぶんは之に對して珠を以てご恩がへしをするみこみもありませぬ。」ゆくてにはひろき水に鯨魚の波が動き、衡陽のあたりには雁のゆく影がみえる。これから南方へかけて陳蕃が懸榻のあとを問ひ、東にゆきては古人の様に桴にのつて海に泛びたいなどとおもひうかべてみる。あなたはこれまでじぶんが商歌するときみすてにそれをきいてくださったが、じぶんは時として下和が璞を抱いて泣いたうへに誅殺されはせぬかとさへしんばいするのである。自分はあなた宅へしばしばいつて、鄭當時が驛を設けてやつた様な歓迎をうけたことをいまにおもひだす。どうぞあなたはいま如何にじぶんがさびしい旅ごころをもつてゐるかをくみとつてくだささい。」

移居公安山館

居を公安の山館に移す

南國晝多霧。北風天正寒。

南國晝霧多し、北風天正に寒し。

路危行木杪。身迴宿雲端。

路危くして木杪に行く、身廻にして雲端に宿す。

山鬼吹燈滅。廚人語夜闌。

山鬼燈を吹きて滅す、廚人夜闌に語る。

雞鳴問前館。世亂敢求安。

雞鳴前館を問ふ、世亂に敢て安を求めむや。

【字解】(一) 移居 江陵より居を移すなり。(二) 公安山館 公安は縣の名、荊州江陵府の南百二十里にあり。山館は山上の驛館。

【三】 行木杪 樹木の、すゑにあたる高處。(四) 雲端 高處をいふ。(五) 山鬼 山中にすむ怪物。(六) 廚人 臺所の人たち。(七) 夜闌 よふけ、即ちあけがた近きころ。(八) 雞鳴 宿せし翌曉のとき。(九) 問前館 この前館のみかたによりて本館の解二條となる。仇氏は前館の館、即ち公安より別地の館をさすとく。移りたて早前に前館の館を問ふとはせはしすぎる様なれども、作者當時にありて必ず公安には一宿か二宿にてまた旅立つ考なりしならん、それが何かの都合にて遂にしばらく此にも寓することとなりしものとみるべし。浦氏は即ちこの公安の山館なりとく、浦氏の説は題の移居の二字をあまりに忠實にとりすぎたるものとおもはる。仇氏説是なり。(一〇) 求安 安は安居。

【題義】江陵から公安の驛館へ居處をうつせしときの詩。

【詩意】南國には晝でも霧が多くてうすぐらく、北風が吹いてちやうど天が寒い。こんなをりに自分

はあふなげな路をとほつて木のこすゑのあたりをあるき、身ははるかに雲のゐるあたりに宿るのである。夜ふけに臺所の人たちがなにかはなしあうてゐる、山鬼が出てきて燈火を吹きつけたなどというてゐる。雞の鳴くころ自分はまたゆくての驛館の都合などをひとにたづねてみる。それはこの亂世にどうしてひとつとところにじつとおちついてすんでゐることなどを求めようぞ。敏活にうつりあるかねばならぬのである。

醉歌行贈公安顏十少府請顧八題壁

醉歌行、公安の顔十少府に贈る、顧八に請ひて壁に題せしむ

神仙中人不易得、神仙中の人得易からず、

顔氏之子才孤標、顔氏の子才孤標なり。

天馬長鳴待駕馭、天馬長鳴駕馭を待つ、

秋鷹整翮當雲霄、秋鷹翮を整へて雲霄に當る。」

君不見東吳顧文學、君見すや東吳の顧文學、

君不見西漢杜陵老、君見すや西漢の杜陵の老、

詩家筆勢君不嫌、詩家の筆勢君嫌はざるも、

詞翰升堂爲君掃、詞翰堂に升りて君が爲に掃ふ。」

是日霜風凍七澤、是日霜風七澤に凍る、

烏蠻落照銜赤壁、烏蠻の落照赤壁を銜む。

酒酣耳熱忘頭白、酒酣に耳熱して頭白を忘る、

【字解】(一) 顔十少府 公安の

顔十は少府に對する敬稱。(二) 顧八 八は排

か。朱氏は八の下に分を脱したるも

のにて顧八分文學(次篇の題には顧

八分文學とあり)をさすといへり。

【二】題壁 壁壁にかきつける。

【三】神仙中人 漢の梅福、南昌の尉

となる、之を神仙の尉といふ、仙尉

は縣の尉官の故事となる。顔十は尉

官なるによりて之を用ふ。【四】顔

氏之子 顔十をさす。【六】孤標

獨立せるめじるし。【七】天馬 馬

も次句の聲もみな顔十の才幹をた

ふ。【八】東吳顧文學 東吳は吳、

江蘇省をいふ、顧の郷土なり、文學と

感君意氣無所惜、君が意氣に感じて惜む所無く、

一爲歌行歌主客、一に歌行を爲りて主客を歌ふ。」

老 西漢の二字は杜陵へのみかかる、杜陵は漢以來の地名なるによりかくいふ、老は老人、自己をいふ。【一】詩家筆勢 仇注に詩家

とは自ら謂ひ、筆勢とは韻を謂ふとあれど首肯しがたし、余は「詩家の筆勢」(仇注にては「詩家と筆勢」と訓む)といふことにて作

者自己の揮毫のさまをいふとみる。【二】詞翰升堂 仇注に詞翰詩家を承け、翰は筆勢を承くとし、こゝも「詞と翰」と(自己の詞と

韻の兼と)の義とす。亦首肯しがたし、詞翰はもとより對立せる語なれどこゝは顧一人にかけていひ、特に翰の方に重きをおきていふ、

顧は太子文學たれば書も詞も能くせしことを知るべし。詞翰升堂とは詞翰をよくする顧が顔十の堂に升るをいふ。【三】掃 ばらふ、

かきなぐるをいふ。【四】七澤 楚に七澤あり、其の小小なるものを雲夢といふと子虛賦にみゆ。【五】烏蠻 巴にみゆ、南蠻をい

ふ。【六】赤壁 湖北武昌府蒲圻縣にあり、烏蠻は西に、赤壁は東にあり。【七】酒酣耳熱 漢の楊惲が書に、酒後耳熱、魏の曹丕

が書に、酒酣耳熱とみゆ。【八】歌主客 主は主人、顔十をさす、客とは顧と自己となさす。

【題義】醉歌の吟なり。之を作つて公安の尉官顔十に贈り、顧文學にたのんで縣の壁にかきつけても

らつた。大曆三年公安にての作。

【詩意】縣の尉官は世間にたくさんあるが神仙中の人といはるるほどのものは得易くない、ところが

この顔氏の子たる顔十は衆中に獨立したためじるしとなるほどの才をもつてをる。たとへば彼は天馬が

ながく鳴いて他の駕馭してくれるのを待つごとく、また秋の鷹が翮を整へて雲霄の高きに當つてを

る様なものである。」君見よ、ここに東吳の顧文學と、西漢の杜陵に住してゐる老人とがここに會し

た。詩家たる杜陵の老人の筆勢を君は嫌ひはせぬけれども、それよりもつと書をよくする東吳の顧文學がいま堂上に升つて君がために筆をふるはうとするのである。けふは霜を帯びた風が吹いて、楚の七澤も凍らんとし、烏鵲の西から照らす夕ばえが遠く東のかたの赤壁の方までをふくんでゐる。自分分は酒酣に耳があつくなつて頭の白くなつたことをうちわすれ、君の意氣に感じて何等惜む所もなく、もつばらこの歌行を作つて主客のことをうたふのである。」

送顧八分文學適洪吉州 顧八分文學が洪・吉州に適くを送る

中郎石經後、八分蓋憔悴。 顧侯運鑑鍾、筆力破餘地。 昔在開元中、韓蔡同最屬。 玄宗妙其書、是以數子至。 御札早流傳、揄揚非造次。 三人竝入直、恩澤各不二。 顧於韓蔡內、辯眼工小字。

中郎が石經の後、八分蓋し憔悴せり。

顧侯鑑鍾を運らし、筆力餘地を破る。

昔在開元の中、韓蔡同じく最屬す。

玄宗其の書に妙なり、是を以て數子至り。

御札早く流傳す。揄揚したまひしは造次に非ず。

三人竝に入直す、恩澤各不二なり。

顧は韓蔡の内に於て、辯眼小字に工なり。

分日侍諸王、鈎深法更祕。 日を分ちて諸王に侍す、深を鈎して法更に祕なり。」

文學與我遊、蕭疎外聲利。 文學我と遊ぶ、蕭疎聲利を外にす。

追隨二十載、浩蕩長安醉。 追隨すること二十載、浩蕩長安に醉ふ。

高歌卿相宅、文翰飛省寺。 高歌す卿相の宅、文翰省寺に飛ぶ。

視我揚馬間、白首不相棄。 我を視る揚馬の間、白首まで相棄てずとす。

驕驩入窮巷、必脫黃金轡。 驕驩窮巷に入る、必ず黄金の轡を脱せり。

一論朋友難、遲暮敢失墜。 一たび朋友の難きを論ず、遲暮にも敢て失墜せむや。

古來事反覆、相見橫涕泗。 古來事反覆す、相見て涕泗横はる。

嚮者玉珂人、誰是青雲器。 嚮者玉珂の人、誰か是れ青雲の器ぞ。

才盡傷形骸、病渴汚官位。 才盡きて形骸を傷む、渴を病みて官位を汚す。

故舊獨依然、時危話顛躓。 故舊獨り依然たり、時危くして顛躓を話す。」

我甘多病老、子負憂世志。 我は甘んず多病にして老ゆるを、子は憂世の志を負ふ。

胡爲困衣食、顔色少稱遂。 胡爲れぞ衣食に困しみ、顔色稱遂少く、

遠作辛苦行順從衆多意

遠く辛苦の行を作し、衆多の意に順從せむとするや。

舟楫無根蒂蚊蠆好爲崇

舟楫根蒂無し、蚊蠆好く崇を爲す。

況兼水賊繁特戒風颺駛

況んや水賊の繁きを兼ぬ、特に風颺の駛きに戒めよ。

崩騰戎馬際往往殺長吏

崩騰せる戎馬の際、往往長吏を殺す。

子干東諸侯勸勉防縱恣

子干諸侯に干む、勸勉して縱恣を防がしめよ。

邦以民爲本魚饑費香餌

邦は民を以て本と爲す、魚饑うれば香餌を費す。

請哀瘡痍深告訴皇華使

請ふ瘡痍の深きを哀み、皇華の使に告訴せよ。「なるべし。」

使臣精所擇進德知歷試

使臣擇ぶ所を精にすべし、進德は歷試によることを知る。」

惻隱誅求情固應賢愚異

誅求の情に惻隱するは、固より應に賢愚によりて異なる―

烈士惡苟得俊傑思自致

烈士は苟得を惡む、俊傑は自ら致さむことを思ふ。

贈子猛虎行出郊載酸鼻

子に猛虎行を贈る、郊に出づれば載ち酸鼻なり。」

【字解】 一、顧八分文學。顧八分文學は前篇に見ゆ、八分は八分書を能くするによりていふ、八分書のこととは卷十八、李潮八分小篆歌をみよ。顧、名に戒者、玄宗朝の人、宋の歐陽偁の集古錄に、唐の呂誼が表、元結撰、戒者八分書と記し、姚寬の「西溪叢語」に呂公表、前太子文學・翰林待詔顧戒書と記す。二、洪吉州。洪州及び吉州なり、共に江西にあり、洪州は今の南昌なり。三、中郎

石。中郎は五官中郎蔡邕をいふ。後漢の熹平四年、蔡邕八分の書體を以て五經を書し、石に刻し、太學門外に建てしことをいふ。【一】憔悴衰へたるをいふ。【二】顧侯。侯は敬語、君といふ類。【三】鐘鏗。鏗は殺治のあろり、鐘ははかりのおもり、金屬を火にかけ鍛錬するをいふ。【四】破餘地。莊子に庖丁が牛を解くことをのべて、遊刃恢恢然有餘地といへり。破とは蓋し開拓するをいふ。【五】韓蔡。韓、韓木、蔡有那、李潮八分歌にみえたり。【六】鼎鑪。力を作す貌。【七】其書。八分書をいふ。【八】數子。顧韓蔡をいふ。【九】御札。玄宗の筆札をいふ。【一〇】流傳。世間に流れ傳はる。趙注にいふ、玄宗、韓擇木を師とす。嘗て彩牘上に八分の書を以て畫說に讀を書して賜ふと。【一一】掄揚。三人等の書をほめあげたまひしこと。【一二】造次。あわただしき貌。輕卒より出でしに非ざるをいふ。【一三】三人。顧韓蔡。【一四】入直。禁中に入り宿直する。【一五】不二。同一。【一六】辯眼。明眼の意。【一七】分日。一月の内甲乙等の日に分つ。【一八】侍諸王。皇族の王たる人人のおそばへて、書法を教ふるためなり。【一九】鈞深。書法のおくふかき所を求むる。【二〇】文學。顧をさす。【二一】蕭疎。さびしき貌。【二二】外聲利。世俗の名稱利益を度外におく。【二三】二十載。天寶八載より大曆三年までにて二十年となる。【二四】浩蕩。醉態の放肆なるさま。【二五】文翰。書をいふ。【二六】省寺。某省某寺と稱する官衙。【二七】揚馬。揚雄、司馬相如のあひだ。【二八】白首。將來老年の時をいふ。【二九】驛關入窮巷。必脫黃金轡。仇氏は顧が作者を公安にて訪問するに黄金の轡を脱することと説く。余は長安の時の事をつづきをのべしものともしふ、窮巷は作者のみやこの住地をいふ。黄金の轡を脱すとは、管劍を脱す・金龜を解くなどの如く之を賢におきて酒を買ひてのみしこととをいふなるべし。【三〇】一論朋友。これは作者かつて顧と論ぜしをいふ、朋友とは友情を全くするの難きことなり。【三一】還幕。今の晩年時をいふ。【三二】事反覆。交情の前後にかはるをいふ。【三三】爾者。長安時代のむかしをいふ。【三四】玉珂。玉珂を鳴らして參朝せし人。【三五】誰是青雲器。青雲器とは青雲の高位に達すべき人物をいふ。こゝは人物そのものをいふに非ずして其の地位にある人をいふ。仇氏は、歎き貴者未だ必賢といへるが、反面よりいへば仇氏の如くなるも、正面よりいふときは往時のなかまに高位に達せし人あらざるをいふのみ。【三六】才盡。自己の才なくなりしをいふ。【三七】病渴。消渴の病にかかる。【三八】汚官位。尙書の郎官となりしこと。【三九】故舊。顧をさす。【四〇】新顧。顧の字、諸本顧に作る。之に従ふ。顧はひつくりかへる、顧はつまづく。【四一】稱選。心になかひとけること。【四二】辛苦行。つらき旅行。【四三】衆多。衆人をいふ。【四四】無根蒂

不安定の狀にあるをいふ。【四六】 嶽 たり。【四七】 水賊 水上の盜賊。【四八】 賊 はやきこと。【四九】 崩壁 みだれあがる。
 【五〇】 殺長吏 長官を殺す。大曆三年、高州の兵馬使劉洽、刺史殷仲卿を殺す、高州の兵馬使朱希彩、節度使李懷仙を殺すの類。【五一】
 子 顧をさす。【五二】 千東諸使 千は千調、求むる所あらんとして面會を乞ふこと、東諸侯とは東方の刺史、洪州吉州は荆州の東にあ
 たる。大曆二年に魏少游、洪州刺史兼江西觀察使たり。洪州は觀察使の治所なり。【五三】 勳勉 すすめつとめしめる。【五四】 皇華使
 わがまま。【五五】 費香餌 香餌とは人民の食物をいふ。【五六】 瘡痍深 きずのふかきこと。【五七】 告辭 つげる。【五八】 皇華使
 天子の使者、即ち觀察使をいふ。「詩」に、皇華者華あり、君、使臣を遣はす詩とせらる。【五九】 使臣 即ち觀察使。【六〇】 所擇 部下
 の官吏をいふ。【六一】 進德知屢試 不備の句、進德の屢試によることを知るべし之意、進德とは「易」の進徳修業の進徳、こちらが
 德の方へと前進すること。屢試は書籍の屢試、諸學の屢試、いろいろのなんぎなめにあはせためすこと、屢試といふことありてのち德
 に進むものなり。使臣はかかる人物を登用すべきなり。【六二】 惻隱 心をいたためてあはれにおもふこと。【六三】 殊求情 上からから
 き税をとりたてらるる民情。【六四】 賢愚異 吏の賢愚により惻隱のころの動きかた同じからず、賢者は深く愚者は淺し。【六五】 烈
 士 この烈士、下の使臣みな顧についていふ。【六六】 荷得 道にかなはず、かりそめに利を得ること。【六七】 自致 自己の身を青雲
 の上に致す、要路に立つをいふ。【六八】 猛虎行 陸機が猛虎行に、渴 不飲 盜泉水、熱 不息 惡木陰、惡木豈無 枝、志士多
 苦心、とみゆ。【六九】 出郊 出でて郊に至るをいふ、送別のためなり。【七〇】 賦 乃ち。【七一】 酸鼻 悲しくて鼻がつかまる様なるを
 いふ。

【題義】 顧戒奢が江西の洪州・吉州へゆくのを送つた詩。黄鶴は大曆三年秋、公安にての作とす。

【詩意】 蔡中郎が石經を書いた以後は八分の書體はけだしやつれ衰へた。そこへ顧君（戒奢）は自ら鍛錬工夫して、その筆力は蔡邕以外の地を開拓した。むかし玄宗皇帝の開元年中に韓（擇木）・蔡（有鄰）も顧君と同じく八分に力をつくした。玄宗は八分の書體に工妙でおはしたによつて、そのため顧

君等の二三人が天子のところへまゐり、天子の御書も天下に早く流傳した。天子が彼等の書をおほめになつたことは決してあわててさやうなことをなさつたわけではなく沈思のあまり事實だからさやうにあそばされたのである。顧君等三人はともに禁中に宿直しおかみから三人同一の恩澤を蒙つた。顧君は韓蔡等の中では眼が明かで小字に巧みであつた。月の内でそれぞれ日を分ちて諸王のおそばへも出た、彼は奥ふかいところまで書法をさぐり求めたが、その法はさぐればもつとかくれたところに妙をもつてゐた。顧文學が自分と遊ぶや、彼はさびしくして世間的の名聲や利益をよそにみてゐた。彼と我は二十年もくつついてゐるが長安での酒酔ひはとりとめもなきものであつた。卿相の宅で高聲で歌をうたひ、省とか寺とかの官衙では文章をつくつては書きなぐつた。彼は自分を揚雄・司馬相如のあひだに視て、たとひ白髪にならうとこの交は棄てまいといふ風であつた。さうしてこの千里の馬はじぶんのせまいこうちへはひるといつも黄金の飾のついた手綱をぬぎすてて酒の代にしてしまつた。ひとたびかやうに實際の容易でないことをかたりあうたあひだがらでは晩年になつてもその交を失墜させることはできぬ。むかしから朋友の交は前後ひつくりかへつたものだ、それにわれわれはかはらぬのであるからおたがひに顔を見てはなみだをながした。以前長安時代とともに玉珂を鳴らして參朝した人人、そのなかにだれか青雲の高位にのぼつた人物があるか、あぬではないか。自分は文才盡きて形骸のみとなつたことをいたみ、消渴の病にかかりながら郎官の官位を汚してゐる。そんなものに

對しても我がふるなじみ(顧君)だけは依然としてむかしのままのよしみをもつて、この危い時世に社會の底へころげつまついてゐるさまをはなしあふ。」自分は多病で老いゆくことに甘んじてゐるが、君は世事を憂ふる志をもつてゐる。なんで衣食の乏しきに困しみ、氣にくはぬことばかりだといふ様な顔つきをして、遠くなんぎな旅行をして、凡俗多數人の意に従ふ様にしようといふのか。舟や楫は根蒂をもたぬ不安定なものであり、蚊や蠍はよくたたりをする。そのうへ水上の盜賊がたくさんゐる、特に風やつむじかせのはやく吹くことに氣をつけなければならぬ。戎馬のみだれたちあがれる際には、ときどき一地方の長官をも殺したりすることがある。君は東方の諸侯へ干謁にゆくのであるが、その人たちに勸め勉めしめてわがまをやめさせる様にしなければならぬ。邦は民を以て本とする、魚が饑ゑたときは香しい餌をたくさん與へる必要がある。人民は饑ゑた魚だ。どうぞ人民の深いきずをおうてゐることをあはれんで、そのことを天子の使者たる人に訴へられよ、その使者は部下を擇ぶには精密にしなければならぬ、部下といふものはひくい階級の職からへのぼつてだんだんいろいろの艱難を歴てから徳に進むものだといふことを使者は知らねばならぬ。」人民がいま上から誅求されて抱いてをる情に對して惻隱の心を起すことは、その人の賢愚に應じて深淺のちがひがあるだらうが、烈士たるものは道理なしにただなにかを得さへすればよいといふ様なことは惡むものであり、俊傑たるものは機會あらば自己を要路に置きたいとおもふものである。(君は俊傑・烈士でないか)。自分は君に猛虎行の詩を贈りたいとおもふ。君を送るために郊野まででてくると酸鼻の悲しさにたへられぬ。こここのところをかんがへてくれたまへ。」

官亭夕坐、戲簡顏十少府

官亭夕坐、戲に顏十少府に簡す

南國調寒杵、西江浸日車。

南國寒杵調ふ、西江日車を浸す。

客愁連蟋蟀、亭古帶蒹葭。

客愁蟋蟀に連る、亭古りて蒹葭を帯ぶ。

不返青絲鞵、虛燒夜燭花。

返らず青絲鞵、虚しく燒く夜燭の花。

老翁須地主、細細酌流霞。

老翁地主を須つ、細細流霞を酌まむとす。

【字解】【一】官亭、公安縣の縣尉の官舎の亭。【二】調寒杵、寒杵は冬衣を撈つきれ、調とはうちおろすひびきのととのへるないふ。【三】西江、大江をいふ。【四】浸日車、日車は太陽、已にみゆ。【五】蟋蟀、こほろぎ。【六】蒹葭、あし、よし。【七】青絲鞵、青ききぬ糸のたづな。顏少府馬のりてそとへ出てゆきしとみゆ。【八】老翁、自己をいふ。【九】地主、土地の主人、顔をさす。【一〇】流霞、酒をいふ、已にみゆ。

【題義】公安の官亭で夕方すわつてゐたとき戲れに顏少府に手紙代りにやつた詩。酒をねだつた作り。大曆三年秋、公安にての作。

【詩意】南國では寒天搗衣の杵の音も調子よく、大江の水面には日の光を一面にひたしてゐる。こほろぎが鳴くにつれて自分のたびの愁もそれとともに起こる。亭はものさびてまはりによしあしの草がみだれしげつてゐる。青絲のたづなをたぐつて出た人はどこまでいつたかいまに返つてこぬ、いたづらに燭の火花がぼこぼこしてゐるばかりである。このおやちは主人役のおかげによつてちびりちびりと酒を酌みたいとおもうてゐるのである。

移居公安敬贈衛大郎鈞

衛侯不易得。余病汝知之。

居を公安に移すとき、敬みて衛大郎鈞に贈る。衛侯得易からず、余が病汝之を知る。

雅量涵高遠。清襟照等夷。

雅量涵すこと高遠なり、清襟等夷を照らす。

平生感意氣。少小愛文詞。

平生意氣に感ず、少小より文詞を愛す。

江海由來合。風雲若有期。

江海由來合す、風雲期有るが若し。

形容勞宇宙。質樸謝軒墀。

形容宇宙に勞す、質樸軒墀を謝す。

自古幽人泣。流年壯士悲。

古より幽人泣く、流年壯士悲しむ。

水煙通徑草。秋露接園葵。

水煙徑草に通ず、秋露園葵に接す。

入邑豺狼鬪。傷弓鳥雀飢。邑に入れば豺狼鬪ふ、弓に傷みて鳥雀飢う。

白頭供宴語。烏几伴棲遲。白頭に宴語を供す、烏几に棲遲に伴ふ。

交態遭輕薄。今朝豁所思。交態輕薄なるに遭ふ、今朝所思豁なり。

【字解】「一」衛大郎 作者の性に鈞とあるは此の人の名なり。大郎とあれば衛伯玉の長子なるべきか。【二】余病 病とは缺點をいふ。【三】雅量 みやびな度量。【四】清襟 すつきりとしたむね。【五】等夷 同輩。【六】意氣 奮発の意氣。【七】少小 年少、幼につさいふ。【八】江海由來合 上の意氣を承く、江水と海水とは本來合流す、意氣の投合するをいふ。【九】風雲若有期 風雲と會する期あるに似たり。此の句上の文詞を承く。立身の見込みあるをいふ。【一〇】勞宇宙 宇宙の間に於て疲勞する。【一一】質樸 軒墀はのさば、どえん、宮殿のそれをいふ。【一二】入邑 邑は縣邑。【一三】傷弓 弓の音をさきて心をいためる、射らるるを恐るるなり。【一四】供宴語 衛鈞が宴語を作者に供してくれるなり、宴語は宴席にてのものなり。【一五】烏几 黒皮を張りたる脇息。【一六】棲遲 安居をいふ。【一七】交態遭輕薄 世俗につさいふ。【一八】豁 くるぎたるをいふ。

【題義】居處を公安に移したころ、衛鈞に贈つた詩。大曆三年秋、公安にての作。

【詩意】自分の缺點のあることは君はよく知つてゐるのだ、それに自分を見棄てぬといふは、君はじつに得易からざる人だ。君の雅量が他物をひたすことは高く且つ遠く、君の清らかな襟懷は同輩にてりかがやいてゐる。君はわかいたときから文詞を愛してゐるから、他日必ず風雲に會する期がある様におもふ、自分は平生君の意氣に感じてゐるが、君と自分とは意氣の投合してゐることは江水が海水と本來合流する様なものだ。自分は宇宙のあひだにつかれて、質樸を守つて宮殿などからとほざかつ

てをる。むかしからわびすまひをする人物は泣いてをる、年月の流るるを見ては壯士も悲しむのである。いま小みちに生えた草には水煙が通じてよこたはり、園に生えてゐる葉には秋の露がつづいてゐる。縣邑にはひつてみれば豺狼がたたかうてをり、弓づるの音に心をいためては鳥雀が飢ゑつつある。かやうなときに君はこの白頭の自分に宴語を供してくれ、鳥凡によつて隠居してゐるものつれになつてくれる。世間交際のさまの輕薄な時節に君の様な人にあうたため、けさはいつもの思ひがはればれとくつろいだ様な氣がする。」

公安送韋二少府匡贊

公安にて韋二少府匡贊を送る

逍遙公後世多賢

逍遙公の後世、賢多し、

送爾維舟惜此筵

爾を送りて維舟此の筵を惜む。

念我能書數字至

我を念はば能く數字を書して至らしめよ

將詩不必萬人傳

詩を將て必ずしも萬人に傳へず。

時危兵革黃塵裏

時は危し兵革黃塵の裏、

日短江湖白髮前

日は短し江湖白髮の前。

【字解】 〔一〕 逍遙公 北周の韋

賢、高を愛ひて仕へず、明帝號して逍遙公となす、唐の韋嗣立、中宗之を封じて逍遙公となす、嗣立が後を小逍遙公の房となす。韋匡贊は韋賢の系統に屬する子孫とみゆ。〔二〕 送爾爾とは匡贊をさす。〔三〕 維舟 衆舟に同じ、作者自らの塊をいふ、次篇にも維舟倚前浦とみゆ。〔四〕 此

古往今來皆涕淚

古往今來皆涕淚、

斷腸分手各風煙

斷腸す手を分てば各風煙なるに。

註、この送別の難處。〔三〕 書數字 至、匡贊に向ひ信書を寄せよといふなり。〔四〕 將詩 詩は作者の詩。

【題義】 公安で縣尉韋匡贊が他處へゆくのを送つた詩。大曆三年秋の作。

【詩意】 北周の逍遙公（韋賢）の子孫たる人には世世賢人が多い、（君もそのひとりだ。）自分はいまここに舟をつないで君を送るにつけてこの別筵を惜むのである。君は自分のことを念うたときには消息をよこしてくれ。ただ自分が君に見せる時はやたらに萬人に傳へ示す必要はない、（心ある人にだけならよいが。）兵革おこつて黃塵みなざりて時世は危険である。江湖ひろく已に白髮を生じてゐる自分の眼前には日景が短くなつてきた。むかしも今もおなじ様に涙をながすことである、これから手を分てばめいめい風煙をへだててしまふのであるとおもふと腸がちぎるるばかりである。

公安縣懷古

公安縣の懷古

野曠呂蒙營、江深劉備城。

野は曠し呂蒙が營、江は深し劉備が城。

寒天催日短、風浪與雲平。

寒天日の短きを催す、風浪雲と平かなり。

灑落君臣契、飛騰戰伐名。

灑落なり君臣の契、飛騰す戰伐の名。

維舟倚前浦。長嘯一含情。維舟前浦に倚る、長嘯一に情を含む。

【字解】【一】呂蒙督公安縣北二十五里にあり、呂蒙が兵を屯せし所。蒙は呉の孫權が將なり。【二】劉備城。公安の城をいふ、厚板城ともいふ、孫權、劉備を推して左將軍・荊州牧とし、油口に鎮せしむ。時人備を號して左公となす、故に其の城を公安と名づくといふ。【三】灑落君臣契。劉備の君臣をいふ、灑落はさちり、さつぱりの貌、君臣契とは劉備、關羽・張飛を得て兄弟の交りを結び、諸葛亮を得て水魚の交りを結ぶをいふ。【四】飛塵戰伐名。呂蒙についていふ。呂蒙皖城を破りしとき軍士皆塵塵して升る、蒙、塵塵の賊帥を擒にするや、孫權其の百鳥も一鵲に如かざるを稱す、これ戰伐に飛塵の名ある所以なり。

【題義】公安縣でむかしの三國時代の事をおもうた詩。大曆三年秋の作。

【詩意】呂蒙の營があつたところには原野がひろく横はり、劉備が居たといふ城のそばには江が深くよこたはつてをる。いま寒天に日景はつまりつつあり、風浪は雲とひとしい様に高く起つてゐる。おもへば劉備等の君臣の契は灑落なものであつたし、呂蒙は飛塵せる戰伐の名をあげたものだ。自分は前浦によりそつて舟をつなぎ、こんなことをかながへこんで長く嘯してゐる。

呀鵲行

呀鵲行

病鵲孤飛俗眼醜。

病鵲孤飛俗眼醜とす。

每夜江邊宿衰柳。

每夜江邊に衰柳に宿す。

【字解】【一】呀鵲行。呀は口を張る貌、鵲は「たか」のたぐひ。呀鵲行とは口をあげた鵲鳥のうた。或

清秋落日已側身。

清秋落日已に身を側つ、

過雁歸鴉錯迴首。

過雁歸鴉錯つて首を迴らす。

緊腦雄姿迷所向。

緊腦の雄姿向ふ所に迷ふ、

疎翻稀毛不可狀。

疎翻稀毛狀す可からず。

彊神非復皂雕前。

彊神復た皂雕の前に非ず、

俊才早在蒼鷹上。

俊才早く蒼鷹の上在り。」

風濤颯颯寒山陰。

風濤颯颯たり寒山の陰、

熊羆欲蟄龍蛇深。

熊羆蟄せむと欲して龍蛇深し。

念爾此時有一擲。

念ふ爾が此の時一擲有らむことを、

失聲濺血非其心。

聲を失し血を濺ぐは其の心に非ざらむ。」

【一】俊才。すぐれたはたらき。【二】蒼鷹上。蒼鷹よりもうへ、すぐれたること、此の句は過去につきいふ。【三】過雁。過雁の吹くさま。【四】龍蛇深。深とは深く潜まんとするをいふ。【五】緊腦。鵲をさす。【六】側身。側とは上方より下方へ身を投げおとしてくだるをいふ、他物を撞撃するときのさま。【七】失聲。つれのなきこゝろのでめこと。【八】濺血。きすつきて血を流すをいふ。【九】非其心。其の本心にあらざらん、其とは鵲をさす。

【題義】口をあきたる鴝鳥のことをよんだ詩。自己をたとへしこと「瘦馬行」と似たり。作時は詳かならず、仇氏曰く、蔡夢弼は大曆三年江陵の詩の内に編したり、江邊・秋日の語あるを以てなり。然れども夔州にありても亦た言ひうべし、と。誠に然り。

【詩意】世間の眼には醜しとされて、病める鴝がひとつで飛んでゐるが、この鴝はまいばん江のほとりて衰へた柳にとまつてゐる。秋の夕日にはやこの鴝が身をそばだてるとおそれなくともよいのにとほりかかつた雁だのねぐらにかへる鴝があやまつて首をふりむけてみる。ありしむかしのひきしまつた首つきの雄姿も今ではどちららむきに飛んでよいかさへわからず、その抜けきつてまばらな鬣や毛のざまといふたらなんと形容の仕様もないみすばらしさだ。これでもすつと早いころはその俊才は蒼鷹以上であつたのだが、いまはとてふたたび黒だかの前に立てる精神ではない。今や冬寒の山のかげには風濤颯颯とうごいて、熊や罽は穴ごもり、龍蛇は深くひそまんとしてゐる。このときおまへ(鴝)も獲物に向つて一撃を加へたらよからうにとおもふ、血をながしつづつ鳴きこゑもだせぬといふはよもや本心ではあるまい。」

宴王使君宅題二首

王使君が宅に宴して題す 二首

漢主追韓信、蒼生起謝安。

漢主韓信を追ひ、蒼生謝安を起す。

吾徒自漂泊、世事各艱難。

吾が徒自ら漂泊す、世事各艱難。

逆旅招要近、他鄉意緒寬。

逆旅招要近く、他郷意緒寬なり。

不才甘朽質、高臥豈泥蟠。

不才朽質に甘んず、高臥豈に泥蟠ならむや。

【字解】

【一】王使君 某州の刺史王某、邵注に王は必ず荆州の人にして邑中に閉居せし者ならんといへり。【二】漢主追韓信 漢主は漢の高祖、韓信を追ひかけしものは蕭何なり。高祖關中に入らんとせしとき諸將道よりにぐるもの多し、蕭何、韓信亡くととき自ら之を追ふ。蕭何の意は即ち高祖の意なりとみてかく言を立てたり。【三】蒼生起謝安 晉の謝安東山に高臥す、人民、安石(謝安が字)出でずんば其れ蒼生を如何にせんといひたり。【四】吾徒 自己と王使君とをこめていふ。【五】各艱難 各とは自己と王使君とを別別にみていふ。【六】逆旅 旅舎、荆州の客寓をさす。【七】招要近 要は道なり、むかへること、招道とは王使君が作者を宴にまねきむかふるをいふ、近とは作者の寓居と王宅と近きをいふ。【八】意緒寬、こころがくつろぐ。【九】泥蟠 龍をいふ、「揚子法言」に、龍蟠於泥、とみゆ。尾二句は謙遜していふ。

【題義】

かつて刺史の職をつとめたことのある王某の宅でさかもりせしときかきつけた詩。大曆三年秋、荆州にての作なるべし。

【詩意】

むかし漢の高祖は將才を惜んで韓信がにげたときはそれを追ひかけさせた。また晉の人民たちは謝安が宰相の器であることを知つてそれを起ちあがらせた。古人はさうであるが、われわれはそれとちがつてめいめい世事の艱難にであうて、自ら漂泊してをるのである。幸にあなたとの住居が近いので自分は客寓の身ながらお招きにあづかり、他郷に於てこころがくつろぐこころがする。自分は

不才のもので朽ちたる質であることに甘んじてゐるものである。隱居して高枕で臥てゐるのも決して龍が泥のなかにわだかまつてゐる様なものではない、龍ならば風雨を得てたちあがるかも知れぬのだが、自分はほんたうに不才なためくすんでゐるのである。

〔二〕

〔二〕

汎愛容霜鬢、留歡卜夜閒。

汎愛霜鬢を容れ、留歡夜閒を卜す。

自吟詩送老、相對酒開顏。

自ら詩を吟じて老を送り、酒に相對して顏を開く。

戎馬今何地、鄉園獨在山。

戎馬今何の地ぞ、鄉園に獨り山に在り。

江湖墮清月、醅酎任扶還。

江湖清月墮つ、醅酎扶還に任す。

【字解】〔一〕汎愛、ひろく愛する。〔二〕霜鬢、自己の老態をいふ。〔三〕留歡、ひきとめてよろこばせる。〔四〕夜閒、夜のひまなとき。〔五〕鄉園、獨り山。此の句は仇氏・浦氏並に王使君につきいふとす、然らば「荆州の鄉園に於て王君のみは山中に在り」の意が、暫く之に依る。

【詩意】あなたはひろく衆人を愛してそのなかに自分の様な鬢に霜をおいたものをも容れてくださつて、夜のひまなをりをとじてひきとめてよろこばせてくださる。自分はひとり詩を吟じて老いさきを送り、酒とうちむかうてにこにこする。今は戎馬がどの地に起つてゐるか、どの地ともいへぬほどすべて戎馬の地であらうが、そのをりにあなただけは故郷の園で山中に高臥してをられる。(うらやましい。)自分は江湖にすんだ月が落ちるとも、十分に酔うて人に扶けられて還らうともかまはぬ、のみあかしませう。

送覃二判官

覃二判官を送る

先帝弓劍遠、小臣餘此生。

先帝弓劍遠し、小臣此の生を餘す。

蹉跎病江漢、不復謁承明。

蹉跎江漢に病み、復た承明に謁せず。

餞爾白頭日、永懷丹鳳城。

爾を餞す白頭の日、永く懷ふ丹鳳城。

遲遲戀屈宋、渺渺臥荆衡。

遲遲として屈宋を戀ひ、渺渺荆衡に臥す。

魂斷航舸失、天寒沙水清。

魂は斷ゆ航舸の失はるるに、天寒くして沙水清し。

肺肝若稍愈、亦上赤霄行。

肺肝若し稍く愈えば、亦た赤霄に上りて行かむ。

【字解】〔一〕覃二判官、其人詳かならず。〔二〕先帝、肅宗。〔三〕弓劍遠、帝の崩御をいふ、黃帝の故事。黃帝龍に騎り天にのぼる、小臣龍の髣乎持す、髣乎けて墮つ、黃帝の弓を墮すと。また黃帝橋山に葬られしに山崩れ、棺蓋しく尸無くして唯だ劍と弓とありしと。〔四〕承明、漢時の宮中宿直の盧の名、石渠閣外に在りしといふ。〔五〕爾、覃をさす。〔六〕丹鳳城、長安の宮城、正南の門を丹鳳門といふ。〔七〕遲遲、路ゆくこととはかばかしからぬさま。〔八〕屈宋、屈原、宋玉。〔九〕渺渺、はるばる、故郷の地よりいふ。〔一〇〕荆衡、荆門衡山、衡山にはまたゆがざれどひろく南土をいふ。〔一一〕航舸失、舸は小舟、覃ののれる舟、失とは見失

ふないふ。【三】肺肝 肺肝の病をいふ。【二】愈 いゆ、なほる。【四】赤霄 あかきそら、崑崙山のうへに赤霄あり、今借りて宮城の天をいふ、之を殿名ととくは當らず。

【題義】判官覃某が長安へかへるのを送つた詩。大曆三年秋、荊州にての作ならん。

【詩意】先帝（肅宗）が崩御あそばされて弓劍と遠くへだたり、小臣はなほいきのこつてゐる。さうして志を遂げずして江漢の地方に病んで、また承明の直廬へでむいておめみえをすることをせすにをる。いま白頭の老境に於ておまへを送るにつけては丹鳳城がいつまでもしたはしくおもはれる。』
自分は屈宋の文才を慕ふかの如くここにぐづぐづしながら、はるけくも荆衡の南土に臥てゐるのである。天は寒く沙を帯びた水は清らかになつてゐる。おまへののつた小舟が見えなくなるにつけてじぶんの魂は断ちきられる様だ。肺肝の病氣がもしだんだんはつたならば、自分もまたおまへの様に宮城の赤い霄をさしてのぼつてゆかうとおもふのである。』

公安送李二十九弟晋肃入蜀余下沔鄂

公安にて李二十九弟晋肃が蜀に入るを送る、余は沔鄂に下らむとす

正解柴桑纜、仍看蜀道行。正に解く柴桑の纜、仍りて看る蜀道に行くを。

橋烏相背發、塞雁一行鳴。橋烏相背きて發す、塞雁一行鳴く。

南紀連銅柱、西江接錦城。南紀銅柱に連る、西江錦城に接す。

憑將百錢卜、漂泊問君平。憑りて百錢の卜を將て、漂泊君平に問はむ。

【字解】【一】李二十九弟晋肃 李晋肃は李賀（字は長吉）の父、韓愈之がために諱辯を著はせしを以て知らる。晋肃作者より年少者なるにより弟といふ。【二】沔鄂 沔は湖北漢陽府、鄂は武昌府。【三】柴桑 柴桑は縣の名、今の江西九江府城南にあり、陶淵明の郷里なり、柴桑纜とは柴桑へ向はんとするともづなをいふ。朱注に、「作者、この冬公安を發して岳陽に至れり、然るに題に沔鄂に下らんとすといひ、詩に、正解柴桑纜といふは蓋し作者、この冬沔鄂より東に下らんと欲せしに、後ち果さずして乃ち岳陽にゆきしのみ」といへり。實に江西にゆかんとせしや一時の興をのべしやの不明なること余前に已にいへり。【四】仍看 仍とは吾が行ともにもそのままたの意。【五】蜀道行 蜀の道へとゆく、題の入蜀をいふ。【六】橋烏 橋烏、風見のからす。【七】塞雁 長城よりわたる雁、雁は發れて兄弟の情をいふ、晋肃を弟といふによりてなり。【八】一行 ひとつら。【九】南紀 江漢の水をいふ。【一〇】銅柱 交趾にあり、卷十六「諸將」をみよ。【一一】西江 大江。【一二】錦城 成都の城。【一三】沔 君によりての意。【一四】百錢卜 漢の賈逵、字は君平、成都に賣卜し、一日に百錢を得れば肆を開ち蓍を下したりといふ。【一五】漂泊 何時漂泊の運命より免るを得べきやにいつて。【一六】問君平 君平が事、かみにみゆ。

【題義】公安で李晋肃が蜀にはひらうとするのを送つた詩。そのとき自分は沔鄂の方へくだるつもりであつた。大曆三年冬の作。

【詩意】自分はやうど柴桑に向ふためのもづなを解かうとするとき、また君が蜀道の方へ行かうとするのをみる。おたがひの舟の橋烏は背あはせになつて出發するが、をりもをりとして長城からわたる雁がひとつら悲しげに鳴きたてる。江漢の水は自分のゆく方向では銅柱のあたりまで連つてゐる。

が、江水は同時に君のゆく方向では錦城にまで接してゐるのだ。自分は成都にゆく君にたのんで百錢のトをしてもらつてじぶんの漂泊生活がいつやむかについて嚴君平にたづねてもらひたいとおもふ。

留別公安太易沙門 公安の太易沙門に留別す

隱居欲就廬山遠 隱居就かむと欲す廬山の遠、

麗藻初逢休上人 麗藻初めて逢ふ休上人の

數問舟航留製作 數 舟航を問ひて製作を留む、

長開篋笥擬心神 長に篋笥を開きて心神を擬す。

沙邨白雪仍含凍 沙邨の白雪仍は凍を含む、

江縣紅梅已放春 江縣の紅梅已に春を放つ。

先踏爐峰置蘭若 先づ爐峰を踏みて蘭若を置き、

徐飛錫杖出風塵 徐ろに錫杖を飛ばして風塵を出でよ。

【字解】 〔一〕留別 詩をとどめて別るること。〔二〕太易沙門 太

易は僧の名、沙門は梵語、僧のこと。漢音にては息心の義。劉曼出家、絶情洗意、而歸於無爲をいふなり、と。〔三〕廬山遠 廬山の遠なり、と。〔四〕麗藻 法華のこと、已にみゆ。〔五〕麗藻 文詞のあやあるをいふ。〔六〕休上人 宋の湯惠休をいふ、詩を能くするにより宋の世祖之を遷俗せしむ。〔七〕舟航 舟航、自己のふれ。〔八〕製 作 太易の詩。〔九〕篋笥 は、先踏爐峰 爐峰は廬山の香爐峰、この句と次句とは太易についていふか、作者自己についていふかに就いて異説あり。余は太易に就いていふとみる。〔一〇〕蘭若

寺のこと、已にみゆ。〔三〕飛錫杖 陳延敬が説に、この飛錫は廬山の神仙の事を用ひたるなりと。晉の太元十一年に廬山の陽に樂和りせし男が法衣をつけた一沙門の巖中より錫を揮うて空へのほりきえうせしを見たる話、漢方生が廬山神仙詩序にみゆといへり。しかし普通にいふ飛錫上人が飛錫の故事にても義は通すべし。

【題義】 公安縣の僧太易に別れんとてのこした詩。大曆三年冬、公安にての作。

【詩意】 自分はここで初めて文詞のあやうるはしいこと惠休上人の様な人にあうたが、じぶんは隱居して廬山の慧遠法師の様な人に就かうとおもうてゐるのだ。あなたはたびたびわたくしの舟をおとづれておつくりになつた詩をとどめおかれた。それに和作でもしようかとじぶんはいつも文庫のふたをあけてあなたの心にせよとした。いま沙邊の村の白雪はまだこほり氣を含んではゐるが、江ぞひの縣の紅梅ははや春色を放ちだした。あなたは先づわたくしよりさきに廬山の香爐峰を踏んでお寺を置き、それからしづしづと錫杖を飛ばしてこの下界の風塵からぬけでる様になされたい。(さうしたらわたくしもあとからあなたにつき従ひませう。)

久客

久客

羈旅知交態 淹留見俗情 羈旅交態を知る、淹留俗情を見る。

衰顏聊自哂 小吏最相輕 衰顏聊か自ら哂ふ、小吏最も相輕んず。

去國哀王粲、傷時哭賈生、
去國王粲哀しみ、傷時賈生哭す。
狐狸何足道、豺虎正縱橫、
狐狸何ぞ道ふに足らむ、豺虎正に縱橫なり。

【字解】(一) 王粲、長安の亂にあひ去つて荆州の劉表に依る、以て自ら比す。(二) 賈生、漢の賈誼、誼、文帝に上書して、時事痛哭すべきもの一、流涕すべきもの二、長大息すべきもの六といへり、以て自ら比す。(三) 狐狸、豺虎、後漢の張綱曰く、豺狼當道、安問狐狸、と。狐狸は小吏に比し、豺狼は亂賊に比す。

【題義】久しく他郷に客たることをのぶ。此の詩の作時作地共に詳かならず、黃鶴は廣徳二年閬州の詩内に編し、蔡夢弼は大曆三年、江陵の詩内に編したり。暫く疑を存す。

【詩意】旅の身のうへでゐると人の交際のさまがわかるし、ながく逗留してをると世俗の人情が見えてくる。じぶんは老衰した顔つきになつたについてじぶんながら笑ひいでられるが、小役人などいふものはいちばんひとの老衰したものを輕蔑するものである。故國を立ち去つて王粲はかなしみ、時事を傷んで賈誼は痛哭する。(じぶんのこころもちがそれだ)狐狸の如き小吏などはいふに足らぬ、そのうへの豺虎の様な大盜賊が縱横にみだれてゐることが最も氣になるのである。

冬深

冬深し

花葉惟天意、江溪共石根、
花葉惟だ天意、江溪共に石根。

早霞隨類影、寒水各依痕、
早霞類に隨ひて影あり、寒水各、痕に依る。

易下楊朱淚、難招楚客魂、
下し易し楊朱の淚、招き難し楚客の魂。

風濤暮不穩、捨棹宿誰門、
風濤暮に穩かならず、棹を捨て誰が門にか宿せむ。

【字解】(一) 花葉、霞狀をいふ。(二) 江溪、江は大江、溪は他の細流をいふならん。仇氏の如く本篇が公安出發以後の作ならば湘水などをさすならん。(三) 早霞隨類影、此の句は花葉の句を承く、早霞は晨霞、隨類影は趙注には「類影に隨ふ」と訓す、余は類に隨つて影ありと訓す。類とは花ならば花、葉ならば葉、その類する所のものをいふ、その類のまにまに影を生ずるをいふ。(四) 寒水各依痕、此の句は江溪の句を承く。痕は石根にのこれる水のあとなり。(五) 楊朱淚、戰國の頃楊朱は歧路に泣く、その南すべく北すべきを以てなり。作者も南北いづれにゆくべきかに迷ふ。(六) 難招楚客魂、「楚辭」に招魂あり、屈原の生魂を招く、以て自己の魂に比す。(七) 捨棹、捨はおく、棹はさをなれど、こは舟楫の意、ひろくいへるものにて船上生活をさす。

【題義】冬の深きころの詩。此の篇も作時作地詳かならず。黃鶴は雲安の詩内に編し、蔡夢弼は夔州の詩内に編せり。仇氏は公安を發せし以後の作なるべしとせり。

【詩意】花にしようと葉にしようとは唯だ天の意のままで、朝霞はおのおのその類に隨つて花なり葉なりの様に姿をあらはしてをる。江水から溪水と水はかはつてもその岸壁の石根はどちらも石根であつてその石根に寒天の水はそれぞれ増減の痕跡をのこしてゐる。かく光景のうつりかはりを見るにつけても、自分は歧路に泣いたといはるる楊朱の様な涙をくだしやすく、また楚客の生靈は招かうと

してもまねくことはむづかしい、(だからその魂は散亂してしまはうとする)。夕ぐれには風濤がおだやかでなくなつてきた。棹一本をおいてはだれの門に宿らうぞ、やどるべきところはないのである。

曉發公安 〔原注〕數月憩息此縣

曉發公安を發す 〔原注〕數月此の縣に憩息す。

北城擊柝復欲罷 北城の擊柝復た罷まむと欲す、

東方明星亦不遲 東方の明星も亦た遅からず。

隣雞野哭如昨日 隣雞野哭昨日の如し、

物色生態能幾時 物色生態能く幾時ぞ。

舟楫眇然自此去 舟楫眇然此れより去らむ、

江湖遠適無前期 江湖遠適前期無し。

出門轉眄已陳跡 門を出て轉眄すれば已に陳跡なり、

藥餌扶吾隨所之 藥餌吾を扶けて之く所に隨はむ。

家の雞の鳴きこゑ。〔一〕野哭 人民の原野に慟哭するこゑ、戦死者などをかなしみてなり。〔二〕物色 事物の景色、山川草木等皆

是れなり。〔三〕生態 人民の生活の狀態。〔四〕能幾時 幾何の時期存續し得るぞの意。〔五〕遠適 とほくゆく。〔六〕無前期 どこにおちつくといふ前途の期會なし。〔七〕轉眄 ちよつとみかはすあひだ。〔八〕陳跡 ふるびたあと。

【題義】あかつきに公安を出發せしときの詩。大曆三年の冬、公安より岳陽に往くときの作。

【詩意】北城の拍子木をうつおとがやみかけてゐる。東にかがやいてゐる明星の消えるのもおそくはあるまい。雞の鳴きこゑ、野らの慟哭は依然として昨日にかはらぬ、物象のすがた、人の生きつづけるさまは、どれだけもちつづけられるものか。(さほどながくはあるまい。)じぶんはこれから舟楫によつてはるかにここからたち去るのであるが、江湖の地方へとほくでかけたとどこにおちつくといふめあてもないのである。一步門外へふみだしてふりかへつてみれば昨日のあとにははやふるびたものになつてゐる。これからじぶんは藥餌の力に扶けられつつゆけるところまでゆけるままにゆかう。

發劉郎浦 劉郎浦を發す

掛帆早發劉郎浦 帆を掛けて早に發す劉郎浦、

疾風颯颯昏亭午 疾風颯颯亭午昏し。

舟中無日不沙塵 舟中日として沙塵ならざるは無し、

曉發公安 發劉郎浦

【字解】〔一〕劉郎浦 浦の名、石首縣に在り、石首は公安の東南にあたる。劉郎が孫權の妹を娶りし處なりといふ。〔二〕風未道 道とは

岸上空邨盡豺虎。岸上の空邨盡く豺虎。」

十日北風風未迴。十日北風風未だ迴らず、

客行歲晚晚尤相催。客行歲晩に晩尤も相催す。

白頭厭伴漁人宿。白頭漁人に伴ひて宿することを厭ふ、

黃帽青鞋歸去來。黃帽青鞋歸り去らむ來。」

がへりなんといふなり。

風のむきかはるをいふ、北風が南風となれば迴なり、作者は南行するものゆゑ北風は便なり、故に次句にある如く舟人は航行をいそぐ。【三】晚尤相催。晚の字は無意義なり、尤に従ふべし。催とは行をせかすをいふ。【四】黃帽青鞋。野人の服。【五】歸去來。歸り去らん來、故郷に

【題義】劉郎浦を出發して南行するときの詩。大曆三年冬、岳陽に向ふをりの作。

【詩意】朝はやく帆をかがけて劉郎浦を出發した。疾風が颯颯と吹いて沙ほこりのためまひるときもくらい。舟中では沙ほこりのたたぬ日とはなく、岸上の人なき村にはどこも豺虎の様な盜賊ばかりである。北風の吹きつづけること十日になるが風はむきかはらぬ、それで歲晩になりかけてをるるりではあり旅程をことさらいそがせられるのである。白頭の身になつては漁人といつしよに宿つたりすることははいやになつた、黃帽をかむり青鞋をはいて早く故郷へかへりたいものだ。」

別董道

董道に別る

窮冬急風水。逆浪開帆難。

窮冬風水急なり、逆浪帆を開くこと難し。

士子甘旨闕。不知道里寒。

士子甘旨闕く、知らず道里の寒きを。」

有求彼樂土。南適小長安。

彼の樂土を求むる有り、南小長安に適く。

別我舟楫去。覺君衣裳單。

我が舟楫の去るに別る、君が衣裳の單なるを覺ゆ。

素聞趙公節。兼盡賓主歡。

素より聞く趙公の節、兼ねて賓主の歡を盡くさむ。

已結門閭望。無令霜雪殘。

已に門閭の望を結ぶ、霜雪をして殘はしむること無かれ。」

老夫纜亦解。脫粟朝未餐。

老夫纜亦た解く、脱粟朝に未だ餐せず。

飄蕩兵甲際。幾時懷抱寬。

飄蕩兵甲の際、幾時か懷抱寬ならむ。

漢陽頗寧靜。峴首試考槃。

漢陽頗る寧靜なり、峴首試みに考槃せよ。

當念著皂帽。采薇青雲端。

當に念ふべし皂帽を着けて、薇を青雲の端に采ることを。」

【字解】【一】董道。其人未だ詳かならず、母を養はんため職仕せんとするものとみゆ。【二】逆浪。むかへなみ。【三】士子。讀書人。【四】甘旨。甘旨。その母親に供すべきうまいものがない。「禮記」内則篇に、昧爽而朝、慈以甘旨、(鄭玄の注に慈とは愛敬)

【一】之なりといへり」とみゆ。【二】樂土。安樂の國土、語は「詩」にみゆ。【六】南通。鄧州は地理上よりは楚別の地の北にあつたれども、南京よりの方位によりかくいへるならん。【七】小長安。乘（村落）の名、河南鄧州南陽縣南にありと。【八】舟楫去。舟楫によりてゆくの意。【九】趙公節。趙公は鄧州の長官。【一〇】賓主歡。賓は董をさし、主は趙をさす。【一一】結門闕。母親に待ちこがれらるるをいふ。「戰國策」に、齊の王孫賈の母、賈に問ひて曰く、汝朝に出て暮に歸れば、吾、門に倚りて望む、汝、暮に出てて還らざれば、吾、闕（村里のはづれの門）に倚りて望む、とみゆ。門闕とは門闕に倚りてかへりを望むなり、結望とはさほどの望みをつながるるをいふ。【一二】霜雪殘。母老いたれば霜雪にあへば殘害せられやすし。【一三】老夫。自己をさす。【一四】駭栗。支米。【一五】懷抱寬。むねのうちがくつろぐ。【一六】漢陽。湖北の漢陽府、漢水の口にあり、鄧州へゆくには漢水を渡り、襄陽をらむ。【一七】寧靜。兵亂なきをいふ。【一八】峴首。峴山の頭、峴山は湖北襄陽府にあり、晉の羊祜の墾漢碑あり、名所なり。【一九】試考祭。考祭とは盤桓（ぶらぶらすること）を成す義、語は「詩」にみゆ。漢陽・峴首の二句を董題に屬せしむるか、作者に屬せしむるかにつき異説あり。黃鶴は董題に屬せしめ、朱氏・仇氏は作者に屬せしむ。余は黃説に従ふ。【二〇】雲念。念とは董がおもふこと。【二一】著息帽。著は作者がつくること、息帽はくろき紗の帽、管寧が故事、已にみゆ。【二二】采蠶。わらびをとる、蔬食するをいふ。【二三】青雲端。いづれとも知れぬ雲山のはてをいふ。

【題義】董題といふものが鄧州へゆくのに別れた詩。大曆三年冬、南航時の作。

【詩意】冬のおしつまりに風を受ける水の勢が急で、むかへ浪がたち出帆するになんぎである。このとき讀書人たる君は親御にうまいものを供へられぬところから旅程の寒さをも忘れてでかけられる。さうして安樂な土地を求めて、南のかた小長安（鄧州）へゆかれる。君は自分の舟行に別れを告げるが、自分は君の衣裳が薄げに感じてきのどくにおもふ。じぶんはふだんから鄧州の長官趙公が節義の高いことを耳にしてゐる、君がゆかれたならきつと長官と部下といふ關係ではなく兼ねて

主人とお客としての歡を盡されることとおもふ。君は家では母上があけくれ門閭に倚つて君をながめてせられるといふきづなにながれてゐるのであるから、おとしよりが寒氣のためからだをいためになる様なことのない様に氣をつけなければいけない。君とともに老夫もともづなを解かうとする、いまはまだ玄米の朝餐もたべぬのである。兵亂の際にただよはされてゐる身のうへではいつになつたらこのむねのうちがくつろぐ様になることだらう。君が途中經過する漢陽はよほど平和のところである、襄陽へいつたならば峴山のかしらなどにもぶらついてみるがよろしい。さうしてこのおやぢが黒い紗の帽子をつけてどこかの雲のあるはてで薇を采つてたべてゐることを念ふべきである。（朱注によれば、「自分も漢陽をへて峴山にぶらぶらしてをるからそこで薇を采つてゐることを念へ」の意ととく。）

夜聞鶯築

夜鶯築を聞く

夜聞鶯築滄江上

夜鶯築を聞く滄江の上

衰年側耳情所嚮

衰年耳を側つるは情の嚮ふ所なればなり

隣舟一聽多感傷

隣舟一聽感傷多し

夜聞鶯築

【字解】【一】鶯築。樂器「しちりき」なり。もと龜茲國の樂、竹を以て管とし、箏を以て首とす、其の聲笛に類す、と。【二】滄江。ひろき

塞曲三更歎悲壯。」

積雪飛霜此夜寒。

孤燈急管復風湍。

君知天地干戈滿。

不見江湖行路難。」

【題義】夜、江上で「しちりき」の音をききしことをよんだ詩。大曆三年冬、南航時の作。

【詩意】ひろい江のほとりで夜「しちりき」の音をきいた。老衰の年になつてそれを耳をそばだててさくといふのは平生じぶんのところが音楽にむいてゐるからだ。「しちりき」が夜半に忽ち悲壯な調子で塞外關係の曲を奏する。それをとなりの舟にゐてひとたびきくと感傷の念が多くおこる。「この夜は積雪あり飛霜あり、ひどく寒いのに、孤燈の前に急管を吹きならされ、さらにまた風をうけた湍水の音さへつけ加はるのである。(いかにそのものがなしいことよ)。君は塞曲を吹くところから推していま天地に干戈が満ちてゐることは知つてゐるだらう。しかし干戈の苦ばかりではない、江湖をわたる者の行路のいかになんぎなものであるかを見ぬのであるか。(之にも同情してもらひたい。)」

江。【三】情所觸 音樂すきなるをいふ。【四】塞曲 長城に關したる曲の名、入塞曲・出塞曲等あり。【五】君 しちりきを吹く人をさす。

衡州送李大夫七丈勉赴廣州

斧鉞下青冥、樓船過洞庭。

北風隨爽氣、南斗避文星。

日月籠中鳥、乾坤水上萍。

王孫丈人行、垂老見飄零。

【字解】【一】衡州 湖南省衡州府なり。此に衡州の詩あるは編次の誤なり。衡州の詩内にくりさげて入るべきものなり。【二】李大夫七丈 李勉をさす、勉は御史大夫なり、七は排行、丈は丈人、尊者を稱す、李勉は江西觀察使より入りて京兆尹・兼御史大夫となり、大曆三年十月、廣州刺史に拜し、廣南節度使に充てらる。時に嶺南の番帥馮崇道といふ者、桂州の朱濟時とともに叛く、朝廷故に勉を遣はして之を討たしめしなり。作者は衡州にて勉の赴任とてあひしとみゆ。【三】廣州 廣東にあり。【四】斧鉞 斧の、まさかり、征伐の權を委任するしるしもの、「禮記」に、諸侯賜斧鉞、然後專征伐、とみゆ。【五】青冥 あなぞら、天、みやこをさす。【六】北風隨爽氣 爽氣が北風に隨ひて至るをいふ。北風とは北より來れる風にて必ずしも冬風をいふにあらず。爽氣はさわやかな氣、ほとんど肅殺の氣といふの類なり。【七】南斗 星宿の名。【八】避文星 文星は文昌星をいふ、北斗宮に在り、以て李勉の文學あるにたとふ。【九】日月籠中鳥 乾坤水上萍 日月・乾坤は副詞として用ふ、日月の照らす下に於て、乾坤のひろがれる間に於ての義。籠中鳥・水上萍は自己に比す。東歸・漂泊をいふ。【一〇】王孫 李勉をさす。【一一】丈人行 丈人たる位置の人、已にみゆ。【一二】見 李が見るをいふ。一句は見垂老 而飄零の意。

【題義】衡州で李勉どのが廣州に赴任せられるのを送つた詩。仇注は大曆三年冬の作とせるは信すべ

からず、冬未だ衡州に至らざるを以てなり。朱注のごとく大曆四年春の作とすべし。黄鶴は四年秋冬の際潭州にての作とし、衡は潭の誤なりとせり。今朱注に依る。

【詩意】征伐權を委ねられた斧鉞が天上からおりてきて、樓船が洞庭湖をすぎた。北から来た風とともに爽かな気がつきしたがうてきたし、文屋がきたのを見て南斗の星はそれを避けようとしてゐる。自分はこの日月の照りかがやく下で籠のなかの鳥の様に東縛されてをり、天地のひろい間に水上の萍の様に漂泊してゐる。王孫は自分にとつては丈人の位置にあたるおかたである。わたくしがかく老いかかつておちぶれてゐることをよく御覽くださつてゐることでござりませう。

歲晏行

歲晏行

歲云暮矣多北風、
瀟湘洞庭白雪中。
漁父天寒網罟凍、
莫徭射雁鳴桑弓。
去年米貴闕軍食、

歲云に暮れぬ北風多し、
瀟湘洞庭白雪の中。
漁父天寒く網罟凍る、
莫徭雁を射て桑弓を鳴らす。
去年米貴く軍食を闕く、

【字解】(一) 歲晏、としのくれ。
(二) 瀟湘、二水の名、湖南にあり。
(三) 網罟、罟は「たもあみ」。
(四) 莫徭、長沙地方に住める蠻族の名。
(五) 漁父、榮進してゐる官吏。
(六) 此輩、農民等をさす。
(七) 射雁、射撃。大東鑑に、梓楸其空、とあり。

今年米賤太傷農、
高馬達官厭酒肉、
此輩杼柚茅茨空、
楚人重魚不重鳥、
汝休枉殺南飛鴻、
況聞處處鬻男女、
割慈忍愛還租庸、
往日用錢捉私鑄、
今許鉛鐵和青銅、
刻泥爲之最易得、
好惡不合長相蒙、
萬國城頭吹畫角、
此曲哀怨何時終、

今年米賤く太だ農を傷ましむ。
高馬の達官は酒肉に厭く、
此の輩杼柚茅茨空し。
楚人は魚を重んじて鳥を重んぜず、
汝枉げて南飛の鴻を殺すことを休めよ。
況んや聞く處處男女を鬻ぎ、
慈を割き愛を忍びて租庸を還すと。
往日用錢を用ふるに私鑄を捉ふ、
今許す鉛鐵青銅に和するを。
泥を刻して之を爲す最も得易し、
好惡合に長く相蒙くべからず。
萬國城頭畫角を吹く、
此の曲哀怨何時か終らむ。

り。杼の馬瑞辰が曰く、杼は梭(ヒ)なり、柚は軸にして「説文」の「杼」なり、杼の「たて」を指するものなり、と。(八) 茅茨、茅にてふきたる家屋の中一物もなし。(九) 楚人、湖南地方の民をいふ。(一〇) 重魚、重鳥、漁夫・莫徭を承けていふ、魚鳥は魚鳥の内をいふ。(一一) 汝、浦注に達官を指すといへり。案するに表面上は射獵者をさすものとみるべきなり。(一二) 割慈忍愛、親子の情をしのぶ、語は別賦にみゆ。(一三) 還租庸、還とは負債となりたるなかへすなり、粟稻をなさめる税が租、絹を一日あて三尺なさめる税が庸なり。(一四) 捉私鑄、私に錢を鑄造せしものなとらへ罰する。(一五) 刻泥爲之、泥に雕刻を施して錢の鑄型をつくる。(一六) 好惡、善しあし。(一七) 蒙、欺く。(一八)

此曲。この詩篇の面をなす。諸家多く畫角の曲とす、其の説は税賦の重きは軍の興るにより、最後に憂亂の意をいふとなす。余は「夜聞簫聲」詩の末に、吹曲者干戈の滿つるを知るも江湖の行路難を知らずといひしと同じ言ひ方ならんと考ふ。

【題義】 歲晚のことをよんだうた。大曆三年冬、南航時の作。

【詩意】 歲がここにきて北風が多く吹く、瀟湘の水も洞庭の湖も白雪につつまれてゐる。天が寒くて漁父はその網罟が凍つて魚はとれぬ。莫術の蠻族は桑弓を鳴らして雁を射てゐる。去年は米がたかくて軍隊の食糧が不十分であつた、ことは米がやすくて農民がこまる、せのたかい馬にまたがつた貴い役人は酒や肉にたべあきてゐるが、これらの人民は機など織つても家のなかは無一物である。南方の人は魚肉は重んずるが鳥肉は重んじない、だから獵夫よ、南に飛ぶ鴻などをむだに射殺すなよ、(鳥だとしていたはつてやれよ)、ましてや諸方では人民がむすめこどもまでうり慈愛の情を割き忍んで税金をさめてゐると聞いてゐる。まへには錢をつかふとき私鑄のものがあればそれをとらへて罰したものだ、しかるに今は鉛だの鐵だのを青銅とませることを許してゐる。そんな錢は泥の鑄型を刻してつくればすぐに得られるのである。しかしいつまでも善い錢と悪い錢とませ用ひてごまかしておいてはならぬはずである。いまは天下萬國の城といふ城ではそのうへで畫角を吹きながら兵亂ばかりである。畫角の哀れさはいふまでもないが、吾がこの人民のみじめさをうたうた此の曲の哀怨なることはいつになつたらやむことであらうか。】

泊岳陽城下

岳陽城下に泊す

江國踰千里、山城近百層。

江國踰ゆること千里、山城百層に近し。

岸風翻夕浪、舟雪灑寒燈。

岸風夕浪を翻す、舟雪寒燈に灑ぐ。

留滯才難盡、艱危氣益增。

留滯才盡き難く、艱危氣益増す。

圖南未可料、變化有鵬鷖。

圖南未だ料る可からず、變化鵬鷖有り。

【字解】 (一) 岳陽、湖南岳州府巴陵縣。(二) 才難盡、才盡は江淹が故事、已に見ゆ。(三) 圖南、「莊子」に變化して鵬となり、南にゆくことを圖ることみゆ。鵬鷖は以て自ら比す。(四) 鵬鷖、鵬は鰲に作るべし、字の誤なり。

【題義】 岳陽城の城下で舟でとまつたことをよんだ詩。大曆三年冬の暮の作。

【詩意】 自分は江國を千里もこえてやつてきた、みると前面の山城は高さ百層にもちかい。岸からふく風は夕の浪をひるがへし、舟にふる雪は寒燈の光のまへにそそぎつつある。自分は南方に留滯はしてゐるが、江淹の様に文才が盡きることにはむづかしきのみならず、艱危なめにであうて意氣益増加し来るものがある。これから南征を圖るに前途どの様になるかは推しはかることができぬ、なせかといふと莊子が言ふごとく鯤鵬の様な不思議な變化をするものがあるからである。

纜船苦風戲題四韻奉簡鄭十三判官

船を纜ぎ風に苦しむ、戯れに題す四韻、鄭十三判官に簡し奉る

楚岸朔風疾。天寒鶴鵠呼。楚岸朔風疾し、天寒くして鶴鵠呼ぶ。

漲沙蘆草樹。舞雪渡江湖。漲沙草樹に露り、舞雪江湖を渡る。

吹帽時時落。維舟日日孤。帽を吹きて時時落ちしむ、舟を維ぐに日日孤なり。

因聲置驛外。爲覓酒家墟。因りて聲す置驛の外、爲に覓めよ酒家の墟。

【字解】 〔一〕鄭十三判官、其の人詳かならず、岳陽の官員とみゆ。〔二〕楚岸、楚地の南岸。〔三〕鶴鵠、あなざぎの類。〔四〕因聲、聲とはこゑをかけること、寄語をいふ。〔五〕置驛、鄭莊(當時)置驛の故事。當時驛馬を長安の諸郊に置きて賓客を送迎す、馬にて送すを驛といふ。同姓の故事を用ひたり。〔六〕爲覓、爲めにとは「我がために」の意。〔七〕酒家墟、墟は酒店のみせさきのへつついなり。ほどあひの厚きにて高さ三四尺位に築きたる土牆。そのうへには飲酒に必要な器具をおく。司馬相如の妻文君が墟に當るといふも、この店先きの番をなせしことをいふ。

【題義】 湖岸に船をともづなにつなぎ風に苦しんだとき、戯れにかきつけた四韻八句の詩。これを鄭判官へ手紙がはりにやつた。大曆三年冬暮、岳陽にての作。

【詩意】 楚地の湖岸に北かせがとく吹きつけ、天は寒くして鶴鵠が鳴きさけんでゐる。沙は張りだしてゐて岸への草樹にはすなほこりがふり、舞ひくるふ雪は江湖をわたつてこちらへくる。帽子は風に

吹かれて時時頭から落ちる、つないでゐる舟は日日ひとつでさびしい。それであなたに申すが、あなたは驛遞などでお客を送迎するほかに、どうぞひとつわたしのために酒屋の店さきを周旋してはくぐさらぬか。

登岳陽樓

岳陽樓に登る

昔聞洞庭水。今上岳陽樓。昔聞く洞庭の水、今上る岳陽樓。

吳楚東南坼。乾坤日夜浮。吳楚東南に坼け、乾坤に日夜浮ぶ。

親朋無一字。老病有孤舟。親朋一字無く、老病孤舟有り。

戎馬關山北。憑軒涕泗流。戎馬關山の北、軒に憑りて涕泗流る。

【字解】 〔一〕岳陽樓、岳陽城の西の門の樓なり。〔二〕吳楚東南坼、岳州は楚の地にして吳に非ず、故に此の時に吳を言ふことを疑ふものあり。然れどもそれは拘泥の説なり、吳は楚の鄰にして岳州の東北地武昌は即ち吳の地なり、吳楚を分ち言ふとも不可なることなし。東南坼とは東南部の土壤がきりひらかれて湖となりなるをいふ。〔三〕乾坤日夜浮、乾坤二字は副詞として用ふ。杜詩の用例を見るに、乾坤、魏漢宮、の乾坤は親字の主語なり。然れども、乾坤水上浮、乾坤萬里眼、乾坤一草亭、等は皆乾坤を副詞とす、萍艸は名詞にして浮字は動詞なるの差異はあれど本詩句の乾坤は同じく副詞とみるべし。浮は浮動の意、浮字の主語は省略されたる「湖水」なり。〔四〕親朋、親戚朋友。〔五〕無一字、信書の一字だなし。〔六〕有孤舟、棧託の地唯だ一舟あるのみ。〔七〕戎馬、盧注にいふ、是の年郭子儀兵五萬に將とし奉天に屯して吐蕃に備へ、白元光・李抱玉各、兵を出して之を撃つをいふと、この句は即ち旅寓

の原因をのぶ。【八】 蕪斬 蕪のきばによる。【九】 滌酒 滌は鼻水、酒はなみだ。

【題義】 岳陽樓にのぼりしことをよんだ詩。大曆三年冬暮の作。

【詩意】 洞庭の水のことは昔からおとにきいてゐたが、今はじめて湖邊の岳陽樓にのぼつてみる。この湖水をみると、吳楚の地はその東南部が拆開してをり、天地の大なるひろがりのうちに漫漫たる大水が日となく夜となく浮動してゐる。我が身はいま親戚朋友から一字のたよりもこす、老い且つ病んで身を寄せる處はひとつの舟があるばかりである。關山の北には兵馬がはびこつてそのため故郷にかけぬす旅路にさすらうてゐるのだ、これをおもふとのきばによりかかきながら涙がながれてくるのである。

陪裴使君登岳陽樓

裴使君に陪して岳陽樓に登る

湖闊兼雲霧、樓孤屬晚晴。

湖闊くして雲霧を兼ぬ、樓孤にして晚晴に屬す。

禮加徐孺子、詩接謝宣城。

禮は加はる徐孺子、詩は接す謝宣城。

雪岸叢梅發、春泥百草生。

雪岸に叢梅發き、春泥に百草生す。

敢違漁父問、從此更南征。

敢て違はむや漁父の問に、此れより更に南征せむ。

【字解】 【一】 裴使君 岳州の刺史裴某。【二】 徐孺子 後漢の徐孺がこと、陳蕃一榻を懸けて孺子を禮遇せしこと已に屢々、徐を以て自ら比し、陳蕃を以て裴に比す。【三】 詩接 接は歩を接するをいふ。【四】 謝宣城 齊の謝朓、詩句清麗なり、宣城太守となる。【五】 叢梅 梅樹叢生するをいふ。【六】 敢違 この二字一句のみにかくるものと次句までへかけるものと二説あり。余は一句のみにかくる説による。「敢て違はんや」なり。【七】 漁父問 屈原に漁父辭あり、漁父との問答を記す、漁父は屈原に問ひかけしもの、原に細く世と推移せよといへり。

【題義】 刺史裴君に陪して岳陽樓にのぼつたことをよんだ詩。大曆四年春初の作。以下は當分四年の作なり。

【詩意】 湖面がひろくてそのうへに雲や霧がかかつてをり、樓が孤立してゐるのにちやうど夕晴れの時刻にであうた。あなたは陳蕃が徐孺子に加へるごとく禮をわたくしに加へてくださった。あなたの詩は謝宣城にあとをつづけるほどうまい。いま雪のふつた岸に梅のむれが花さき、春の泥にさまさまの草が生えだしてきた。むかし漁父が屈原に問をおこしたとき彼は原に世と推し移れと教へた、自分はその教に違ふことはようせぬ、だからこれからまたもつと南方へでかけてゆかうとおもふのである。

南征

南征

春岸桃花水、雲帆楓樹林。

春岸桃花の水、雲帆楓樹の林。

陪裴使君登岳陽樓 南征

儵生長避地。適遠更落襟。
 老病南征日。君恩北望心。
 百年歌自苦。未見有知音。

生を儵みて長に地を避く、遠きに適かむとして更に襟を落す。

【字解】(一) 桃花水。二月桃の花のさく頃の出水。(二) 雲帆。雲を帯びたる帆を離せるをいふ。(三) 楓樹林。南方には楓樹多し。(四) 南征。潭州(長沙)に向ふをいふ。

【題義】南方にでかけしことをのべた詩。大曆四年春、岳州より潭州へ向ふ途上の作か。

【詩意】春の岸べには桃花の節の出水がながれてゐる、そのとき自分は楓樹の林にそうて雲帆を飛ばしてゆく。自分は生きることをぬすまんがためにいつも危険な地を避けてゐる。これからまた遠方へゆかうといふのであるからいまさらに涙がえりもとをうるほす。老病の身を以て南征するとき、君恩をおもつて北に望むころ、そのむねのうちやいかに。じぶんの生涯はじつにみづから苦しんで歌ひつつあるのだ、けれどもまだだれも知音の人があるのをみうけぬのである。

歸夢

歸夢

道路時通塞。江山日寂寥。

道路時に通塞す。江山日に寂寥たり。

儵生唯一老。伐叛已三朝。

生を儵むは唯だ一老、叛を伐つ已に三朝なり。

雨急青楓暮。雲深黑水遙。

雨急にして青楓暮る、雲深くして黒水遙なり。

夢魂歸未亦得。不用楚辭招。

【字解】(一) 一老。自己をいふ。(二) 伐叛已三朝。叛を伐つとは安祿山・史思明・僕固懷恩・吐蕃等を伐つをいふ、三朝とは玄宗・肅宗・代宗の朝をいふ。(三) 黒水。尙書禹貢に、黒水西河惟雍州、とみゆ。黒水は雍州の西北よりして雍州の西南に出づ、雍州は秦(關中)の地にして作者故郷の在る所。(四) 歸未亦得。未の字一に亦に作る、從ふべし。得とはそれにてよろしきをいふ。(五) 楚辭。楚辭に招魂篇あり、宋玉、屈原の生靈をまれき故郷にかへらしめんとせり。

【題義】故郷にかへる夢に關してのべた詩。作時詳かならず。仇氏は大曆三四年間の作なるべしといへり。青楓とあれば湖南の詩ならん。

【詩意】道路は通じたりまた塞つたりする、江山は日日さびしくなる。生を亂世にぬすんでゐるものは過去の同志のうちでじぶん一人であるが、叛亂を征伐することは已に三朝の久しきにまたがつてゐる。今雨が急にふりしきつて青楓林が暮れかかり、雲深くとざして故郷の黒水の方がはるかである。夢中の魂で歸るさへも故郷に歸つてをればそれで満足である。ことさら楚辭の「招魂」などで魂を招いてもらはなくともよろしい。

過南嶽入洞庭湖

南嶽に過ぎらむとして洞庭湖に入る

洪波忽爭道岸轉異江湖

洪波忽ち道を争ふ、岸轉じて江湖異なり。

鄂渚分雲樹衡山引舳舻

鄂渚雲樹分る、衡山舳舻を引く。

翠牙穿衰蔣碧節吐寒蒲

翠牙衰蔣を穿つ、碧節寒蒲に吐かる。

病渴身何去春生力更無

病渴身何くにか去る、春生するも力更に無し。

壤童犁雨雪漁屋架泥塗

壤童雨雪に犁く、漁屋泥塗に架す。

鼓側風帆滿微冥水驛孤

鼓側風帆滿つ、微冥水驛孤なり。

悠悠回赤壁浩浩略蒼梧

悠悠赤壁回る、浩浩蒼梧を略せむ。

帝子留遺恨曹公屈壯圖

帝子遺恨を留む、曹公壯圖を屈す。

聖朝光御極殘孽駐艱虞

聖朝御極光る、殘孽艱虞を駐む。

才淑隨厮養名賢隱鍛鑪

才淑厮養に隨ふ、名賢鍛鑪に隱る。

邵平元入漢張翰後歸吳

邵平元漢に入る、張翰後れて吳に歸る。

莫怪啼痕數危檣逐夜鳥

怪しむ莫かれ啼痕の數なるを、危檣夜鳥を逐ふ。

【字解】

【一】過南嶽 過は將ニ過ル意、南嶽は衡山をいふ、長沙の嶽麓山は衡山の麓なりとて、之を以て此にあてんとするは當らず。【二】洪波 大波。【三】爭道 江の波は湖に通まんとし、湖の波は江に通まんとし、これ争道なり。【四】異江湖 江と湖と相異なり、いままで江を湖しものが湖とかはりしをいふ。江は大江、湖は洞庭湖。【五】鄂渚 武昌をいふ。【六】分雲樹 分は分離、あちらに分けられてのこるをいふ、雲樹は雲及び樹なり。【七】衡山 衡州府衡山縣の西三十里にあり、五嶽の一にして南嶽なり。實際肉眼にてはまた見えざれども詩興のうへよりいへり。【八】引舳舻 引はみちびくをいふ、舳は舟尾、「とも」なり、舻は舟前、「へさき」なり。【九】翠牙穿衰蔣 翠牙はまこもの芽のとがりたるをいふ、穿とは貫くことくぬけてたるをいふならん、衰蔣の衰は露につつまれたるをいふ、仇注に、衰蔣蔣之瘦而未壯者、といへるは據る所を見ず、蔣は「まこも」。【一〇】碧節 みのりのふし。【一一】寒蒲 はるさむのがま。【一二】病渴 渴は清湯のやまひ、已にみゆ。【一三】壤童 ちちをすきかへすしもべ、當時の俗語ならんといへり。【一四】犁 すきをもつてすく。【一五】漁屋 漁父の香小屋。【一六】架泥塗 どののうへにわたしてある。【一七】鼓側 鼓たむく。【一八】風帆滿 帆が風を十分に孕む。【一九】微冥 かすかにくらし。【二〇】水驛 水のとりのしゆくば。【二一】悠悠 はるか。【二二】回赤壁 この回は回轉するをいふならん、赤壁は地名、武昌府蒲圻縣にあり、吳蜀の聯合軍が魏の曹操の舟師を燒きうちせしところ。地名にはあれど其の地形が赤土の岸壁のつづける處なり、故に舟行の際には回轉すといへるなり。【二三】浩浩 大なる瀾、廣遠なるをいふ。【二四】略蒼梧 略とは巡行するをいふ、蒼梧は山の名、即ち九疑山、湖南永州府零陵縣南六十里にあり、舜の葬られし地と稱せらる。【二五】帝子 堯の二女にして舜の妻たる娥皇・女英をいふ。舜、三苗を征し南して蒼梧に死すときき悲しみて湘水に身を投じて死す。(王逸曰く、舜の南征に従ひ道にて死す、と。)死して湘水の神湘君の妃となり、湘夫人と稱し祀らる。又娥皇・女英の涙は竹に染まり、遂に湘水のはとりに斑竹を生ずるに至りしと。みな古傳説なり。【二六】留遺恨 遺恨とは舜と生前に逢ふことを得ざりしうらみ。此の句は上の蒼梧の句を承く。【二七】曹公 曹操。【二八】屈壯圖 さかんなるはかりごとが屈したわめられたり。【二九】聖朝 代宗の朝をいふ。【三〇】光御極 光はひかりかがやく、御極は紫極(天の中央)を支配せらるるをいふ、天下を治めらるることなます。【三一】殘孽 のこれるわざはひ、仇氏は蔡夢弼により吐蕃のこととす、楊注は河北の諸降將をさすとせり。【三二】才淑 才淑はひきとめてのこしておくこと、嚴真はなんぎ、しんばい。【三三】才淑 才あり善良なる人。【三四】厮養 厮はたきき刈

り、美は故事の掛り、共に兵卒についていふ、武官を輕蔑していひし語なり。【三三】名賢 名あるかしこき人。【三六】隱轡 かのちやのいろりのそばに隠遁する、魏の末に竹林七賢の一人嵇康は鍛冶(かぢや)にかくれたり。【三七】邵平 秦の東陵侯たりし邵平、漢になりて長安の青門の外に瓜つくりとなりてすみたる故事。【三八】張翰 晉の張翰、齊王問が權を用ひ、後には失敗すべきをばかりて、秋風の起るを見て故郷の鱸魚がたべたしといひて吳に歸り去れり。邵平・張翰を以て自ら比す。【三九】啼猿 なきはらした涙のあと。【四〇】危樯 高くあやふきはばしら。【四一】逐夜鳥 この鳥は即ち橋鳥にて風見としてほばしらのうへに高くつけてあるからすなり。逐ふとは常用にて追ひゆくなり、船の橋のあとにつきゆくこと。

【題義】南嶽たる衡山へよぎる目的を以て大江から洞庭湖へいりこんで来たときのことをのべた詩。地里の順よりすれば岳陽樓に關せし詩篇より前にあるべきものなり。大曆四年春の作。

【詩意】大きな波が忽ち進路を争ふ、それは岸がうつつて大江と洞庭湖とがいかはりになるからである。北は鄂渚の方に雲や樹が分離されてのこり、南の方では衡山が自分の舟の軸轡をみちびきよせる。露につつまれた蔞からは翠の牙がつきぬけ、春寒の蒲からは碧の節が吐きだされてゐる。消渴のやまひをわづらひながらこのからだはどこへゆくのであるか、春は生じたがさらに體力が無くなつてゐる。土壤をすくしもべは雨雪のなかに犁をつかつてをる。漁父の番小屋は泥塗のうへに架してある。かたむきながら帆は風を十分に孕んでゐる、水邊のしゆくばはひとつさびしげに微にくらくみえる。赤壁の岸ははるかに回轉してゆく、これから遠く蒼梧のあたりまでゆかうとするのである。堯帝の姫宮はいまに舜帝にあへなかつた恨みをのこしてゐる。曹操ほどの人でも赤壁のまけいくさに

は壯圖を屈してしまつた。いま聖人(代宗)の朝では御代の御政治がかがやいてゐるが、わざはひのたねがのこつて艱難憂虞がとれきらず、才智ある善人がかへつて柴刈り飯焚きの兵卒のあとにつきしたがひ、名ある賢人が鍛冶の爐ばたに隠遁してゐるといふありさまである。むかし邵平は秦の東陵侯でありながら瓜つくりになつて漢の代にはひつてすごしたが、自分はさうはゆかぬ。まことの張翰は故郷の吳に歸つたが、今の張翰たる自分は故郷へ歸ることがおくれしてしまつた。自分のなきはらした涙の痕がなんでかくしはばしはつくかは怪しむにおよばぬ、夜まで他船の風見の橋鳥を追ひかけてゐるのであるから。】

宿青草湖

青草湖に宿す

洞庭猶在目。青草續爲名。

洞庭猶は目に在り、青草續ぎて名を爲す。

宿槩依農事。郵籤報水程。

宿槩農事に依る、郵籤水程に報す。

寒冰爭倚薄。雲月遞微明。

寒冰争ひて倚薄す、雲月遞に微明なり。

湖雁雙雙起。人來故北征。

湖雁雙雙として起る、人來るに故らに北征す。

【字解】(一)青草湖 洞庭湖の東南部にある湖の名、北は洞庭に連り、南は瀟湘に接し、東は汨羅の水を納る。夏秋ことに水泛びて

洞庭と一となる。水涸るときは此の湖先づ乾き青草生ず、故に名づくといふ。【二】嶺名。洞庭につづいてまた湖名をなすをいふ。【三】宿業。かぢをやどらす、といふは船を泊するをいふ。【四】依農事。農事をする場所によりそふをいふ。楚の人は湖中に田を種う。そこに依りて宿するなり。【五】郵驛。驛の漏刻の更替(時刻をしらす針)。【六】報水程。水路に報知する。【七】倚舟。よりせまる、近づくをいふ。【八】通微明。通とは交互になるをいふ、微とは月光を隱微ならしむること、明とは月光の明朗をいふ、微は雲に、明は月にかかる。

【題義】青草湖で舟を泊したことをよんだ詩。大曆四年春、潭州へ南航するときの作。

【詩意】洞庭湖がまだ目のなかに在るのに之に續いて青草湖といふのが湖名を爲してゐる。じぶんは舟かちをとめるには湖田にちかいたところに依る、水邊の驛館は漏刻の時間を水路のところまで報知してくれる。つめたい氷が争うて船のそばへよつてくる、雲と月はゆきかうてたがひにうすぐらくなつたり、明るくなつたりしてゐる。をりしも湖上の雁は一對一對にたちあがり、人が北からやつてくるのに、彼等はわざとらしく故郷の方位にあたる北の方へととんでゆく。

宿白沙驛

【原注】初過湖南五里。

水宿仍餘照。人煙復此亭。水宿仍餘照。人煙復此亭。

驛邊沙舊白。湖外草新青。

驛邊沙舊白。湖外草新青。

萬象皆春氣。孤槎自客星。

萬象皆春氣。孤槎自客星。

隨波無限月的。的南溟。

波に隨ふ無限の月の、的南溟に近づく。

【字解】【一】白沙驛。原注によれば青草湖を過ぎて南すること五里にある驛なり。清一統志に云ふ、湘陰縣北五十七里、湘江のほとりにあり、と。【二】驛邊二句。白沙驛と青草湖とを分析して用ひたり。【三】孤槎自客星。「博物志」に、人あり槎に乗じて天上に至り織女と牽牛の丈夫とを見、何處ぞと問ふ、其の人曰く、蜀に至り驛君平に問へば、還りて君平に問へば、曰く、某年某月日、客星、牛女を犯す、正に此の人、天河に到りし時なり、と。乗槎を泛舟に、客星を自己に比す。【四】無限月。無限は清光のひろく照らすをいふ。【五】的的。かがやくさま。【六】近南溟。近とは槎が近づくをいふ、南溟は越南の大海、語は「莊子」にみゆ。

【題義】白沙驛に舟を泊せしことをよんだ詩。大曆四年春、南航時の作。

【詩意】水上にやどりをしたがやはりまだ夕ばえがのこつてゐる。またこの人煙のたちのぼる驛亭のそばにとまるのか。驛のそばの沙はもとからまつしろである、湖外には草が新に青く生えだしてゐる。よろづの物象はみな春の氣をおびてをるが、じぶんはひとつのいかだをうかべてゐるいてゐるの、でせせん自分は昔物語りにある客星みた様なものである。清光かぎりない月が波のまにまに照りわたつてゐるが、そのあかあかとしたなかをだんだん南溟に近づいてゆく様なこころがする。

湘夫人祠

湘夫人の祠

蕭蕭湘妃廟。空牆碧水春。

蕭蕭たり湘妃の廟、空牆碧水春なり。

蟲書玉佩薜。燕舞翠帷塵。

蟲は書す玉佩の薜、燕は舞ふ翠帷の塵。

晚泊汀樹微。馨借洛蘋。

晩泊汀樹に登る、微馨洛蘋を借る。

蒼梧恨不盡。染淚在叢筠。

蒼梧恨盡さず、染淚叢筠に在り。

【字解】

【一】湘夫人祠。湘夫人は娥皇・女英をいふ、事は「通南嶽入洞庭湖」詩の蒼梧・帝子の句解をみよ。祠は即ち湘夫人の靈を祀る所、黃陵廟なり、湘陰縣北九十里にあり、祠の方、白沙驛より先に經過すべき地位にあり。【二】蕭蕭。蕭蕭のさま。【三】湘妃。湘夫人。【四】蟲書。蟲がそのよだれにて文字の形を書き、なめくじ、かたむりの類のはひしあとをいふ。【五】玉佩。妃の神像の玉佩に生えたこけ。【六】翠帷。みどりのとばり。【七】汀樹。樹のうへによちのぼるには非ず、樹木の生えたみぎはのあたりに上陸するをいふ。【八】微馨。かすかなかなり。【九】洛蘋。なぎさに生えたよぎのかなりを借りて神前に供養する。【一〇】蒼梧。舜の死せし地、巳にみゆ。【一一】恨。湘夫人の恨み。【一二】染淚在叢筠。叢筠は竹むらなをいふ、此の句は竹のことなをいふ、「通南嶽入洞庭湖」詩をみよ。

【題義】

湘夫人の祠堂をすぎて拜せしことをよんだ詩。大曆四年春、南航時の作。

【詩意】

湘夫人の廟はまことに静にいかめしく立つてゐる。だれも居らぬ牆のそばには碧の水が春の色をたたへてゐる。神像の玉佩の薜には蟲が涎で字を書いてゐるし、翠の帷の塵のたまつたところに

は燕が舞うてゐる。自分は夕がたここにとまつてみぎはの樹木の生じたところに上陸して、洛の蘋から微な馨を借りて神にささげた。湘夫人が蒼梧の舜帝に逢へなかつた恨はいまに至るも盡さないの、そのしるしには叢生する竹に涙の染めたあとがのこつてゐる。

祠南夕望

祠南の夕望

百丈牽江色。孤舟泛日斜。

百丈江色に牽く、孤舟日斜に泛ぶ。

興來猶杖屨。目斷更雲沙。

興來りて猶ほ杖屨、目断えて更に雲沙。

山鬼迷春竹。湘娥倚暮花。

山鬼春竹に迷ふ、湘娥暮花に倚る。

湖南清絕地。萬古一長嗟。

湖南は清絶の地、萬古一に長嗟す。

【字解】

【一】祠南。湘夫人祠の南。【二】百丈。舟を牽く竹索。【三】牽江色。夕べの色ある江上にひく。【四】山鬼。山の怪、屈原の九歌にみゆ。【五】湘娥。湘妃。湘夫人におなじ、山鬼・湘娥の二句空想なり。【六】清絶。非常に清らか。【七】一長嗟。ひとへにながくなげく、多く遷客騷人の居る所となるに過ぎざるを以てなり。

【題義】

湘夫人祠の南で夕がた眺望したことをよんだ詩。前篇と同時に作。

【詩意】

湘江の夕べのきらめくところに百丈の竹索をひき、太陽の傾くをりにひとつの舟を泛べて

ある。興がわいてくると杖をつき、塵をはいて陸にあがつてみる、すつとみわたしてながめが盡きたとおもふそのさきはまだ雲沙が横はつてゐる。山鬼は春の竹に迷うてゐるが如く、湘娥は日ぐれの花に倚りそうてゐるかの様におもはれる。湖南は非常に清らかにいいところだが、をしいことに賢人が流しものにされたりする場所なので、萬古ひとへに長歎を發するわけである。

上水遣懷

上水の遣懷

我衰太平時、身病戎馬後、

我は衰ふ太平の時、身は病む戎馬の後。

贈贈多拙爲、安得不皓首、

贈贈拙爲多し、安んぞ皓首ならざるを得む。

驅馳四海内、童稚日餬口、

驅馳す四海の内、童稚に日々に口に餬ましむ。

但遇新少年、少逢舊親友、

但だ遇ふ新少年、舊親友に逢ふこと少し。

低頭下色地、故人知善誘、

低頭色を下す地、故人は善誘を知る。

後生血氣豪、舉動見老醜、

後生は血氣豪なり、舉動老醜とせらる。

窮迫挫囊懷、常如中風走、

窮迫挫囊懷挫けたり、常に風の中てられて走るが如し。

一紀出西蜀、於今向南斗、

一紀西蜀を出づ、今に於て南斗に向ふ。

孤舟亂春華、暮齒依蒲柳、

孤舟春華亂る、暮齒蒲柳に依る。

冥冥九疑葬、聖者骨已朽、

冥冥たり九疑の葬、聖者骨已に朽ちたり。

蹉跎陶唐人、民鞭撻日月久、

蹉跎たり陶唐の人、民、鞭撻せられて日月久し。

中間屈賈輩、讒毀竟自取、

中間屈賈が輩、讒毀竟に自ら取れり。

鬱悒二悲魂、蕭條猶在否、

鬱悒なり二悲魂、蕭條猶は在りや否や。

崑崙清湘石、逆行雜林藪、

崑崙たり清湘の石、逆行すれば林藪雜はる。

篙工密逞巧、氣若酣杯酒、

篙工密に巧を逞しくす、氣杯酒に酣なるが若し。

誦謳互激越、回幹明受授、

誦謳互に激越、回幹受授を明かにす。

善知應觸類、各藉穎脫手、

善知は應に類に觸るべし、各、穎脫の手を藉る。

古來經濟才、何事獨罕有、

古來經濟の才、何事ぞ獨り有ること罕れなるや。

蒼蒼衆色晚、熊掛玄蛇吼、

蒼蒼として衆色晩る、熊掛りて玄蛇吼ゆ。

黃熊在樹顛、正爲羣虎守、

黃熊樹顛に在り、正に羣虎の爲に守る。

羸骸將何適、履險顏益厚、

羸骸將に何くに適かむとする、險を履む顔益厚し。

庶與達者論吞聲混瑕垢。庶はくは達者と論せむ、聲を吞みて瑕垢に混す。

【字解】 〔一〕 上水 湘水をさかのぼる、岳州より潭州(長沙)衡州に向ふは上水なり。〔二〕 賸賸 困頓の貌、又勢を失ふ貌。〔三〕 抽瓦 まづいしかた。〔四〕 煮糲日餽口 日日煮糲の口に餽はましめる、妻子をつれて衣食に奔走するをいふ。〔五〕 下色 謙遜なるかほつきをする。〔六〕 後生 わかしの、後輩。〔七〕 舉動 後生の舉動。〔八〕 見老眼 こちらを老眼としてとりあつかふ。〔九〕 憤憤 むかしのかんがへ。〔一〇〕 中風走 氣がくるうて走る。〔一一〕 一紀 十二箇年、作者乾元元年に蜀に入り、大曆三年に峽を出てたり、凡そ十一年なり、約一紀といふべし。〔一二〕 南斗 星宿の名。〔一三〕 春華 春のはなやかさ。〔一四〕 暮齒 晩年。〔一五〕 蒲柳 かはやなぎ。〔一六〕 九疑葬 舜の九疑山に葬られしこと。〔一七〕 聖者 舜をさす。〔一八〕 馳鹿陶唐人 馳鹿日月久 仇氏宋注によりて陶唐人を義和とし、義和日御となるの傳説と結びつけて、馳鹿日月久は、馳鹿二歳月なりといへり。單に時間の多く過ぎしことと言ふものならんには、かく二句を費して冗漫にのぶる必要いづにありや。仇説服する難はず。愚案次の如し、馳鹿はつまづく、失志の貌、陶唐人とは陶唐民なり、今の民は即ち堯舜の民の意、馳鹿日月久とは人民が爲政者より虐待を被る日月の久しきをいふ。〔一九〕 屈買 屈買、賈賈、已に屈買見ゆ。〔二〇〕 自取 屈買等が自らそれを招き取る。〔二一〕 鬱悒 むねのふさがること。〔二二〕 二悲魂 悲しめる二人の魂、屈買をいふ。〔二三〕 嶺嶺 山峻しき貌。〔二四〕 清湘石 すんだ湘水の石。〔二五〕 逆行 すなはち流れにさかのぼるをいふ。〔二六〕 雜林藪 さまさまのやぶにであふ。〔二七〕 篙工 舟のさなかた。〔二八〕 運巧 うまく舟をあやつるをいふ。〔二九〕 贈杯酒 一杯きげん。〔三〇〕 酒瀆 故に「うたふ」なり。〔三一〕 激越 調子のはげしきこと。〔三二〕 回幹 回旋し幹轉する、舟をめぐらすをいふ。〔三三〕 受授 舟人が舟のへさきとともにてかけこみして水脈を求むるを受授といふと、あひづのうけわたしなり。〔三四〕 善知 智識のすぐれた人。〔三五〕 觸類 類例の事例にふれてかんがへる。〔三六〕 藉 かる、よる。〔三七〕 願脫手 妙手をいふ、願脫は難のさきが難の中からつきでるをいふ、毛遂が故事。〔三八〕 細濟才 細國濟民の才、天下を治める才。〔三九〕 衆色 諸の衆物の色。〔四〇〕 樹頭 頭は樹。〔四一〕 守 虎なうち殺さんと誓をするなり。〔四二〕 藪藪 つかれたむくろ。〔四三〕 履險 危險な土地をふむ。〔四四〕 達者 悟つた人。〔四五〕 吞聲 しのび言になく。〔四六〕 混瑕垢 老子の和光同塵の意、さすありあかあるきた

なきもののなかに混じてゐる。左傳に、塵塗既混、國君含垢、とあり。

【題義】 岳州の方から湘水をさかのぼるときおもひを遣つた詩。大曆四年春の作。

【詩意】 自分は太平の時節に老衰し、からだは兵馬騷亂の後に病氣となつた。つかれた足どりで拙い仕方ばかり多かつた、どうして白髪にならずにゐられよう。それで四海の内を駟けめぐつて日日こともらの口すぎをさせてゐる。であふ所は新少年ばかりで、舊親友に逢ふことは少い。あたまでさげ顔を卑うするはあひでも、ふるなじみの人ならば善くじぶんをみちびいてくれることをこころえてをるが、後輩ときては血氣粗豪で、その一舉一動にもこちらを老醜あつかひにする。じぶんは窮迫のあまりむかしかんがへてゐた志はくじけてしまひ、いつも氣がくるうて走つてゐる様なさまをしてゐる、十二年ちかくでやつと西蜀から出て、今になつてまだ南斗の方向にむかつてたびをしてゐる。孤舟のあたりには春の華やかさがみだれてゐるが、じぶんは晩年のすがたを以て蒲柳に依りそうてゐる。舜の葬られたといふ九疑山はくらくてはつきりわからぬ、聖帝の骨はもはや朽ちてしまつた。堯以來性質にかはりのない同じ堯の民も志を失ひ、暴吏から鞭撻されてながい月日を経た。そのなかごろに於て屈原だの賈誼だのは自分の忠直をまげなかつたため他人から讒言をされわくちをいはれた、それは自分が招いたというてよろしい、之をおもふとおもひふさがる、彼の二人の悲しめる魂はさびしくもいまなほ存在してゐるかどうか。すんだ湘水のなかの石はけはしい、この川の流れをさ

かのぼるとさまさまの林藪にであふ。そこを舟がゆくときに篙工は人知れずうまく腕をふるうて、一杯きげんのとときの様な元気で、高い調子でうたをうたひ、ともへさきの受けわたしの掛けこゑもはつきりと舟を回轉させてあやつる。智能のすぐれたものならばこの類例から推してかんがへられるであらう、なにごとく事をなすにはそれぞれ非凡な囊中から頼脱する様な手をからねばならぬものである。ところがむかしから天下を治める才だけは何故に無いのであるか。いま蒼蒼として多くの物象が晩れかかつてきた、熊は樹にぶらさがり、玄蛇は吼えてゐる、黄い熊は樹のいただきにゐて虎たちがとほつたらうちつけてやらうと番をして見守つてゐる。このつかれたからだをもつてじぶんはどこへゆかうとするのか、危険なところを履むなどはあつかましいことおびたしい。じぶんの心事は悟つた物のわかつた人とかたりたいとおもふ、いまはただだまつてしのびねにないて垢だらけのきたないものでもそれとまざつてごまかしてゐるよりほかはない。」

遺遇

遺に遺る

磬折辭主人。開帆駕洪濤。

磬折主人を辭し、帆を開きて洪濤に駕す。

春水滿南國。朱崖雲日高。

春水南國に滿つ、朱崖雲日高し。

舟子廢寢食。飄風爭所操。

舟子寢食を廢す、飄風に操る所を争ふ。

我行匪利涉。謝爾從者勞。

我が行利涉に匪ず、謝す爾從者の勞するを。」

石間采蕨女。鬻市輸官曹。

石間采蕨の女、市に鬻ぎて官曹に輸す。

丈夫死百役。暮返空邨號。

丈夫は百役に死す、暮に返りて空邨に號ぶ。

聞見事略同。刻剝及錐刀。

聞見事略は同じ、刻剝錐刀に及ぶ。

貴人豈不仁。視汝如莠蒿。

貴人豈に不仁ならむや、汝を視ること莠蒿の如し。

索錢多門戶。喪亂紛嗷嗷。

錢を索むるは門戶多し、喪亂に紛として嗷嗷たり。

奈何黠吏徒。漁奪成逋逃。

奈何ぞ黠吏の徒、漁奪して逋逃と成るや。」

自喜遂生理。花時甘緇袍。

自ら喜ぶ生理を遂ぐるを、花時緇袍に甘んず。」

【字解】(一) 遺遇 略しすぎたかき方なり、所遺に遺の意なるべし。自己のぶつつかつた境遇で懷れ遺るをいふ。(二) 磬折 磬石の如く腰をくの字に折る、こゝは先方に敬禮するさまをいふ。「禮記」曲禮に、立則磬折垂衿、とみゆ。又「莊子」に、夫子曲

磬折、とあり。(三) 主人 土地の主人、地もとにて自己を廻へてくれたる人をさす。(四) 朱崖 赤色の崖、湘中記に、湘川清照五六丈、下見底、石如得蒲、五色鮮明、白沙如霜雪、赤崖如朝霞、とみゆ。(五) 雲日 雲をおびたる太陽。(六) 利涉 「易」に、利涉大川、とみゆ、利涉は涉りて利あるをいふ。(七) 謝爾 謝は感謝、爾は下の從者をさす。(八) 從者 仇氏曰く舟を操るものをさす。(九) 官曹 役人たち。(一〇) 丈夫 夫とつと。(一一) 百役 さまざまの官の勞役。(一二) 空邨 人なき村。(一三) 事略同 どのでも大概同じこと。(一四) 刻剝 さまみ、はぐ、税金をひどくしぼりとるをいふ。(一五) 錐刀 さいりかたのさ

きは尖小なるものなり。微細の利益をいふ。【二六】 豈不仁。よしやなきけ知らずではあるまい、辭を婉曲にせるなり。趙注は豈の字を次句までかけてみたり。【二七】 券。券。わるいくさ、よしき。【二八】 索錢。税金をはたさる。【二九】 多門戶。甲も取りにくる、乙もくることをいふ。【三〇】 池。税金利益をあさりとする。【三一】 成道。趙注にいふ、人民の逃亡を成すなりと。余案するに、道逃の主となるの意なるべし。「尙書」武成篇に、殷の紂王の暴虐をのべて、爲天下道逃主、といへり。道も亦逃なり、紂は天下の罪人の逃亡者の主魁となりしといふなり。詩句は趙注は罪人の逃亡者のほきだめなりとの意ならん。【三二】 遂生理。生活を營み得るをいふ。【三三】 花時。花のさく春暖のとき。【三四】 甘繡袍。繡袍はわたいのどてら。それに甘んずるとは貧にしてきがへの衣をきたぬなり。

【題義】 せりにあひて懐ひを遣りし詩。大曆三年春、南航時の作。

【詩意】 自分は腰をかかめて主人にいとまごひをなし、舟の帆を開いて大きな波にのつてでかける。南國には春の水がたつぷりしてゐるし、岸への朱崖には雲をおびた太陽が高くつてゐる。船頭らは寢食を廢めて、つむじ風に舟をあやつることにきをもんでゐる。じぶんの旅行は船わたりの都合がよくないのでおまへたちに骨を折らせることは申しわけのないことだ。石間に 巖を采つてゐる女がある、彼の女はそれを市にひさいで役人のところへその價金をさしたすのだ。彼の女の夫はさまざまの勞役のために死んでしまつた、彼の女は日ぐれに家にかへつては無人の村に號哭するのである。自分の見聞することはどこでもほぼ同じ様なものである、人民からしほり取ることは鎌刀の細利にまで及んでゐるのである。高貴の官員はよもやなさけ知らずでもあるまいに、汝等を視ることは蓬蒿の惡草をみるが如くである。上たるものがさまざまの方面から税金をはたさる、それで夷亂のせりから人民

ががやがやとさけびたててゐる。なんでもわがしこい小役人どもは罪人のほきだめをなして人民から利をあさるのであるか。いま自分のであつた人民に比べると、自分は生きてゆかれることを喜ぶ、花の咲くあたたかい時節にわた入れのどてらをきてゐても満足である。」

解憂

憂を解く

減米散同舟路難思共濟。米を減じて同舟に散す、路難共濟を思ふ、

向來雲濤盤衆力亦不細。向來雲濤盤まる、衆力亦た細ならず。

呀坑瞥眼過飛檣本無蒂。呀坑瞥眼に過ぎたり、飛檣本蒂無し。

得失瞬息間致遠宜恐泥。得失瞬息の間、致遠宜なり恐泥すること。

百慮視安危分明曩賢計。百慮安危を視るは、分明なる曩賢の計なり。【ことを期す。】

茲理庶可廣拳拳期勿替。茲の理庶はくは廣む可けむ、拳拳として替つる勿からむ。

【字解】 【一】 解憂。結ばれてゐた憂のみのほきだめのこと。憂とは詩中にある雲濤の戰場をこえしことをいふならん。【二】 同舟。同舟の人人。【三】 雲濤盤。雲のある濤がうづまくこと。【四】 衆力。衆人の力、盤渦から舟をたすために盡力せしこと。【五】 細。小をいふ。【六】 呀坑。口をあいてゐるあな、難場所をいふ。【七】 瞥眼。ちらとみるまに。【八】 飛檣。速くかいたつがふ。【九】 替。解。

無帯 なりふしなし、他に附着するものなし。【二〇】得失 得は無難のこと、失は舟の顛覆などのこと。【二一】我道宜恐泥 我道恐泥は「論語」にみゆ。已にみゆ。仇注に、涉遠道、向恐泥濘、とあり、恐らくは是に非ず。本句の作者の意は、宜乎我道恐泥、といふに在るべし。【二二】百慮 いろいろ心をくばること。【二三】義賢 むかしの賢人。【二四】廣 ひろめてあてはめる。【二五】拳拳 捧持の貌。【二六】誓 誓つる。

【題義】 しんばいのとけて無くなりしことをよんだ詩。大曆四年春、南航時の作。

【詩意】 自分は自分のたべるべき米をへらして同舟の人たちにわけてやつた。それは道路のなんぎを共にすくひたいとおもうたからだ。さきほどから雲のゐる溝が満をまいてゐた、そこからのがれでるため多くの人たちがだしてくれた力は決して細小ではなかつた。それで飛ぶが如くあやつられる「かい」も本来他に附着せず軽くつかはれて、口をあけて待つてゐた危険な坑からまたたくまにでることができた。一得一失はつかのまにきまつた。むかしの聖人が「遠みちするには途中にへばりつく恐れがある」と言はれたことはもつともなことだ。(衆力をあはせたからへばりつかずに事はやくきまつたのだ)。「事の安危をみるにはさまざまのしんばいを以てするといふ、これがむかしの賢人のほつきりとした計」である。この道理は舟のばあひばかりでなく他にもおしひろめることができる、自分はこのことをむねにつけてすてまいと期してゐる。」

宿鑿石浦

鑿石浦に宿す

早宿賓從勞、仲春江山麗。

早宿賓從勞す、仲春江山麗はし。

飄風過無時、舟楫不敢繫。飄風過ぐるに時無し、舟楫敢て繫がざらむや。

迴塘澹暮色、日沒衆星嘒。迴塘暮色澹たり、日沒して衆星嘒たり。

關月殊未生、青燈死分翳。關月殊して未だ生せず、青燈死して翳を分つ。

窮途多俊異、亂世少恩惠。窮途俊異多し、亂世恩惠少し。

鄙夫亦放蕩、草草頻年歲。鄙夫亦た放蕩たり、草草頻りに年歲。

斯文憂患餘、聖哲垂象繫。斯文憂患の餘、聖哲象繫を垂る。

【字解】 【一】鑿石浦 邵賈が注にいふ、浦は長沙府湘潭縣西にあり、と。清一統志同じ。作者未だ潭州(長沙)に到着せざるに湘潭の詩ある理なし、此の篇以下の編次は頗る錯亂せり。今岳陽樓よりこのかた作者が湘江にさかのぼれる地を時に見ゆる地名の地理上の位置によりて順にたどるときは、岳陽樓・青草湖・湘夫人祠・白沙驛・喬口・銅官渚・岳麓山道林二寺・發潭州・鑿石浦・過津口・望靈岸・花石成・晚洲・白馬潭(臨湘縣に在り)とせば岳陽樓以前にあるべし、但詩の季節合はざるにより臨湘縣に在るものには非ざるべし)東嶽の如くなるべし。此の順位にたがへるものは編次の誤なり。【二】賓從 賓は船客、從は操舟者。【三】無時 定れる時なし。【四】不敢(敢不) 仇氏は敢不を不敢に改めたるも、敢不をよしとす。【五】迴塘 川の本流より横にまがり、みたるたまり水の池。【六】嘒 光の微かなる貌。【七】關月 仇注に二日の月ならんといへり。【八】殊 「説文」に殊は死なりとあり、月の死魄をいふ。【九】死 滅

するをいふ。【一〇】分韻。屬は夜色のくちがり、くちがりを分てばいよいよくちくなるわけなるも、作者の意は夜色のうすあかるさを分つを意味せるならん。【一一】俊異。すぐれた人物。【一二】郎夫。いやしきなとこ、自己をいふ。【一三】放蕩。とりとめなき貌。【一四】本草。あわただしき貌。【一五】斯文。文學の士をいふ。【一六】憂患餘。易の繫辭に、作易者、其有憂患乎、とみゆ。【一七】聖哲。かしこき人、周の文王・孔子をさす。【一八】象繫。易の象傳と繫辭傳をいふ、象は卦にくだした説明、文王作るといばる、繫辭は一般的の説明、孔子作るといばる。

【題義】 鑿石浦にとまりしことをよんだ詩。大曆四年春、長沙より衡州へ上航せしときの作。編次誤る。

【詩意】 仲春江山の麗はしいをりに、船客も操舟者もくたびれたために早どまりをする。暴風はいつときまりなしに吹き過ぎるから、舟楫をつながぬわけにはゆかぬ。それでよこみちの池にはひるとそこには夕ぐれの色があはく、太陽は没して多くの星の光がかすかにさしてゐる。かけた月は死んでゐるのでまだ出でぬし、燈火も滅して夜明がすこしさくらゐのことである。途のゆきつまつたところにはすぐれた人物が多くゐるものだ。世のみだれたときにはそんな人物に對しても恩恵を施す人はすくない。自分といふをとこはまたとりとめのない人物であわただしくしてゐるうちにしきりに年月がたつてしまふ。ただ文學に志あるものはしんばいごとのあげくには文字をのこすもので、文王・孔子の様な聖哲も憂患のあまり「易」の象傳・繫辭傳を後世に垂れのこした。(自分が詩をつくるのも同じ趣旨からである)。

早行

早行

歌哭俱在曉。行邁有期程。

歌哭俱に曉に在り、行邁期程有り。

孤舟似昨日。聞見同一聲。

孤舟昨日に似たり、聞見同一聲。

飛鳥數散求食。潛魚何獨驚。

飛鳥は數散じて食を求む、潛魚何ぞ獨り驚くや。

前王作網罟。設法害生成。

前王網罟を作る、法を設けて生成を害す。

碧藻非不茂。高帆終日征。

碧藻茂らざるに非ず、高帆終日征く。

于戈未揖讓。崩迫關其情。

于戈ありて未だ揖讓あらず、崩迫其の情に關す。

【字解】 【一】歌哭。仇氏曰く、歌も亦た悲歌なりと。【二】行邁。邁も「ゆく」なり。【三】期程。きまつたみちのり。【四】孤舟。孤舟に於ける境遇をいふ。【五】同一聲。歌哭の聲のかはらざるをいふ。【六】飛鳥數散求食。數の字一に散に作る、散に從ふ。散は自由になるをいふ。【七】潛魚。淵にひそむうを。【八】何獨驚。怪訝の辭、鳥と魚とは作者の胸中には比するものあるべし。【九】前王作網罟。「易」繫辭にみゆ、網は「あみ」、鳥魚並に用ふべきも魚を主としていふ。罟は「たもあみ」、魚に用ふ。【一〇】生成。魚の成育をいふ。【一一】碧藻。藻は「し」の草。【一二】于戈未揖讓。于戈を動かし武力を以て權力を爭奪するのみにて禮讓を以て賢者を擧げざるをいふ。「莊子」に、湯武之于戈、堯舜之揖讓、とみゆ、揖讓は會釋してゆづるなり。【一三】崩迫。崩裂、迫切なり、情せまりて内裂けくづる如くなるをいふ。【一四】關其情。關の字一に關に作る、關の字まされり。其とは自己をさす。

【題義】 朝早く出發せしときのことをのべた詩。前に述べし如くこのあたりの詩篇の編次みだれたれ

ばどこより出發せしやは明かならず、單に南航時の作なるを知るのみ。大曆四年の作。

【詩意】 人人が歌ふも哭するもみな 曉に於てである、旅をするにはきまつたみちのりがあるから早くでかける。孤舟での境遇はけふもまたきのふに似て、見るもの聞くものあひもかはらぬ歌哭の聲をきくのである。飛ぶ鳥は自由に散らばつて食を求めてゐるが、淵にひそんでゐる魚だけはなんで網罟に驚かされるのであるか。古代の王者が網罟を作つたのは法を設けて物の生長育成をさまたげた様なものだ。碧の藻の草は茂らぬでもないが、魚はそこにおちついてはをられぬ。それでその魚の様にじぶんらは帆を高くかかげて日いつばい征行をつづけるのである。世のなかには干戈があるばかりで揖讓といふことがない、之をおもふとそのことが情にかかつてむねがせまり裂け崩れる様である。

過津口

津口に過ぎる

南岳自茲近 湘流東逝深

南岳茲より近し、湘流東逝深し。

和風引桂楫 春日漲雲岑

和風桂楫を引く、春日雲岑に漲る。

回道過津口 而多楓樹林

回道津口に過ぎる、而ち楓樹林多し。

白魚困密網 黃鳥喧嘉音

白魚密網に困しむ、黃鳥嘉音喧し。

物微限通塞 惻隱仁者心

物微なるも通塞に限らる、惻隱なり仁者の心。

瓮餘不盡酒 膝有無聲琴

瓮には不盡の酒を餘す、膝には無聲の琴有り。

聖賢兩寂寞 眇眇獨開襟

聖賢兩に寂寞たり、眇眇獨り襟を開く。

【字解】 津口 本篇の起句によれば津口は衡山の附近にあり、因つて長沙より衡州に向つて南航中の作なるを知るべし。【一】南岳 衡山なり、衡州衡山縣にあり。【二】湘流 湘水の流れ。【三】桂楫 「かつら」の木で作つたかぢ、詩經・離騷などにみゆ。自己の舟のかぢをいふ。【四】春日 春の日光。【五】漲雲岑 漲るとは浮動したるをいふ、雲岑は雲のあるみれ。【六】回道 まはりみちする、之によれば津口は本流にての當然の通路より横にある處とみゆ。【七】而多 而は則の如し。【八】白魚 黃鳥 「早行」詩の飛鳥・游魚の類。【九】密網 目をこまかにあんだ網。【一〇】黃鳥 うぐいすの類。【一一】嘉音 よき鳴き。【一二】物微 魚と鳥をいふ。【一三】限通塞 通塞は運命の通ずるとふさがると、通は黃鳥をいひ、塞は白魚をいふ。【一四】惻隱 あはれみいたむ。【一五】瓮餘不盡酒 膝有無聲琴 瓮は酒び、かめ。隨機が詩に、瓮餘不盡酒、膝有無聲琴、とあり、無聲琴は暗に陶陶明の無聲琴のことを用ふ。【一六】眇眇 はるかなる貌。【一七】獨開襟 獨は自己一人をいふ、開襟は胸中を豁大にする、心をくつろげること、琴酒によりて之をなす。

【題義】 津口といふところによりみちしたことをのぶ。大曆四年春、長沙より衡州へ南航する時の作。

【詩意】 南岳（衡山）もここからは近い、湘江の水は深く東に流れてゐる。なごやかな風は桂の楫を引きつけてくれる、春の日光が雲のあるみねにわたつ様に動いてゐる。自分はまはりみちをしてこの津口をとほるのだが、きてみると楓樹の林が多い。白魚は目のこんだ網にくるしんでゐるが、

黃鳥はいいねいろをしてやかましく鳴いてゐる。こんな微物でさへその運命には窮通がある、仁者は之を見ては惻隱の心にたへられぬ。」じぶんはいま瓮には盡きの酒がのこつてゐるし、膝には聲をださぬ琴がおいてある。聖人も賢人もともに死滅してさびしくなつてゐる、がじぶんひとりと思ひを遠くに馳せてこの琴酒のおかげで胸をくつろげてゐる。」

次空靈岸

空靈岸に次る

汧汧逆素浪。落落展清眺。

汧汧素浪に逆り、落落清眺を展ぶ。

幸有舟楫遲。得盡所歷妙。

幸に舟楫の遅き有り、歴る所の妙を盡くすことを得。」

空靈霞石峻。楓栝隱奔峭。

空靈は霞石峻し、楓栝奔峭を隠す。

青春猶無私。白日已亦偏偏照。

青春猶は私無し、白日已亦た偏偏照らす。

可使營吾居。終焉託長嘯。

吾が居を營ましむ可くんば、終焉託して長嘯せむ。

毒瘴未足憂。兵戈滿邊徼。

毒瘴未だ憂ふるに足らず、兵戈邊徼に滿つ。」

嚮者留遺恨。恥爲達人誚。

嚮者遺恨を留む、恥づらくは達人に誚らるるを爲す。

迴帆觀賞延。佳處領其要。

帆を迴らして觀はくは賞を延べ、佳處其の要を領せむ。」

【字解】

【一】次、やどる。【二】空靈岸、蔡夢明、靈を給の誤とす。清一統志にいふ、空靈灘は湘潭縣北六十里にあり、一名は空冷峽、一名は空靈岸、水經注に、湘水又北逕建寧縣、縣北有空冷峽、驚浪奔雷、瀟湘同三峽、とあり、其地は三門灘、晚洲の下、聖石浦の上にあり、と。【三】汧汧、波紋の狀。【四】落落、白浪にさかのぼる。【五】展、曠達の意。【六】清眺、清らかなながめをのべる。【七】所歷、經過するべし。【八】峻、石峻、霞の如くうつくしき石けはし、湘中記の赤崖若朝霞の意。【九】栝、栝はひのきの類、松身柏葉の樹なり。【一〇】奔峭、形勢奔るに似たるけはしき崖壁。【一一】青春猶無私、白日已亦偏偏照、已の字一に亦に作る、亦に従ふ。偏の字諸家そのままにとく、偏照は一方をかたよりて照らすなり、恐らくは通ぜず。黃生が注に、峭壁、天、故有、白日偏照之語、といへる蓋し附會説なり。偏照といはざれば義をなさず、偏照はあまれく照らすなり。【一二】營吾居、この風景のよきところに居宅をいとむ。【一三】終焉、つひに。【一四】託長嘯、身をそこに託して長くうそぶく。【一五】毒瘴、南方の害毒ある瘴氣。【一六】兵戈滿邊徼、邊徼は邊境の地、蒲氏は蘭州河陰の如き西北地をさすとし、仇氏は湖南の地をさすとし、此の句は陪客に用ひし句にして南北をみな指して可なり。又此の句は兵戈の滿つるも亦た憂ふるに足らずといふ意をふくめしなり。【一七】留遺恨、仇氏は遺恨とは遊踪未だ到らざるをいふとし、楊氏は未だ山水の勝を盡さざるを恨むとせり。余案するに次句の達人に誚らるる如き態度なりしことをさして遺恨といひしなるべし。達人に誚らるるとはあまりに憂國傷世の一點張りにてありし態度をいふ。【一八】爲達人誚、爲、達人所誚の意、達人は悟つた人、誚は「そしる」。【一九】迴帆、帆をひきめぐらす、あともどりする。【二〇】觀賞、觀は賞、こひれがふ、賞延は延賞を借用す、風景を賞することを時間的にひきのばす、潘尼が詩に、迴帆轉高岸、展日得延賞、とみゆ。【二一】佳處、風景のよきところ。【二二】領其要、領は領會、わがものにし會得する、其とは佳處をさす、要はかなめのところ。

【題義】

空靈岸にやどつたときのことをよんだ詩。大曆四年春、長沙より衡州に向ふ南航時の作。

【詩意】

自分は汧汧と波紋をたてた白浪をさかのぼつて、あちらこちらと氣樂に清らかなながめをのべてゆく。幸に舟楫の進行がおそいために、經過するばしよの景色の妙を十分にみきはめることがで

きる。」空靈岸は霞紋の巖石がけはしく、楓や栢が生ひしげつて奔るが如き峭壁をかくしてゐる。非情の青春でさへ萬物に對しては私心を挟まぬし、まかがやく太陽も亦たどこをもあまねく照らすものである。もし今見るやうな場所にじぶんの居宅を營ませてくれることができれば、じぶんはつひにはここに身を託して長嘯したいとおもふ。南方には毒氣があるといふともしんばいするに足らぬし、兵戈は邊境に滿ちてゐるが、これもしんばいすることはない。まへかた自分が遺恨をのこしてをることとは、自分が慷慨すぎて恥かしながら達觀した人からわるくいはれる様なことをしてゐたことだ。いまはどうか帆をひきめぐらしてあともどりしてなるたけながくこの風景を賞で、景色の佳良な場處の要なところを我がものとしのみこみたいものである。」

宿花石戍

花石戍に宿す

午辭空靈岑。夕得花石戍。
 岸疏開闢水。木雜古今樹。
 地蒸南風盛。春熱西日暮。
 四序本平分。氣候何迴互。

午空靈の岑を辭し、夕に花石戍を得たり。
 岸には疏す開闢の水、木は雜ふ古今の樹。
 地蒸して南風盛なり、春熱して西日暮る。
 四序本平分す、氣候何ぞ迴互するや。

茫茫天造間。理亂豈恒數。
 繫舟盤藤輪。杖策古樵路。
 罷人不在邨。野圃泉自注。
 柴扉雖蕪沒。農器尙牢固。
 山東殘逆氣。吳楚守王度。
 誰能叩君門。下令減征賦。

茫茫たる天造の間、理亂豈に恒數あらむや。
 舟を繫ぐ盤藤の輪、杖策を杖く古樵路。
 罷人邨に在らず、野圃泉自ら注ぐ。
 柴扉雖蕪沒すと雖も、農器尙は牢固なり。
 山東殘逆氣殘る、吳楚王度を守る。
 誰か能く君門を叩きて、令を下して征賦を減せしめむ。

【字解】(一) 花石戍 詩の本文によればこの戍は空靈岸より半日航程にあり、清一統志に湘潭縣西にありといへり。(二) 岸 破は通なり。(三) 四序 四季の順序。(四) 平分 氣候四時等分にあり。(五) 迴互 ちぐはぐになる。(六) 天造 天地の物を造ること、「易」屯卦にみゆ。造化自然をいふ。(七) 理亂 治亂。(八) 恒數 常理常道。(九) 盤藤輪 仇氏曰く、舟盤盤岸、四若、藤輪なりと、これ盤藤輪と訓ますなり。浦氏曰く、輪は水を轉する農器なり、久しく廢せられて藤其上に盤る、と。これは盤藤輪と訓むなり。余案するに二説取るに足らず、實の藤輪の車輪形をなすをいふのみ。蔡夢弼が注に、藤盤盤結、如車輪也、とあるは鄭重と合す。(一〇) 罷人 喪民。(一一) 野圃 野らのはたけ。(一二) 牢固 かたし、ちやうぶ。(一三) 山東 河北諸地方をいふ。(一四) 逆氣 叛逆の氣。(一五) 吳楚 楚地をいふ。(一六) 守王度 王者の法度を守る、納税を怠らざるをいふ。

【題義】 花石戍にとまつたことをよんだ詩。大曆四年春、長沙より衡州へ南航時の作。
 【詩意】 ひる空靈岸を辭し去つて、夕がた花石戍を得た。岸には開闢以來の水が通じてながれてゐる、

木は古今の樹がまぎつてゐる。地が蒸して南風がさかんであり、春があつて西日がくれかかつた。四季はそれぞれのもちまへの氣候を四等分してもつてゐるはずなのだが、なんでいまは氣候がちぐはぐになるか。氣候さへそんなでは茫茫たる大自然のあひだに於て治亂にどうしてきまりがあらうか。じよんは舟を車輪狀の藤の樹につないで、ふるいきこり路につゑをついてあるく、すると疲れた人民はみな逃げて村にはゐない、はたけには泉がひとりでに注いでゐる。柴の扉は草むらに没してはゐるが農具はしつかりしたものである。山東地方には叛逆の氣がのこつてゐるが、この吳楚の地方はおかみの法度を守つてゐる。たれか天子の宮門を叩いて命令をくだして勞役や税金をへらす様にしてくれる人はゐないものであらうか。氣のどくな人人である。」

早發

早發

有求常百慮。斯文亦吾病。
以茲朋故多。窮老驅馳併。
早行篙師怠。席掛風不正。
昔人戒垂堂。今則奚奔命。

求むる有りて常に百慮す、斯文亦た吾が病なり。
茲の朋故の多きを以てして、窮老驅馳と併はす。
早行すれば篙師怠る、席掛かるも風正しからず。
昔人は垂堂を戒む、今は則ち奚ぞ奔命するや。」

濤翻黑蛟躍。日出黃霧映。

濤翻へりて黑蛟躍る、日出でて黃霧映す。

煩促瘴豈侵。頽倚睡未醒。

煩促瘴豈に侵さざらむや、頽倚睡りて未だ醒めず。

僕夫問盥櫛。暮顏視青鏡。

僕夫盥櫛を問ふ、暮顏青鏡に視たり。

隨意簪葛巾。仰慙林花盛。

隨意葛巾に簪す、仰ぎて慙づ林花の盛なるに。」

側聞夜來寇。幸喜囊中淨。

側に聞く夜來寇ありと、幸に喜ぶ囊中の淨なるを。

艱危作遠客。干請傷直性。

艱危遠客と作る、干請直性を傷ふ。

薇蕨餓首陽。粟馬資歷聘。

薇蕨首陽に餓る、粟馬歷聘に資す。

賤子欲適從。疑悞此二柄。

賤子適從せむと欲す、疑悞す此の二柄。」

【字解】

【一】早發 朝早く出發す。これも「早行」とおなじく編次者編のためにと、からどいへ出發せしものか確定する能はず。
 【二】有求 求は衣食の計を求むるをいふ。【三】斯文亦吾病 不備の句。作者の斯文相繼徒、斯文憂患餘、斯文亦吾病、竝に異例の句上句にかかる。病は缺點。【四】朋故 朋友故舊。【五】窮老驅馳併 窮老と驅馳とを合併するをいふ。【六】篙師 さまかた。【七】席掛 席の帆をばしらにかけける。【八】風不正 風には正不正なし、席帆のかけかたがゆがみて正當に風をうける様になり居らざるゆゑ、風が帆に對して正しく吹かざるなり。即ち駕船の怠る結果。【九】垂堂 古語に千金の子は坐するに堂に垂ぜずといふ。垂とは堂のはしにすわるをいふ、はしにすわれば墮つるおそれあり。【一〇】奚奔命 奚は何、奔命は人の命令に奔走するなり、「左傳」にみ

【字解】【一】晚洲 清一統志にいふ、晚洲は湘潭縣南一百十里、石洲の北にあり、と。亦た本篇の長沙より衡州へゆく時の作なるを知るべし。【二】參詣 参詣、参詣する。【三】雲石洞 雲石とは雲の色と、霞狀の石をいふ、石は「空靈岸」詩の霞石の霞石とおなじ。洞は多きなり。【四】坡陀 たかき貌。【五】異狀 其の狀一ならざるをいふ。【六】棹重猿把 水まして船位の高きをいふ、重猿は樹枝より垂れさがる猿、把は臂をとること、手つなぎをいふ。【七】度鳥 空をわたるとり。【八】瀾浪 瀾は排列、瀾浪はならんでくる浪。【九】散帙 散帙は書帙を散亂してあさりよむなり、浪あれば船動揺して讀書をさまたぐ。【一〇】危沙折花 當を「そ」とし、花當は花散なりといふは師民瞻の説なり。當を便當の義とし花を折るに便なりとするは「杜陵」の説なり。「批解」に、陳舜俞が説を引ききて、危沙記、險、無他標識、故挿花以當之、といへり。いづれも首肯しがたし。余は當は當値の義、危沙折花當とは、折、花危沙、當（危沙と相値る）の意かと考ふ。【一一】羈離 たび。【一二】檢悅 旅中の閑事をよるこぶ。【一三】吾得 得は豈得の意。【一四】疎放 やりばなし。閒散きままにする。

【題義】晚洲にやどつたときのことをのぶ。大曆四年春、長沙より衡州へ南航する時の作。

【詩意】雲やうつくしい石が多くてそのいろがいきまじり、をかっづきの様に高く壯な風濤がおこつてゐる。晚洲といふ名をちやうどいま知つたが、なるほどその秀色はさまざまである。船路が高まつてをるので棹は猿がつなぎ手をして垂れさがつてゐるあたりをとほり、自分のからだは空をわたる鳥よりもうへにある。おしならんだ浪がやつてくるので書帙をひろげちらすことは妨げられる。岸傍の花を折らうとするときちやうどくづれかからうとしてゐる沙のところによつつかつたりする。この様なことにあうて旅中ながらしばし心をたのしませるが、つかれて老いた我が身は一方ではうらめしさにたへぬ。なせかといふに中原にはまだ兵を解きすてず、亂がつづいてゐる、だから自分は果してつ

ひにきままでゐられるかどうかからぬ。」

清明二首

清明二首

朝來新火起新煙

朝來新火新煙を起す、

湖色春光淨客船

湖色春光 客船に淨し。

繡羽銜花他自得

繡羽花を銜みて他自得す、

紅顏騎竹我無緣

紅顏竹に騎る我緣無し。

胡童結束還難有

胡童の結束還た有り難し、

楚女腰肢亦可憐

楚女の腰肢亦た憐む可し。

不見定王城舊處

見ず定王城の舊處、

長懷賈傅井依然

長く懷ふ賈傅の井依然たるを。

虛霑周舉爲寒食

虚しく霑ふ周舉が寒食を爲すに、

實藉君平賣卜錢

實に藉る君平が賣卜の錢。

清明二首

【字解】【一】清明 冬至の後ち

百五・六・七の三日を寒食節とし火

食を禁ず。其の節明ければ清明節な

り。凡そ陽曆の四月中旬にあたる。

【二】新火 火を禁じ、禁あけては

じめてもやす火なるにより新火とい

ふ、唐にては清明に百官に新火を賜

ふ制なり。【三】湖色 湘水、洞庭

湖につらなるにより湖色といふ。

【四】繡羽銜花 うつくしき羽の鳥

が花を口にくはへる。【五】他自得

他は「かれ」、繡羽をさす、自得は得

意。【六】紅顏騎竹 紅の血色で竹

馬にのる。こどもらのさま。【七】

胡童結束 嬰童のひきしめた身な

鍾鼎山林各天性

鍾鼎山林各天性

濁醪麤飯任吾年

濁醪麤飯任吾年

地の女のほそきこしつき。【一〇】定王城。長沙の城をさす。漢の高祖の五年に吳芮を長沙王とす、芮、城を築く、景帝の二年に唐姬の子、發を長沙王に封ず、發は定王なり、同じく此に都す。【一一】賈傅井。長沙王の大傅、漢の賈誼の井、清一統志に云ふ、長沙縣西北潭錦坊にありと。「荆州記」にいふ、湘州南市の東に賈誼が宅あり、宅中に井あり、小にして深し。上は飲まり下は大に、狀姿に似たり、即ち誼が穿ちし所なり。井の旁に一圃の石牀あり、纔に一人の坐を容る、形制甚だ古なり、と。【一二】虛齋。思惠に浴せざるをいふ、御馳走なければなり。【一三】周舉。後漢の周舉が傳に、舉、井州刺史となり、冬、寒食を爲すことの非をいひて火禁を解きしことを載す。當時は冬、寒食をなせしなり。今は春寒食をなすものなれども舉が事を用ひたり。【一四】君平賣卜錢。已にみゆ。ここは單に百錢を得んことをおもふ意を高したり。【一五】鍾鼎。鐘を鳴らして食し、鼎を列れて煮るは富貴人の事なり。【一六】山林。山林にすむは隱遁者の事なり。

【題義】清明節にあひしことをのぶ。大曆四年清明節、潭州（今の長沙）にての作。

【詩意】けさから新しい火がたかれて新しい煙がおこり、じぶんの旅中の船に春の光も湖水の色もきよらかにみえる。うつくしい羽の鳥が花をくはへてゐるのは得意げである。紅顔で竹馬にのるなどはいまは因縁がない。胡童の装束もめづらしく、楚女の細腰もかはいらしい。定王の城の舊蹟は見られぬが、買誼の宅の井のもとのままにあるのはなつかしい。周舉が火禁を解いてくれたはよいが御馳走なしのじぶんはむなしくその恩恵にうるほふものだ。嚴君平の様に賣卜をしてまうけた百錢のおかげ

にあやかりたいとおもふ。人は鍾鼎の富貴に趨くものと山林に隱居するものとそれぞれその人の天性しただが、じぶんはにこりざけに粗末なごはんをたべて、年月のすぎゆくままにまかせよう。」

【一】

【二】

此身飄泊苦西東

此の身飄泊西東に苦しむ、

右臂偏枯半耳聾

右臂は偏枯し半耳は聾す。

寂寂繫舟雙下淚

寂寂舟を繫ぎて涙を雙び下し、

悠悠伏枕左書空

悠悠枕に伏し左に空に書す。

十年蹴踘將難遠

十年蹴踘難を將る遠く、

萬里鞦韆習俗同

萬里鞦韆習俗同じ。

旅雁上雲歸紫塞

旅雁雲に上りて紫塞に歸る、

家人鑽火用青楓

家人火を鑽るに青楓を用ふ。

秦城樓閣煙花裏

秦城の樓閣煙花の裏、

漢主山河錦繡中

漢主の山河錦繡の中。

【字解】【一】飄。かた方がき

かなくなる。【二】半耳聾。左耳の

聾せしこと「復陰」詩にみえたり。

【三】雙下。左右の兩眼よりくだす。

【四】左書空。昔の殷浩が故事、已に

みゆ。左手にて空中に咄咄怪事の四

字を書せしこと。【五】十年。作者

入蜀後本年までにて十二年なり、前

年に一紀ともいへり、今成數を以て十

年といへり。【六】鞦韆。女兒の春

の手あそびなり、宗懔が歲時記に寒

食には打毬、鞦韆、施鉤等の戲あり

といへり、打毬は即ち蹴鞠なり。

【七】將。ひなをひきふる、古樂府

に風將離曲あり、こども等をひきつ

春水春來洞庭闊 春水に春來りて洞庭闊し、

白蘋愁殺白頭翁 白蘋愁殺す白頭翁。

【一】 長城をいふ、秦、長城を築くにその土皆紫色なり、よりにて紫塞といふ。【二】 燧火用青楓 燧火は木の神を板の孔にきりしりしりして火を出すなり、其の木は北方ならば春は楓、柳を用ふ、今南方は青葉の楓を用ふるなり。【三】 樂城 長安の城をいふ。【四】 漢主 唐の天子をいふ。【五】 白蘋 白きよもぎ、水草なり、大萍ともいふ、五月に白色の花を開く、清明には未だひらがす、こゝはただ南方有名の花を用ひしのみ、蓋し樂の柳の汀州采白蘋、日落江南春、などを連想せしなるべし。【六】 白頭翁 自己をいふ。

【詩意】 我が身は或は西、或は東と飄泊してゐるがこまつたものだ、右の臂はかたはうきかなくなり片方の耳（左耳）はつんばになつてゐる。さびしく舟をつなぎとめては兩眼から涙をながし、いつまでも病の枕に伏しては世をなげくあまり左の手で空中に文字をかく（殷浩の如く）。鞞を蹴つてあそぶことも等を遠くひきぬあるくことは十年ばかりになる。萬里のそらでもこの日鞞をすることはみやことおなじことである。旅する雁は雲のうへへあがつて長城の方へかへる。家のものは火をきりかへるにはこれまでとかはつて青楓を用ひるのである。（おもふにいまごろは）長安の城の樓閣は煙花のうちにあるであらう。吾が君の御統治あそばさるる山河は錦繡のうつくしさのうちにあるであらう。こちらでは洞庭湖のひろい湖面の春の水に春がおとづれて、白蘋の草がこの白頭の老人を甚だしく愁へさせるのである。

發潭州

潭州を發す

夜醉長沙酒 曉行湘水春

夜醉ふ長沙の酒、曉に行く湘水の春。

岸花飛送客 檣燕語留人

岸花飛びて客を送る、檣燕語りて人を留む。

賈傅才未有 褚公書絕倫

賈傅才未だ有らず、褚公書絶倫なり。

名高前後事 回首一傷神

名は高し前後の事、首を回らして一に神を傷ましむ。

【字解】 【一】 潭州 唐時の潭州は今の長沙府なり。【二】 湘水 湘江なり、長沙府城西にあり、北流す。【三】 賈傅 長沙王の大傅、漢の賈誼。【四】 未有 古來未だ有らず。【五】 褚公 褚遂良なり、遂良は魏徴に工なり、太宗侍書たらしむ、高宗の時右僕射となる、武昭儀を立てて后となすことを諫め潭州都督に左遷せらる。【六】 前後事 賈誼は漢代にて前にあり、褚遂良は唐代にて後にあり。

【題義】 潭州（長沙）から出發したことをよんだ詩。大曆四年春、長沙より衡州へ南航するときの作。

【詩意】 夜、長沙の酒に酔ひ、曉には湘水の春に行く。岸の花は飛びながらたびするもの（自己）を送つてくれる、檣にとまつてゐる燕はさへづりながら人（自己）をひきとめようとしてゐる様だ。（この土地に關係ある人についておもひだすと）賈誼の才は古來まだ無いほどの人物であり、褚遂良の書はたぐひまれなるものである。事がらに前後の差はあるがどちらも名高い人である。じぶんは首を古昔にふりむけて二人のことをおもひひとへにこころをいたましむるのである。

發白馬潭

白馬潭を發す

水生春纜沒。日出野船開。

水生じて春纜沒す、日出でて野船開く。

宿鳥行猶去。叢花笑不來。

宿鳥行けば猶ほ去る、叢花笑へども來らず。

人人傷白首。處處接金盃。

人人白首を傷む、處處金盃に接す。

莫道新知要。南征且未迴。

道ふ莫かれ新知要ありと、南征且く未だ迴らず。

【字解】(一) 白馬潭。趙注に白馬潭は潭州にありとす。顧注に岳州にある白馬湖を以て之に充てたり。白馬湖ならば岳州府臨湘縣

にありて、岳陽樓よりも以前に經過すべき地なり。岳陽樓をすぎし時は暮冬なるに本篇には春纜・叢花の語あり。顧注恐らくは是に非ず、蓋により潭州に屬する地とみるべきなり。(二) 宿鳥行猶去。叢花笑不來。諸説あり、今我がよしとする所をのぶ。行の字、笑の字は作者に屬せしめてみるべし。行は我が舟行するなり、笑は我が獨笑するなり。舟行するによりて岸上の宿鳥止まれども猶ほ去るがごとし。流れに浮るものなるが故に前面の叢花容易に來ることおそきによりて我獨り之を笑ふ。(三) 人人。他の人人。(四) 傷白首。我が白首をあはれみいたむ。(五) 接金盃。實に逢ふをいふ。(六) 新知要。要とは必要、新しき相知の人を得る必要。

【題義】白馬潭を出發せしときの詩。大曆四年春、長沙より衡州に向つて南航する時の作。

【詩意】春の出水で、纜が底に沒してゐる、日がでるころにやつと出帆した。舟がうつりゆくと宿してゐる鳥も飛び去るがごとくみえ、のぼりで船脚がおそいから前方に見えた花の叢も容易にてまへに來ぬのでをかしくなる。じぶんのであふ人人はみなじぶんの白首になつたことをきのどくがつて

くれ、到る處でうつくしい酒杯をうけとる。しかし新しい知りあひがいるなどとはいふな、じぶんは南方へでかけてまあここしばらくはかへらぬのである。

野望

野望

納納乾坤大。行行郡國遙。

納納乾坤大なり、行行郡國遙なり。

雲山兼五嶺。風壤帶三苗。

雲山五嶺を兼ね、風壤三苗を帶ぶ。

野樹侵江闊。春蒲長雪消。

野樹江の闊なるを侵し、春蒲雪の消せるに長す。

扁舟空老去。無補聖明朝。

扁舟空しく老い去る、聖明の朝に補ひ無し。

【字解】(一) 納納。包容する貌、變通之が時に、納納江海深、とあり。(二) 五嶺。衡山の南より東は海に至る一線以南に於ける

主なる嶺をいふ、廣州記に、大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽を五嶺とし、南康記に大庾嶺、桂陽の甲騎嶺、九眞の都盧嶺、臨賀の萌渚嶺、始安の越城嶺を五嶺とす。(三) 風壤。風土。(四) 三苗。潭州は古の三苗國の南境とせらる。「尙書」舜典の三苗の注に、三苗の國は洞庭を左にし、彭蠡を右にすといへり。潭州一帯の地はその國にあたる。

【題義】原野にてひろくながめしときのことをのぶ。大曆四年春、潭州より南航中の作。

【詩意】天地はひろく物をいれて廣大である。じぶんは一步一步はるかなる郡國にむかうてゆく。雲のゐる山は五嶺の山脈を兼ね、風土は古代の三苗のそれを帯びてゐる。原野の樹は闊遠なる江面まで

おしすすんでゐるかのごとく、春さきの蒲は雪の消えたあとでたけがのびてゐる。じぶんは扁舟につてゐるうちにいたづらに年老いてしまひ、聖明の天子のみよになら神補したてまつるところがないのははづかしいことだ。

入喬口【原注】長沙北界。

喬口に入る【原注】長沙の北界なり。

漠漠舊京遠、遲遲歸路除。

漠漠舊京遠し、遲遲歸路除なり。

殘年傍水國、落日對春華。

殘年水國に傍ふ、落日春華に對す。

樹蜜早蜂亂、江泥輕燕斜。

樹蜜に早蜂亂る、江泥に輕燕斜なり。

賈生骨已朽、悽惻近長沙。

賈生骨已に朽つ、悽惻長沙に近し。

【字解】 喬口、原注に長沙の北界とあり。清一統志にいふ、喬口鎮は長沙縣西北六十里にあり、と。本篇は次篇「銅官渚守風」詩とおなじく長沙未着以前の作なり。喬口誤れるなり。【二】除、遠なり。【三】水國、湖國をいふ。【四】賈生、賈誼。

【題義】 喬口といふ地にはひり來りしときの詩。大曆四年春、岳陽より潭州へ航行中の作。

【詩意】 漠漠として長安の都は遠く、途中にぐづぐづして故郷への歸路ははるかである。老いさき短

い年にあたつて湖水の國にそうであるき、日の落ちかかるをりに春のはなやかなありさまにうちむかふ。樹木の蜜のあるところには早めの蜂がみだれ、江邊の泥には身がるげな燕が斜にとんでゐる。賈誼の骨はもはや朽ちた、(また誼の如き人物を現代にみることはできぬ)、誼のながされてゐた長沙が近くなつたにつけてじぶんの心はものがなしくてならぬ。

銅官渚守風

銅官渚にて風を守る

不夜楚帆落、避風湘渚間。

夜ならずして楚帆落つ、風を避く湘渚の間。

水耕先浸草、春火更燒山。

水耕先づ草を浸す、春火更に山を燒く。

早泊雲物晦、逆行波浪慳。

早泊すれば雲物晦し、逆行すれば波浪慳しむ。

飛來雙白鶴、過去杳難攀。

飛來す雙白鶴、過ぎ去りて杳として攀ち難し。

【字解】 銅官渚、長沙府城北六十里にあり、喬口と相距離からざるなり。清一統志にいふ、銅官渚は長沙縣西北の銅官山下にあり、一に銅官浦に作る、もと傳ふ、楚、錢を鑄し處なりと。【二】守風、風の止むをじつとして待つなり。【三】楚帆落、落帆は帆をたふすこと、楚帆は楚地をゆく帆。【四】湘渚、湘水のなごき。【五】水耕、水田を耕す。【六】浸草、草をとり水にひたして糟のこやしとするなり。【七】燒山、舊解に山を燒き、燒草を作ることとす。燒草は燒きし草を(恐らくは草根の土に生えたままに)糟の根にかひ、肥料とするなりと、余案するにこれは水耕に對して陸上山田の火耕をいふものならん。【八】晦、くらし。【九】波浪慳

慳は「たしむ」浪が舟行を妨ぐるは舟行せしむることをたしみてせしめざるに似たり。【10】白鷺 づるを言ふは自己風に阻せらるるによりて其の飛ぶを羨むなり。

【題義】銅官渚にて風止みを待ちしをりの詩。岳陽より潭州へ南航中の作。

【詩意】夜にならぬのに帆をおろして湘水のなぎさに風を避ける。水耕してゐるものは先づ草を水にひたして肥とせんとし、山田では更に山を焼きたてて田つくりの用意をしてゐる。早くとまつたのに氣象のありさまはくらく、水流をさかのぼるにあたつて波浪はこちらの進行するのををしんでゐるげである。そこへ一對の白い鶴が飛んで来て、またとほりすぎてたち去つてしまひ、はるかにして攀づることならぬ。風止みを待つのはまことに待ちどほしいことである。

北風 【原注】新康江口。信宿方行。

北風 【原注】新康の江口に、信宿して方めて行く。

春生南國瘴氣待北風蘇。春には生ず南國の瘴、氣は北風を待ちて蘇る。
向晚靈殘日初宵鼓大鑪。晩に向ひて殘日に響る、初宵大鑪を鼓す。
爽攜卑濕地聲拔洞庭湖。爽をば攜ふ卑濕の地、聲は抜く洞庭湖。

萬里魚龍伏。三更鳥獸呼。萬里魚龍伏す、三更鳥獸呼ぶ。

滌除貪破浪愁絕付摧枯。滌除破浪を貪る、愁絶摧枯に付す。

執熱沈沈在。凌寒往往須。執熱沈沈として在り、凌寒往往須つ。

且知寬疾肺不敢恨危途。且つ知る疾肺寬なるを、敢て危途を恨まず。

再宿煩舟子衰容問僕夫。再宿舟子を煩はす、衰容僕夫に問ふ。

今晨非盛怒便道卻即長驅。今晨盛怒に非ず、便道卻即長驅す。

隱几看帆席雲山湧坐隅。几に隠りて帆席を看れば、雲山坐隅に湧く。

【字解】【一】新康江。新康は縣の名、晉の大康元年、益陽縣を改めて新康といふ、隋唐には新康を併せて益陽に入る、宋には寧郷縣を置、清朝も之による。新康江とは今の湘江なり。清一統志にいふ、湘江は寧郷縣西一百五十里にあり、源は大瀟山に出づ、東北流して長沙縣界に入る、新康江と名づく、と。地里を案するに喬口より更に南に於て湘江にそそぐ。故に本篇は經過の順よりすれば「入喬口」詩の後、「銅官渚守風」詩の前にあるべく、長沙未前以前の詩なり。【二】鼓大鑪。鼓はうごかす、大鑪は大なる火鑪なり、「莊子」に、以天地爲大鑪の語あり。句の意或は熱蒸をいふとし、或は風を生ずるをいふとす。今後説による。【三】爽攜。風が爽をたづさへ来るなり。【四】卑濕地。湖南長沙の地方はひくくしめりけ多き地なり、語は賈誼傳にみゆ。【五】聲拔。拔とは翫ほ奪ふといふが如し、湖水の聲を奪ひ壓倒す。【六】魚龍伏。風を恐るるなり。【七】鳥獸呼。風に驚くなり。【八】滌除。瘴氣をそそぎのぞく。【九】貪破浪。舟行を貪るなり。「南史」に、宗憲が曰く、願乗長風破萬里浪、と。【10】愁絶付摧枯。愁絶は甚だしく愁ふるなり、付は「まかす」の意、摧枯は枯木をくだくなり。此の句、強風枯木をくだくないふのみにては愁絶といふほどのことに非ず、摧

枯は蓋し自己の枯木のごとくくだき倒さるるをいふならん。【二】執熱 あつきこと、作者の慣用語、語は「詩」乗案にみゆ。【三】沈沈 ふかき貌。【四】艘寒 寒さをかすをいふ。【五】須 必要なるをいふ。【六】寛疾 肺疾のかるくなること。【七】再宿 二泊。【八】舟子 船頭。【九】衰容問僕夫 衰容の元氣づきしや否やを問ふ。【一〇】盛怒 風のおれくるふをいふ。風賦に、盛怒於土囊之口、とあり。【一一】懸几 臨息による。【一二】帆席 むしろでつくりし帆。【一三】雲山 雲のある山。【一四】湧坐隅 坐席のすみにわきたつが如し。

【題義】北風の吹きしとき舟をすすめしことをのぶ。大曆四年春、岳陽より長沙に向ひ南航中の作。喬口と銅官渚との中間に置くべき詩篇なり。

【詩意】春にあたつて南國炎瘴の氣が生じた。じぶんの元氣は北風の吹くのを待つてはじめてよみがへる。夕ぐれになりかけていり日の前に土沙がふり、青のくちから天地の大鐘をうごかして風がおこつてきた。この風は卑濕といはるる土地に爽かさをもちきたり、その聲は洞庭湖の水聲をも奪はんばかりである。それで萬里の水面に魚龍は潛伏してしまひ、よなかごろに鳥や獸がさけびたてた。炎瘴の氣がのぞかれたので自分は浪を破つて航行することを貪り、しんばいの極みではあるがこの枯木の様なからだは摧けてもかまはぬとおもふ。あつくるしさがいつまでもふかくのこつてゐるのでは、ときどきは寒さををかすといふことも必要になる。まづまづ肺の疾がすこしでもゆるんだことがわかるので、危い途を取ることも恨みとはせぬ。二泊もして風をさけたからいざと船頭に骨折をたのみ、ふだんの老容のさまざまいまはたちなほつたであらうと僕夫にたづねてみる。』けさはそんなに風があ

れくるうてゐるわけではないから、都合のいい道からすぐに遠くでだすことにした。臨息によりかかりながら席帆をながめてゐると、坐席のすみには前方の雲山が湧くがごとくむらがりたつさまがみえる。』

雙楓浦

雙楓浦

輟棹青楓浦、雙楓舊已摧。

棹を輟む青楓浦、雙楓舊已に摧く。

自驚衰謝力、不道棟梁材。

自ら驚く衰謝の力、道はず棟梁の材と。

浪足浮紗帽、皮須截錦苔。

浪は紗帽を浮ぶるに足る、皮は須らく錦苔を截るべし。

江邊地有主、暫借上天迴。

江邊地主有らば、暫く借りて天に上りて廻らむ。

【字解】【一】雙楓浦 清一統志にいふ、雙楓浦は湖南三十里湖水中にあり、一名は青楓浦、と。洞庭は長沙の東にあたる縣の名なり。【二】輟棹 さなすことをやめる。【三】雙楓 二本の楓。【四】衰謝力 衰へ減じたる體力。【五】不道棟梁材 仇注にいふ、元來棟梁の材なりとはいはざるに、と。浦注にいふ、自己のみならずこの棟梁の材までが衰謝するとは意外なり、と。仇注に依る。【六】浪足浮紗帽・皮須截錦苔 二句舊解奇怪なる説多し。鄭説をのぶ。浪とは浦の浪なり。浮紗帽とは紗帽を直接に水上に浮ぶるをいふに非ず、紗帽を着けたる自己が舟にのりて浮ぶをいふ、紗帽は浦注にいふ、隱者の冠と。皮は楓樹の皮、截錦苔とは錦苔をけづりおとすことにて、けづりおとすはその華美を去るためならん。【七】地有主 主は主人。【八】暫借 借とはこの楓樹を借るなり。【九】上天迴 これに據りて天河に至る故事を連想していふ、楓樹を以て樓となして天に上るなり。

【題義】雙楓浦にての所感をのよ。作者何のために瀏陽に至りしやは明かならず、其の時期も不明なり、岳陽より潭州への南航中の事には非ざらん。想像するに潭州を去りて衡州に向はんとするすこし前に事を以て瀏陽にゆきしものならんか。

【詩意】棹をやめて青楓浦で舟をとどめた。ここにある二本の楓はもとからくだけたかたかたである。自分は本来棟梁の材だとはおもはぬが、いままさら体力が衰滅したのには驚く、(ちやうどこの楓の様だ)。この浦の浪は紗帽をつけて浮ぶに足るものがある。この楓樹の皮からは錦の苔などはきりおとさう、(さうして搓を作る)、この江のほとりに土地の主人が有るならば其の人から楓樹の搓をしばらく借りうけて天へのぼつてかへりたいとおもふ。

詠懷二首

詠懷二首

人生貴是男。丈夫重天機。
未達善一身。得志行所爲。
嗟余竟轉軻。將老逢艱危。
胡雛逼神器。逆節同所歸。

人生は是れ男なるを貴ぶ、丈夫は天機を重んず。
未だ達せざれば一身を善くし、志を得れば爲す所を行ふ。
嗟余竟に轉軻、將に老いむとして艱危に逢ふ。
胡雛神器に逼る、逆節歸する所を同じくす。

河洛化爲血。公侯草間啼。
西京復陷沒。翠蓋蒙塵飛。
萬姓悲赤子。兩宮棄紫微。
倏忽向二紀。奸雄多是非。
本朝再樹立。未及貞觀時。
日給在軍儲。上官督有司。
高賢迫形勢。豈暇相扶持。
疲茶苟懷策。棲屑無所施。
先王實罪己。愁痛正爲茲。
歲月不我與。蹉跎病于斯。
夜看鄴城氣。回首蛟龍池。
齒髮已自料。意深陳苦詞。

河洛化して血と爲る、公侯草間に啼く。
西京復た陷沒す、翠蓋塵を蒙りて飛ぶ。
萬姓赤子悲しむ、兩宮紫微を棄つ。
倏忽二紀に向ふ、奸雄是非多し。
本朝再び樹立す、未だ貞觀の時に及ばず。
日給軍儲に在り、上官有司を督す。
高賢形勢に迫らる、豈に相扶持するに暇あらむや。
疲茶苟も策を懷くも、棲屑施す所無し。
先王實に己を罪す、愁痛正に茲が爲なり。
歲月我と與ならず、蹉跎斯に病めり。
夜鄴城の氣を見る、首を回らす蛟龍の池。
齒髮已に自ら料る、意深くして苦詞を陳す。

【字解】(一) 貴是男、榮辱期回く、男尊女卑、故以男爲貴、吾既得爲男、是れ一の樂みなり、と「列子」にみゆ。(二) 重天

機。天機は天時の機會、「易」の知幾の類、即ち下の二句の場合を知るをいふ。【三】未遑一身得志行所爲。孟子曰く、士窮、不遑、道不遑、窮、則獨善其身、達、則兼善天下と。又曰く、得志、則澤加于民と。二句之に本づく。未遑とは要路に立つを得ざるなり、善一身とは自己の身のみを善く修むるなり。得志とは要路に立ち其の志す所を行ふを得るをいふ、行所爲とは爲さんと欲する所の理想を實行するをいふ。【四】不平の貌、不遇をいふ。【五】胡憐。安祿山。【六】神。天下をいふ、老子曰く、天下神器、と。【七】逆節。忠順に反したる行ひ。賊黨をいふ。【八】同所歸。歸趨する所同じ、同じく神器を奉はんとするをいふ。【九】河洛。黄河・洛水、洛陽方面をいふ。【一〇】化爲血。戰場となる。【一一】草間啼。奔りかかれて泣くなり。【一二】西京。長安。【一三】翠蓋。天子の車蓋。【一四】蒙塵。逃げ出せしをいふ。【一五】萬姓。人民。【一六】悲赤子。あかこの如く悲しむ。【一七】兩宮。玄宗・肅宗。【一八】棄紫微。皇宮をすてて他方に出られしこと。紫微宮は天の帝座。【一九】候。待ちまち。【二〇】向二紀。二紀は二十四年、大曆四年よりさかのほれば天寶五載にて二十四年となる、向ふとあれば天寶七八年頃よりかぞへしなり。【二一】奸雄。わるきつよいもの、朝廷に反抗する武人等をいふ。【二二】多是非。彼等の行爲によしあしあり。仇氏いふ、降將の向背常あらずるをいふと。【二三】本朝。代宗の朝。【二四】貞觀。太宗の年號。【二五】日給在軍儲。日日供給すべきことが軍需品に在り。【二六】上官。上長官。【二七】有司。部下のかかりの役人。【二八】高賢。當路者をさす。【二九】相扶持。國家の顛危をささふるをいふ。【三〇】論語に、危而不持、顛而不扶、の語あり。【三一】疲茶。勝弱の貌、つかれてよわきなり、自己の老衰をいふ。【三二】苟懷策。苟とは謙辭、懷策は國家を救ふはかりことをいふ。【三三】樓屏。仇氏いふ、樓樓屏屏なり、道途に奔走するをいふと、案するに樓樓は逆なき貌、屏屏は小事にたづさる貌。【三四】先王實野。先王は古代の賢王をいふ、左傳に、禹湯罪己、其興也勃焉、とみゆ。而して裏面には肅宗即位の初に詔を下して自己を責められしことを意味す。而して暗に代宗に求むる所あるなり。蔡夢弼以來先王を直に肅宗なりとし、朱氏の如きは先王は先皇に作るべしといへり。改むるに及ばず。【三五】不我與。我とともに在らず、歲月は我を持つてはくれず先きにすすむ。【三六】駭。驚。【三七】病子斯。斯は寄地をいふ。【三八】鄂城氣。鄂は豊につくるをよしとす。鄂城雷煥が劍氣、已にみゆ。【三九】數。數。風雨にあひて塵塵せんことをおもふなり。【四〇】日自料。料るとは前途に見こみなきことを推量するなり。【四一】意深。胸中に深意あるをいふ。【四二】陳苦詞。言ふに苦しきことばをのべる。

【題義】胸中に抱懐する所を詠じたる詩。仇氏大曆四年春、潭州（長沙）より衡州へさかのぼるときこの作とせり。

【詩意】人は男子と生れたことは貴いことだ、丈夫たるものは天時の機會を知ることをつとぶ。すなはち自己が要位に達しなければ我が一身をのみ善く修めし、要位に達して志を得れば自己の爲さんとする理想を實行する。ああ、自分は不遇で老いかかつた時に世のなかのなんぎにであうた。えびすのこども（安祿山）が神器たる天下をうかがひ、他の逆節のものどももまた同じ様な目的に向ひ、洛陽の地方は血を流す所となり、公侯等は草むらににげかくれて泣いた。長安もまた陥つて、君の御車は塵をあびて飛びだされる。萬民はあかこの様に悲しみ、おふたかた（玄宗・肅宗）は皇宮をすてておでましになつた。たちまちのうちに二十四年にならうとするが、そのあひだに奸雄どものしたことに一非常ならぬものがある。今の朝廷はふたたび樹立せられたもの、まだ貞觀の御代には及ばぬ。日日軍需品を供給することが急務で、上官は下役をせめててゐる。高賢な當路者も形勢にせまられて、國家の顛危をささへるところへは手がとどかぬ。じぶんはつかれながらもすこしは救済策をもつてゐるのであるが、細瑣なことにのみせはしく追はれて何も施爲する所が無い。むかしの賢王は國家の事については自己を責めたものだ（御先代もさうであつた）、じぶんがひどくしんばいするのはこのためだ（「いまは君が自己を罪せらるることが足らぬ」の意）。歲月は待つては

くれず先へすすんでゆく、いまこんなところでじぶんはつまづいて病んでゐるのだ。」じぶんは夜は豊城の劍氣が斗牛を衝くのながめたり、また蛟龍のすむ池の方をふりむいてみたりする。ただ年齢のけのぐあひからおしはかつてみればなにもできないことはわかつてゐる、それで胸中に無限の深意をもちつつこの言ひぐるしきことばをのべるのである。」

〔一〕

邦危壞法則聖遠益愁慕。飄飄桂水遊。悵望蒼梧暮。潛魚不銜鈎。走鹿無反顧。噉噉幽曠心。拳拳異平素。衣食相拘闔。朋知限流寓。風濤上春沙。千里侵江樹。逆行值吉日。時節空復度。井竈任塵埃。舟航煩數具。

〔二〕

邦危くして法則壞る、聖遠くして益愁慕す。飄飄たり桂水の遊、悵望蒼梧の暮るるを。潛魚鈎を銜まず、走鹿反顧すること無し。噉噉たり幽曠の心、拳拳平素に異なり。衣食相拘闔す、朋知流寓に限らる。風濤に春沙に上る、千里侵江の樹あり。逆行吉日に値ふ、時節空しく復た度る。井竈塵埃に任す、舟航數具ふるを煩はす。

牽纏加老病。瑣細隘俗務。

牽纏老病加はる、瑣細俗務に隘にせらる。

萬古一死生。胡爲足名數。

萬古死生一なり、胡爲れぞ名數足るや。

多憂汗桃源。拙計泥銅柱。

多憂にして桃源を汗さむ、拙計銅柱に泥む。

未辭炎瘴毒。擺落跋涉懼。

未だ辭せず炎瘴の毒、擺落す跋涉の懼。

虎狼窺中原。焉得所歷住。

虎狼中原を窺ふ、焉んぞ歷る所に住まふことを得む。

葛洪及許靖。避世常此路。

葛洪及び許靖、世を避くるは常に此の路よりす。

賢愚誠等差。自合受馳驚。

賢愚は誠に等差あるも、自ら合に馳驚を受くべし。

羸瘠且如何。魄奪鍼灸屢。

羸瘠且つ如何にせむ、魄は奪はる鍼灸の屢なるに。

擁滯僮僕慵。稽留篙師怒。

擁滯すれば僮僕慵なり、稽留すれば篙師怒る。

終當掛帆席。天意難告訴。

終に當に帆席を掛くべし、天意告訴し難し。

南爲祝融客。勉強親杖屨。

南祝融の客と爲り、勉強して杖屨を親らせむ。

結託老人星。羅浮展衰步。

老人星に結託して、羅浮に衰歩を展べむ。

【字解】 〔一〕法則 紀綱をいふ。 〔二〕聖遠 聖は聖君。 〔三〕桂水 一名は澗水。湘水と同じく桂林府興安縣海陽山より出で、

瀾水は南流し湘水は北流す。朱注に二水はかかる關係あるゆゑ瀾水も亦た桂水と稱するを得といへるは立ち入りたる説明なり。作者瀾水をさかのぼり桂水の方までゆかんと思ふによりて桂水をいへるなり。【四】君梧、舜の葬處、已に「過南嶽入洞庭湖」詩にみゆ。【五】不銜鉤、餌につられて釣針のかぎをくはへぬ。【六】無反顧、よこむきせずまっすぐに走る。反は返なり、魚・鹿は以て現在の自己に比す。【七】嘯嘯幽憤心、拳拳異平素、仇注に云ふ、瀾魚走鹿、皆知見幾遠、害、我亦本有幽憤之心、今拳拳屈身于人、而異於素志者、嗚呼衣食所關、朋知遠隔、耳、と。是は恐らくは作者の心事を誤解せり。愚見は頗る之と異なり。仇氏は作者平生幽憤の心ありて今之に異なるとなせり。愚案するに、作者は平生其の君を喪身に致し風俗を淳ならしめんことを以て志となせり。幽憤の心の如きは平生の志に背きて一時的に之に耽るのみ。故に「次空盤岸」詩にいふ、醫者留遺恨、恥爲迷人語、と、其の平生幽憤に耽らざりしことをさして達人に語らるといひしなり。以上は作者の心事につきのべたり。次には字句につきのべん、嘯嘯とは明白なる貌、幽憤心とは幽憤の心、山水自然などをたのしみて氣ながにすこす心なり。魚鹿の心を今の心とするこれ嘯嘯幽憤心なり。拳拳異平素とは、異平素之拳拳の意、拳拳は「中庸」にみえ、捧持の貌、即ち君を喪身に致さんとの志を寸時も胸より離すことなく拳拳服膺するなり、今幽憤の心を抱くは平素の拳拳とはちがつてあるといふが本句の意なり。【八】拘閔、拘はかかふる、閔はとどむる、ささへる。拘束妨害をうけるをいふ。【九】朋知阻遠、自己遠寓の地になれば朋知に限りあるをいふ、少數の知り人しかなし。【十】上春沙、瀾がのぼるにあらず、自己が水をさかのぼるをいふ。湘江は水碧沙明の江なるにより沙といふ。【二】侵江樹、前の「野望」詩に、野樹侵江關の句ありたり。【三】逆行、上航をいふ。【四】吉日、清明節その他の令節。【五】井甕任塵埃、これは陸上につさいふものに似たり。井やかまどは炊事に必要なるもの、それを塵埃にまかせて自己は離れて舟にのるなり。【六】煩數具、手かずなかけてしばしば用意する。【七】幸甚、ひかれ、まはれる。【八】臨俗務、自己の自由が俗務のために狭隘にせられる。【九】一死生、同一の死生、人によりて差別なき死生。【十】胡爲、胡は何、胡爲は何爲れぞなり。【二】足名數、足は「たるし」、多きに過ぐるをいふ。名數は禮數といふがごとし。足名數はくたくたしき禮法の多すぎるをいふ。【三】汗流渥、隱遁生活をせんと桃源に入らんとすれば其の地をけがす恐れあり、汗流なり。【四】泥劍柱、この句不備なり。劍柱は馬授が故事、交趾にあり、泥とは劍柱の地にゆかんとして途中になづみなるをいふ。楊注に衡州にも吳の程普建つ所の劍柱ありとてこれを湖南に泥み居るとくは附會に失せり。

【三】提攜、はらひのける。【四】葛洪、洪字は稚川、晉の人、交趾に丹砂を出だすときき句瀾の合たらんことを求め、遂に子弟をひきゐて俱に行き乃ち羅浮山に止まりて丹を鍊る。【五】許靖、靖字は文休、董卓の誅を避け走りて交趾に至る、のち劉璋に招かれて蜀に入り先主劉備が臣となる。【六】此路、廣東交趾に向ふ路をいふ。【七】賢愚、賢は葛、許をさし、愚は自己をさす。【八】等差、差は高低のちがひをいふ、等はひとし。【九】馳驚、はせる、かけすりまはるること。【十】萬病、つかれやせる。【二】積留、事によりてくりする。【三】鍼灸、たびたび針や灸の療治をする、病のためなり。【四】捕魚、病氣のための滞在。【五】精留、事によりてぐづついてとどまる、精は緩なり。【六】萬節、さなかた、船頭。【七】終當二句、倒插なり、おきかへてみるべし。【八】羅浮、羅浮山にありてとどまる、精は緩なり。【九】南爲二句、倒插なり。【十】祝融、衡山にある峰の名、董鍊師の居る所なり。【二】老人星、已にみゆ。【三】羅浮、增城、博羅二縣の境にあり、羅山・浮山の二者合體して羅浮山といふ、神仙の居る所なり。道家にては羅浮の洞、周回五里、朱明曜真之天と名づくといふ。【四】展衰步、老人のつかれたあゆみをのべる、たづねてゆくをいふ。【詩意】國家が危くなつて法則が破壊された。今の世は聖君と遠く隔たるのでますますそれが慕はしい。これからぶらりぶらり桂水の遊をなすのであるが、今からはるかに舜の蒼梧の暮をうらめしくながめやる。『深淵にひそむ魚は餌につられて釣鉤をくはへることはせぬ。山を走る鹿はあとをもふりむかずまっすぐにかけてゆく。(自分はその魚や鹿のごとく)じぶんがいましたづかなひまな生活をおもふ心ははつきりとしてきた、これまでいつも國家の事のみを胸に忘れなかつたのとはよほどかはつてきた。ただ衣食といふものの制限があり、流寓してあるく身には朋友知己のかすにも制限がある。それで風濤をわかつて春沙の江をさかのぼると、江を侵す樹色は千里につらなる。上航のうちに吉日にであふこともあるが、いたづらにその時節をもすごしてしまふ。時には岸上の井甕としたしむけれど

もまたそれを塵埃に委し去つて、たびたび舟航の用意をする。老病はつきまとうてくる、瑣細な俗務は自由をせばめる。萬古にわたつてだれもみな同じ様に生死するのだ、なんでうるさき人間の禮法に關したことが多すぎるのか。」これから隱通しようとしても憂國の念ばかり多い自分は桃源の仙境を汚すことになりはしないか、仕方のまづいために自分は今なほ銅柱のある交趾へゆけず途でなづんでをる。しかし炎瘴の毒氣も辭するつもりはない、山川を跋涉する懼れもはらひのける。虎狼の様なものが中原を窺うてゐるときだ、どうして經過する場所にとどまつてゐることができよう。葛洪の許靖だの、世を避けた人人はみな自分のとほるこの路をとほつたのだ。彼等と自分と賢と愚との等級はあるが、しせん自分の如きものはあちこちとかけめぐるといふ運命にあはねばならぬはずである。このつかれてやせた身をまあどうしようか、あまりたびたび針だの灸だのをせねばならぬのにびつくりする。病氣のために滞在すると僮僕どもはなまける、事によつてぐづぐづしてゐると篙師がおこる。天に訴へようとしても天には訴へられぬ、結局は席帆を掛けて旅をつづけねばならぬ。」さうして無理やりにもみづから杖をつき屨をはいて、南のかた衡山へいつて祝融峰の客となり、さらに南極老人星に結託して羅浮山の仙洞まで力なき歩みをのばすであらう。」

【附錄】

杜員外兄垂示詩、因作此寄上

郭 受

杜員外兄、詩を垂示す、因りて此を作りて寄上す

新詩海内流傳遍

新詩海内流傳遍し、

舊德朝中屬望勞

舊德朝中屬望勞す。

郡邑地卑饒霧雨

郡邑地卑くして霧雨饒し、

江湖天闊足風濤

江湖天闊くして風濤足る。

松花酒熟旁看醉

松花酒熟して旁く醉を看る、

蓮葉舟輕自學操

蓮葉舟輕くして自ら操を學ぶ。

春興不知凡幾首

春興知らず凡そ幾首ぞ、

衡陽紙價頓能高

衡陽の紙價頓に能く高からむ。

酬郭十五判官受

郭十五判官受到酬ゆ

才微歲晚尙虛名、才微にして歲晚に尙ほ虛名あり、

【字解】「」酬郭十五判官 郭

杜員外兄垂示詩因作此寄上 酬郭十五判官受

臥病江湖春復生。病に臥して江湖に春復た生ず。

藥裏關心詩總廢。藥裏關心詩總て廢す。

花枝照眼句還成。花枝眼を照らして句還た成る。

只同燕石能星隕。只だ燕石と同じく能く星隕す。

自得隋珠覺夜明。隋珠を得しより夜の明かなるを覺ゆ。

喬口橋洲風浪促。喬口橋洲風浪促し。

驚帆何惜片時程。驚帆何ぞ惜まむ片時の程。

星の如くおつるなり、隕石アキ於宋ニ五ツト隕星也、と「左傳」にみゆ。「七」隋珠、隋侯大蛇の傷けるを救ひ、蛇直徑一寸の珠を報いしに、其の珠夜光明あり室をてらすべしと「搜神記」にみゆ。以て郭受が詩に比す。「八」喬口、前に「入喬口」詩あり、長沙の北にある地の名。「九」橋洲、長沙縣西南四里の江中にある洲の名。「一〇」促、速かなるをいふ。「一一」片時程、少時を要する水路。

【題義】衡陽の判官郭受がよこした詩の返事。大曆四年春、潭州にての作。

【詩意】自分は才がすこししかないのに晩年に實のそはぬ名聲がある。江湖に病に臥してゐるをりにもまた春になつた。藥袋のことが氣になつてゐるのですべて詩をやめてゐたのだが、花の枝に眼を照らされるとやつぱり句ができる。自分の詩はつまらぬ燕石の様なものでそれがやたらに星の隕ちる様

におちちるまでだ。あなたの詩は隋侯の珠の様のもので之を得てからは夜も明るい様な氣がする。喬口・橋洲の風浪ははやい、だからすこしのみちのりを風帆を飛ばしてそちらへおたづねすることは惜しむところではない。

望嶽

望嶽

南嶽配朱鳥。秩禮自百王。南嶽朱鳥に配す、秩禮百王よりす。

歛吸領地靈。瀕洞半炎方。歛吸地靈を領す、瀕洞として炎方に半なり。

邦家用祀典。在德非馨香。邦家祀典を用ふ、德に在りて馨香に非ず。

巡狩何寂寥。有虞今則亡。巡狩何ぞ寂寥たる、有虞今は則ち亡し。

泊吾隘世網。行邁越瀟湘。吾が世網に隘にせらるるに泊び、行邁瀟湘を越ゆ。

渴日絕壁出。漾舟清光旁。渴日絶壁に出づ、舟を漾はす清光の旁。

祝融五峰尊。峰峰次低昂。祝融五峰尊し、峰峰次して低昂す。

紫蓋獨不朝。爭長幘相望。紫蓋獨り朝せず、長を争ひて幘として相望む。

恭聞魏夫人羣仙夾翱翔。恭しく聞く魏夫人、羣仙夾みて翱翔すと。
 有時五峰氣散風如飛霜。時有りてか五峰の氣、風に散ずる飛霜の如しと。
 牽迫限脩途未暇杖崇岡。牽迫脩途に限らる、未だ崇岡に杖づくに暇あらず。
 歸來覲命駕沐浴休玉堂。歸來覲はくは駕を命じ、沐浴して玉堂に休せむ。
 三嘆問府主曷以贊我皇。三嘆して府主に問ふ、曷を以てか我が皇を贊せむ。
 性璧忍衰俗神其思降祥。性璧衰俗に忍ばば、神其れ降祥を思はむや。

【字解】【一】望嶽 南嶽を望むなり。南嶽とは衡山なり。湖南衡州府衡山縣西三十里にあり。衡山は「山海經」には之を均嶽山といふ。徐靈期が南嶽記にいふ、南嶽は周回八百里、四崖(峯の名)を首となし、岳巒(山の名)を足となす、と。【二】南嶽 上にみゆ、五嶽の中の南の嶽。【三】配朱鳥 「漢書」天文志に、南宮は朱鳥權衡とみゆ、朱鳥は南方の星宿なり。【四】秩禮 秩は等なり、位の順序をいふ、山川を祀るにその山川によりて尊卑の資格の差あり。五嶽の牲禮は三公に準ず。【五】百王 古代の多くの王。【六】嶽巒 「文選」の江淹が詩の注には嶽嶽の嶽とす、にはかなるさま。楊注に神異恍惚の意とす。【七】領地靈 地上の靈物を支配す。嶽巒、嶽のしやくとした嶽。【八】牛炎方 牛とは牛ばを占むるをいふ、炎方は南方の地域をいふ。【九】祀典 祭祀の典禮。【一〇】在感非馨香 感に在りて馨香に在るに非ざるをいふ、「左傳」に、黍稷非馨、明德惟馨、とみゆ。神を祭るにおそなへものきびあはより祭る者の明德が香しとの意なり。【一一】巡狩 尚書「舜典」に、五月、南巡狩至南岳、の文あり、巡狩は封内を巡視すること、舜は時期を定めて五嶽を順にめぐりあるきたりといふなり。勿論古代の南岳は雲山にして鳳陽府に在る山なること前にかつて述べ置きたり。【一二】有虞 舜の氏なり。【一三】洎 及ぶ。【一四】歷世綱 人事の果にせばめられる。【一五】湯日 旱天の日輪。

【一七】清光 蓋し日光の水上に浮べるものをさす。【一八】祝融 五嶽尊 衡山に七十二峰あり、そのうち芙蓉・紫蓋・石廩・天柱・祝融の五峰最も高しといふ。【一九】次 順序だつないふ。【二〇】紫蓋獨不朝 仇注に「樹蓋録」を引きていふ、岳の諸峰皆祝融に朝す、獨り紫蓋の一端は勢轉じて東に去る、と。【二一】爭長 他よりまさらんことを争ふ。【二二】嶽 山のけはしき嶽。【二三】魏夫人 仙女なり。南嶽魏夫人傳に云ふ、夫人、名は華存、字は賢安、晉の司徒魏舒が女にして、南陽の劉文に適き、二子を生む。夫人幼にして道を好み、眞を味ひ玄に耽り、常に胡麻散・茯苓丸を服す、忽ち太極諸真人、授くるに仙經三十三卷を以てす、又黃庭内景經を授け晝夜存念せしむ、遂に冥心齋靜、眞靈累りに感ずることを得て、凡そ世に在ること八十三年、晉の成帝の咸和九年を以て劍に託して形を化して去る。北して上清宮玉闕の下に詣る、諸眞君、夫人に玉札金文の位を授けて紫虛元君となし、上眞司命南嶽夫人を領せしめ秩を仙公に比す、と。【二四】夾 魏夫人をはさむなり。【二五】奉迨 人事にひつづらるるなり。【二六】限脩途 長途をやければならぬといふこととに制限せらる。【二七】杖崇岡 たかき岡に杖づく。嶽廟に參拜するをいふ。【二八】歸來 南嶽のかへりみちをいふ。【二九】觀 賞ふなり。此の語は次句にまでかかる。【三〇】命駕 のりものを命する、こゝへたづねること。【三一】沐浴 身と髪とをあらひきよめる。【三二】休玉堂 廟のうつくしき堂に休息する。【三三】三嘆問府主 以下は現在の事。府主とは蓋し衡州の刺史をさす。衡州刺史は韋之晉なるべきか。【三四】曷以 曷は何なり、祀神の禮につきていふなり。【三五】贊我皇 我が天子の事をたすけなす。【三六】性璧忍衰俗 性璧はいけにへ、たま、神にささぐるものなり。忍衰俗とは民俗衰敝せりとして忍びて性璧を鄭重にそなへざるをいふ。【三七】思降祥 思は豈思、の意、反語、降祥はめでたきことをなくだすなり。

【題義】南嶽衡山を望みしことをよんだ詩。大曆四年春晚、潭州より衡州にゆきしときの作。
 【詩意】南嶽は天文では朱鳥の星宿に配せらるる山で、その祭の禮の等級づけられたことは多くの古代の王から以來のことである。この嶽は恍惚として地上の諸靈物をひきゐ、その雲氣瀕洞たる姿はほとんど南方地域の半ばをも占めてゐる。國家がこの嶽に對して祀禮を用ふるのは、祭者の徳の如何に

在るのであつて、お供へする黍稷の馨香の有無に在るのではない。昔舜帝はこの嶽に巡狩されたといふが、その以後はなんとさびしいことだらう、今や帝舜有虞氏の様な君はなくなつてしまつた。自分ば世間の塵事の網にせばめられてから、旅にでかけて瀟湘の川をこえた。すると早天の太陽は絶壁の上から出る。じぶんは日光の清く水面にうかべる傍に舟をただよはす。みると祝融等の五峰は尊さうにみえて、それぞれの峰がたかくひくく次第に列をなしてゐる。そのうち紫蓋峰だけはひとり祝融峰には朝せずして、他と雄長を争うてけはしく立つてにらみあうてゐる。つつしんでうけたまはると魏夫人といふこの嶽の女仙を多くの仙人たちが夾んで虚空にかけり、時としては五峰の氣が風に吹きちらされて霜を飛ばす様につめたいといふことである。自分は人事にひかれてこれからまだ長道中をせねばならぬといふ制限をうけてゐるので、嶽のたかい岡に杖ついて御廟に參詣する暇がない。しかし歸り途にはどうかこちらへ駕を命じて齋戒沐浴して御廟の玉堂に休息したいとねがうてゐる。じぶんは三たび嘆じてこの地方の長官たる人におたづねする、あなたは何を以て我が君の政治をおたすけしようとなさるか、いま民俗が衰敝のありさまにあるからとて神にささげる牲だの璧だのをひかへめにする様なことを忍んではなりませぬぞ、それを忍ぶ様なことであるならば、嶽神もどうしてこの地方に瑞祥を天から降したまふことをお思ひになりませうぞ、決してお思ひになりませぬ。」

嶽麓山・道林二寺行 嶽麓山・道林の二寺の行

玉泉之南麓山殊 玉泉の南麓山殊なり、
 道林林壑爭盤紆 道林も林壑争ひて盤紆す。
 寺門高開洞庭野 寺門高く開く洞庭の野、
 殿脚插入赤沙湖 殿脚挿み入る赤沙湖。
 五月寒風冷佛骨 五月寒風佛骨冷かなり、
 六時天樂朝香爐 六時天樂香爐に朝す。
 地靈步步雪山草 地靈にして步步雪山の草あり、
 僧寶人人滄海珠 僧寶にして人人滄海の珠なり。
 塼劫宮牆壯麗敵 塼劫宮牆壯麗敵す、
 香廚松道清涼俱 香廚松道清涼俱にす。
 蓮花池交響共命鳥 蓮花池交響共命の鳥、
 金勝雙迴三足鳥 金勝雙迴す三足の鳥。」

嶽麓山道林二寺行

七〇三

【字解】(一) 嶽麓山 長沙府善化縣四十里にあり。山上に嶽麓寺あり。(二) 道林 寺の名、嶽麓の下にあり、善化縣をさること八里。(三) 玉泉 寺の名、隋高祖に開皇十二年十二月、智顛禪師荆州に至り玉泉寺を創立す、と。(四) 麓山 麓山は嶽麓山をいふ、殊とは寺境特別にまされるをいふ。(五) 盤紆 紆、わだかまり、うれる。(六) 赤沙湖 岳州府華容縣南にあり、また之を赤亭湖ともいふ。(七) 五月 五月に於てはといふなり。(八) 冷佛骨 佛骨は寺の藏する所なるべし。(九) 六時 一夜夜を各六時とす。(一〇) 天樂 天上の音樂。(一一) 朝香爐 朝は来朝、向つて来ること、香爐のところへ来るをいふ。

方丈涉海費時節

方丈海を渉る時節を費す、

玄圃尋河知有無

玄圃河を尋ぬ知らず有無。

暮年且喜經行近

暮年且つ喜ぶ經行近きを、

春日兼蒙暄暖扶

春日兼ねて蒙る暄暖の扶くるを。

飄然斑白身奚適

飄然斑白身奚くに適く、

傍此煙霞茅可誅

此の煙霞に傍ひて茅誅す可し。

桃源人家易制度

桃源の人家制度に易し、

橘洲田土仍膏腴

橘洲の田土仍は膏腴。

潭府邑中甚淳古

潭府邑中甚だ淳古、

太守庭內不喧呼

太守庭內喧呼せず。」

昔遭衰世皆晦迹

昔衰世に遭へば皆迹を晦ます、

今幸樂國養微軀

今幸に樂國に微軀を養ふ。

依止老宿亦未晚

老宿に依止するも亦た未だ晚からず、

【二】 雪山草 雪山は印度の北境の山。この山に香草ありて大力の牛之を食す、其の牛の糞は糞細にして餅糧に和合すべしと初能經にみゆ。

【三】 僧寶 起信論にいふ、一眞如は是れ覺性、佛寶と名づく、二眞如は執持の義あり、法寶と名づく、三眞如は和合の義あり、僧寶と名づく、と。

【四】 前海珠 珠は眞珠。【五】 塔殿 塔殿なり、已にみゆ。【六】 宮殿 寺の宮殿のかき。【七】 香廚 香飯をたくくりや。【八】 松道 松の生じたるみち。【九】 清涼 清涼すすしき。【一〇】 共命鳥 寶藏經にいふ、雪山に鳥あり、名づけて共命となす、一身二頭、頭各異に、同じく共に命を報す、共命といふ、と。異心同體にて共に鳴く鳥なり。

共命は又共名に作る。阿彌陀經にいふ、極樂淨土に七寶池あり、池中の蓮花は大き車輪の如し、又伽陵頻伽名鳥あり、晝夜六時出でて衆音を和すと。【二】 金勝 黄金を飾つたかんばん。【三】 雙蓮 ならびかけめぐる。傍は左右にあるなるべし。【四】 三足鳥 三本足のからす、淮南子に、日中陵鳥ありとあり、注に陵鳥は三足鳥なりとみゆ。【五】 方丈 海上仙山の名、已にみゆ。【六】 玄圃 崑崙山の懸圃、已にみゆ。崑崙は河水の出づる所なり。【七】 尋河 張衡が黄河の源

富貴功名焉足圖

富貴功名焉んぞ圖るに足らむ。

久爲謝客尋幽憤

久しく謝客を爲ねて幽を尋ぬるに憤る、

細學何周顒免興孤

細かに何周顒を學びて興の孤なる

一重一掩吾肺腑

一重一掩吾が肺腑、

山鳥山花共吾友于

山鳥山花共「吾が」友于。

宋公放逐曾題壁

宋公放逐曾て壁に題す、

【原注】宋之問

物色分留待老夫

物色分留せられて老夫を待つ。」

なたづれし事、已にみゆ。【二】 知有無 不知其有之乎、無之乎の意。【三】 經行近 寺を近く經しこと。【四】 斑白 こましほあたま。【五】 奚適 何くにゆく。【六】 傍 そばにつく。【七】 煙霞 煙霞のある地。【八】 茅可誅 かやをきりて屋根をふく、宅を掃へるをいふ。【九】 桃源人家 仙境の家。【一〇】 易制度 しくみたやすし。【一一】 橘洲 前の「灑郭十五列官」詩にみゆ。【一二】 膏腴 あぶらあり、腴は魚の腹のあぶら、地味のよきをいふ。【一三】 潭府 潭州のやくしよ。【一四】 邑中 縣内。【一五】 淳古 まじりけなく古めかし。【一六】 太守 潭州の長官。【一七】 不喧呼 訴訟事などなく静なり。【一八】 幽邃 賢人あとをくらまして隱遁す。【一九】 樂國 安樂な土地。【二〇】 依止 依りてとどまる。【二一】 老宿 老僧をいふ。【二二】 謝客 宋の謝靈運が、と。靈運幼にして錢塘の杜明師に養はる、故に客兒といふ、あづけ兒にされしなり。【二三】 尋幽憤 幽邃なる山水をたづぬるになれたり。【二四】 何順 周順に作るべしといへり。南史にいふ、順、字は彦倫、晉辭辯麗、佛理に長ず、清貧寡欲、終日長蔬、妻子ありと雖も

獨り山會に處る、と。【五〇】 免興孤 即ち次の二句のためなり。【五一】 一重一掩 山形の圓疊なるをいふ、一たびはかきなり、一たびはおほふ。【五二】 肺腑 「漢書」劉向傳にみゆ。顔師古の注に、肺腑は相附着す、猶ほ心腎といふが如しといへり。【五三】 友于 兄弟をいふ、「尚書」に、友于兄弟」とあり、友于の二字を切りとりて兄弟の義とす。【五四】 宋公 原注にいふごとく宋之問をさす。之問は睿宗の立つや詔により欽州に流さる、欽州は嶺南（廣東）に屬するゆゑ、之問は道に長沙を經て詩を嶽麓寺に題せしなり。宋注には之問集の「高山引」を引きて杜詩と似よりたる字句あるゆゑ、放逐題壁の詩なるべしといへり。【五五】 物色分留 あたりの景色が一部分分留せられず後人に分ちとどめられてある。【五六】 特老夫 老夫は自己をいふ、特とは題詠を持つをいふ。持字の主語は物色。或はもし「物色を分留して老夫を待つ」と訓すれば分留・特の主語は並に宋公となる。

【題義】 嶽麓山の山寺と、道林寺との二つの寺のうた。大曆四年春、初めて潭州に到りし當時の作。

【詩意】 荆州玉泉寺の南に於ては嶽麓山寺は特別にすぐれた寺である。その下にある道林寺も林や壑が争うて盤紆してをる。寺門は高くて下に洞庭の原野が開かれ、寺殿の脚は赤沙湖までさしこんである。五月の暑さにも寒風が佛骨を冷かに吹き、二六時中、天上の音楽が香爐のくゆる所に來朝してく。地は靈であつて一歩ごとに雪山にある様な香草が生えてをり、僧は三寶の一であつてどの一人も滄海から拾うた眞珠の様である。塔級も宮牆もその壯麗なることは相匹敵し、香廚も松の道も俱に清涼である。蓮の池には共命鳥がこもごも響き、金勝の左右には三足の鳥が雙びかける。方丈といふ仙山は海を涉つてゆかねばならぬので時間を費すし、懸圃の方へ河水の源を尋ねたなどいふ話は有つたことか無かつたことか知れぬ。それよりも自分は晩年にかやうな寺へ近くとほりかかり、そのう

へ春の日にあうて暄暖のおかげで老衰を扶けてもらつた。このごましほあたまの自分の身は飄然としてどこへゆくつもりか、ここならばかやうな煙霞の場所にそうて茅屋を構へることが出来る。桃源の様な仙境の人家は仕組みもたやすい、また近地の橘洲の田地はよく肥えたところであり、潭州の地方は人情 淳古で州の太守の庭内に訴訟沙汰などやかましいことはない。昔は世の衰へたときにであつた人人は皆跡をくらまして隱遁した、今は幸にかやうな安樂國でつまらぬからだを養ふことができる。高德の老僧にたより止まることも晚くはない、富貴だの功名などは圓るだけのねうちのものではない。じぶんは久しく謝靈運をまねて幽邃な山水を尋ねるに慣れてゐるが、これからはくはしく周顧をまなんで寺住まひでもしよう、しかし願とはちがつて興がさびしい様なことはない。（なせとならば）山峰の一重一掩してゐるのは親しきこと吾が肺腑の如く、山の鳥、山の花も吾が兄弟の如きものであるのである。まへかた宋公（之問）は廣東へ放逐されたまうたときかかつてこの寺の壁に詩を題せられた、それ以來此の寺境の物色は一部そのままのこされてこのおやちがくるのを待つてゐたのである。】

奉送韋中丞之晉赴湖南 韋中丞之晉が湖南に赴くを送り奉る

龍渥徵黃漸 權宜借寇頻 龍渥く徵黃漸なり、權宜借寇頻なり。

奉送韋中丞之晉赴湖南

湖南安背水。峽内憶行春。
 王室仍多故。蒼生倚大臣。
 還將徐孺榻。處處待高人。

【字解】(一) 韋中丞之督赴湖南。黃鶴注に曰く、大曆四年二月、湖南都團練觀察使・衡州刺史韋之晉を以て潭州刺史と爲す、是に因つて湖南軍を潭州に徙す、と。仇氏之を引きて本篇は作者衡州にありて韋に寄送せしものとせり。浦氏之を取して曰く、仇氏は作者衡州にありて韋の潭州にゆくを送るとせず、兩人兩地、同じく湖南に在るに、題してぼんやりと赴湖南と云ふを得ず。この篇は韋が蜀より衡州に赴くを送れるものにて其の事は大曆四年以前に在り。作者も亦た峽内にありし時の作なるべし。此の如くみて詩意始め明かなり、と。浦氏の説理あり、之に従ふ。(二) 寵。天子の恩寵厚し。(三) 微黃漸。漸く黄を微さんとす。黄は漢の黃霸、潁川太守より徵されて京兆尹とせらる。(四) 權宜。一時の便宜。(五) 借寇。後漢の寇恂、潁川太守となり盜を平らぐ、汝南に徙さるるや潁川の民復た寇恂を借ること一年ならんと請ひたり。(六) 安背水。或は曰く、背水は其地の地形をいふと。或は曰く、韋が韓信背水の陣をしきし如く兵法に通するをいふ、と。暫く後説に依る。(七) 峽内。三峽の内、韋の督て治めし蜀地をいふ。(八) 行春。刺史が春にあたりて管内を巡行すること。(九) 多故。事故多し。(一〇) 徐孺榻。陳蕃が別に一榻を懸けて徐孺子を敬禮せし事、已にみゆ。(一一) 高人。高尚なる人物、徐孺子の如きもの。

【題義】 御史中丞韋之晉が湖南(衡州ならん)に赴くのを送つた詩。作時は詳かならず、作者猶ほ峽内にありしときの作ならん。

【詩意】 君は天子の恩寵が厚いからやがては黃霸の様に中央へ召されるであらうが、いまは便宜のため地方からしきりに寇恂を借してくれといはれる様なことになつてゐる。君は湖南に赴いたならば湖南は君の背水の陣法のために安泰になるであらう、それとともに君の舊任地の峽内では君がかつて在任中春にあつて管内を巡行したことをおもうてをる。今は王室には事故多く、人民は君の様な大臣にたよらなければならぬ。君は任地へゆかれたならば君もまた陳蕃の様に徐孺子を敬禮する榻を設けて到る處で高尚な人物を優待せられることを希望する。

湘江宴饒斐二端公赴道州

白日照舟師。朱旗散廣川。
 羣公餞南伯。肅肅秩初筵。
 鄙人奉末眷。佩服自早年。
 義均骨肉地。懷抱罄所宣。
 盛名富事業。無取媿高賢。
 不以喪亂嬰。保愛金石堅。
 計拙百寮下。氣蘇君子前。

湘江宴饒斐二端公赴道州

會合苦不久。哀樂本相纏。

會合久しからざるを苦しむ、哀樂本相纏ふ。

交遊颯向盡。宿昔浩茫然。

交遊颯として盡くるに向んとす、宿昔浩として茫然たり。

促觴激百慮。掩抑淚潺湲。

促觴百慮激す、掩抑淚潺湲たり。

熱雲初集黑。集噍黑。缺月未生天。

熱雲初集黑〔噍黑に集まる〕、缺月未だ天に生せず。

白團爲我破。華燭蟠長煙。

白團我が爲に破らる、華燭長煙蟠る。

鵝鴨催明星。解袂從此旋。

鵝鴨明星を催す、解袂此より旋らむ。

上請滅兵甲。下請安井田。

上は請ふ兵甲を滅せよ、下は請ふ井田を安んせよ。

永念病渴老。附書遠山顛。

永く念へ病渴の老、書を附せよ遠山の顛。

【字解】

【一】湘江宴 湘江のほとりにての宴、潭州にての宴ならん。【二】裴二端公 裴二は裴虬なり、河東の裴虬、字は深源、大曆四年、著作郎・兼侍御史・道州刺史となる。蓋し大曆二年十二月に道州刺史崔漢といふもの卒せしによりて虬之に代りしなり。【通典】に唐の侍御史は職して臺論となす、他人は之を稱して端公といふ、と。又舒元興が御史記に中丞を端長となす、とみゆ。之によればただの侍御史を端公、中丞を端長と敬稱するなり。【三】道州 湖南永州府に屬す、已にみゆ。【四】舟師 水軍。【五】南伯 伯は州の長をいふ、道州は南方の地なるにより南伯といふ。【六】肅肅 しづか。【七】秩初建 秩は秩序、初建は酒席の初。【八】鄙人 自己をいふ。【九】末眷 愛顧を蒙るもの末に居る、謙辭なり。【一〇】佩服 裴の德に服するをいふ。【一一】義均 義は交義をいふ。【一二】骨肉 兄弟をいふ。【一三】懷抱 胸中の感。【一四】懇所宜 すつかりのべる。【一五】盛名 裴の名聲盛なること。【一六】無取 自己の取る所なきをいふ、謙辭。【一七】高賢 裴をさす。【一八】喪亂 裴が喪亂の運命にてあつてゐること。【一九】保愛 金石堅は二人交情の堅きをいふ。仇注には保愛は作者が保愛することとみたり。浦注は金石堅を交情の堅きこととし、保愛は裴が保愛することとみたり。(浦注云、不_レ以_レ我_レ嬰_レ亂落_レ、而移_レ其宿愛、と。浦氏によれば「喪亂に嬰るを以てせずして、金石の堅きを保愛す」と訓む。)王洙注には名節の堅きこと金石の如くなれと勸むるなりといへり。以上諸説「金石堅」と保愛の主語とにつきての差はあるも、不字を前句のみにかけて見るは同じ。二句富事業の句を承け、且つ道州に赴くの意氣をいへり。【二〇】計拙 二句此の二句は純高賢の句を承け、自己をいふ。【二一】百寮 前の羣公に同じ、送者をさす。【二二】氣衰 老衰の氣よみがへりて生氣あり。【二三】君子 裴をさす。【二四】風向盡 風は風の吹くさま、向盡は盡きかかると。【二五】宿昔 むかしの事。【二六】促觴 せつせと酒杯をさす。【二七】掩抑 涙をおさへる。【二八】集噍 喙ふぐれにあつまる。【二九】白團爲我破 蔡注にいふ、白團は扇をいふ、夜熱するによりて扇爲めに搖がされて破るるなりと。浦注にいふ、即ち缺月を指す、と。前説に依る。【三〇】鵝鴨、あなさぎの類。【三一】鵝鴨、且を求むる鳥なりと。【三二】催明星 夜明けの明星、を消えさせんとするがす。【三三】解袂 たもとを分つをいふ。【三四】從此旋 旋は自宅へむけたちかへるをいふ。【三五】滅兵甲 兵数を減する。【三六】安井田 井田は浦注にいふ、井田里と。案するに井田は九百畝井字形に區劃したる田をいふ、こゝは單に農民をいふのみ。【三七】病渴老 消渴のやまひにかかれる老人、自己をさす。【三八】附書 手紙を與へる。【三九】遠山顛 顛は端。

【題義】 湘江のほとりの別宴で侍御史裴君(虬)が刺史となつて道州へ赴任するのにはなむけした詩。大曆四年夏、潭州(長沙)にての作なるべし。

【詩意】 太陽の光が水軍を照らし、朱い旗が廣い川に散らばる。多くの役人諸公が南方の州長(裴)に餞するために、靜肅に宴席が順序だてられて初められる。じぶんも裴君の愛顧の末席にをるものでわかいころから君の徳には敬服してゐるのである。自分等の交義は骨肉のあひだがらにも均しいの

で、おもうてゐることはつつまずのべつくしてゐるのである。君は盛名を負うて事業に富んだ人である。之に對して自分の様な取りえのないものは高賢に對してははづかしくてしかたがない。君はわたくしが喪亂にかかつておちぶれてゐるといふことをなんともおもはず、これまでの金石の如く堅き交際をそのままをしみ保ちくたされた。自分は羣寮の下に於て其の爲す所は拙であるが、君子の前に於ては老衰の氣が生氣を吹きかへす様なこころがする。」遺憾なことは哀しみと樂しみとはもともつれあふもので、せつかくの會合も久しくすることのできぬことはこまつたことである。交はつたもたち等も今ではにはかになくなりかけてゐる、昔のことをおもふと遠くしてただぼんやりとしてしまふ。さかづきをせつせとさされるときまざまのしんばい激してくる、抑へようとしても涙が潺湲とあふれながれる。ゆふがたのうすくらがりに炎熱の雲が集つてきた、缺けた月はまだでてこぬ。あまりあふいだため白い團扇はこはれてしまひ、華やかな燭が長い煙をわだかまらせてゐる。そのうちに鶴鶴鶉鳴などがなきたてて明星を消えさせようとしてゐる、じぶんはあなたと袂を解いてこれからかへらうとおもふ。」あなたは任地へいつたならば、どうぞ上は兵甲の數を減せられよ、つぎには農民が安泰になる様にさせられよ。そのつぎにはいつまでもこの消渴をわづらうてゐるおやちを念うてくだされ、遠山のいただきまであなたの手紙をよこしてくださる様におねがひします。」

哭韋大夫之晉

韋大夫之晉を哭す

悽愴郇瑕邑、差池弱冠年。
 悽愴なり郇瑕の邑、差池す弱冠の年。
 丈人叨禮數、文律早周旋。
 丈人禮數を叨りにす、文律早く周旋す。
 臺閣黃圖裏、簪裾紫蓋邊。
 臺閣黃圖の裏、簪裾紫蓋の邊。
 尊榮眞不忝、端雅獨翛然。
 尊榮眞に忝めず、端雅獨り翛然たり。
 貢喜音容間、馮招疾病纏。
 貢喜音容間、馮招疾病纏ふ。
 南過駭倉卒、北思悄聯綿。
 南過倉卒たるに駭く、北思悄として聯綿たり。
 鵬鳥長沙諱、犀牛蜀郡憐。
 鵬鳥長沙諱む、犀牛蜀郡憐む。
 素車猶慟哭、寶劍欲高懸。
 素車猶は慟哭す、寶劍高く懸けむと欲す。
 漢道中興盛、韋經亞相傳。
 漢道中興盛なり、韋經亞相傳ふ。
 沖融標世業、磊落映時賢。
 沖融世業を標す、磊落時賢に映す。
 城府深朱夏、江湖渺霽天。
 城府朱夏深し、江湖霽天に渺たり。
 綺樓關樹頂、飛旄泛堂前。
 綺樓樹頂に關さず、飛旄堂前に泛ぶ。

帟幕旋風燕。笳簫咽暮蟬。
 帟幕に風燕旋る、笳簫に暮蟬咽ぶ。
 興殘虛白室。跡斷孝廉船。
 興は残る虚白の室、跡は断ゆ孝廉の船。
 童孺交遊盡。喧卑俗事牽。
 童孺交遊盡く、喧卑俗事牽く。
 老來多涕淚。情在強詩篇。
 老來涕淚多し、情在り詩篇を強ふ。
 誰繼方隅理。朝難將帥權。
 誰か繼がむ方隅の理、朝は難んず將帥の權。
 春秋褒貶例。名器重雙全。
 春秋褒貶の例、名器雙全を重んず。

【字解】 〔一〕 章大夫之晉。御史大夫章之晉なり。章之晉が事は前の「奉送章中丞之晉赴湖南」詩にみえたり。すなはち章は某年に蜀より湖南の衡州に赴任し、大曆四年二月に衡州より潭州に轉任し、潭州に於て卒したりとみゆるなり。朱注にいふ、之晉は湖南にありて御史大夫を加へらる、常袞、制詞を撰す、「文苑英華」にみゆ、と。〔二〕 懷憤。ものがなしくいたまし。〔三〕 鄭瑕邑。鄭瑕氏の地は「左傳」に見ゆ、濟一統志によれば其の地は今の山西平陽府岳陽縣にあり。是れ杜昔章と周旋の地を敘す。鄭氏の説にては鄭瑕は章の根のかへらんとする地なりといへるも、據る所を知らず。〔四〕 差池。鳥が羽をたがひちがひにする貌、章と交はりしさまをいふ。楊注にいふ、肩相阻ふ貌なりと。〔五〕 弱冠年。二十を弱と曰ふ、冠すと「禮記」曲禮にみゆ。開元十九年に作者二十歳なり。〔六〕 丈人叨禮數。丈人は尊者の稱、章をさす。章は蓋し作者よりよほどの年長者なりならん、以て忘年の交たりしを知る。叨とは謙辭、禮數は種種の禮數を致せしをいふ。〔七〕 文律。詩文の法則、語は文賦にみゆ。〔八〕 周旋。たちまはる、つきあふ、と。〔九〕 臺閣。臺閣といふの類、政府の要地をいふ。〔一〇〕 黃圖。書に「三輔黃圖」あり、帝都の近地黃を以て畫く、これ蓋し帝都をさす。〔一一〕 紫蓋。衣冠をいふ、章の着くる禮服。〔一二〕 紫蓋。蓋し天子乘せらるる紫色の車蓋をいふ、紫蓋といふ類なるべし。仇注に衡山の紫蓋

峰をさすとせるは當らず。これ杜事を敘せるものにして遂に湖南の事を夾むべきに非ず。〔一三〕 編。章の人品ただしくみやびやか。〔一四〕 愴然。さりとせたる貌。〔一五〕 賈。章の要位にあるをさきて自ら喜ぶをいふ。作者がつて曠放賈公喜の句あり。漢の王陽賈高親しくして王陽在位、賈公彈冠の語あり。〔一六〕 晉容間。章の晉聲容貌と隔たる、章はみや、に在ればなり。〔一七〕 馮。唐白首にして郎官に招かれし故事、自己晩年工部員外郎となりしをいふ。仇注に「馮韶とは章方に招用せらるるなり」といへるは誤なり。〔一八〕 疾病纏。自己の病にとりつかれてゐること。〔一九〕 南。章が湖南に任官し來りしをいふ。〔二〇〕 會卒。にはが、あわただしきさま。〔二一〕 北思。北方を思ふ、章の居る方をおもふ。〔二二〕 情。情はしをれたるさま、聯綿はつづくさま。南。北思の二句は倒挿なり。〔二三〕 鷓鴣長沙諺。賈誼長沙にながされ、鷓鴣會に來るをみ、賦を作りやがて死す、章の死をいふ。〔二四〕 犀牛蜀郡。章の舊任地蜀の人民、章を憐むをいふ。秦の李冰、蜀郡太守となり、五の犀牛を作りて水の精を壓す、蜀の人之を慕ひ其の里を名づけて犀牛里となす。〔二五〕 素車。後漢の范滂が故事、式、字は互勸、友人張劭が葬日に素車白馬にて號哭して往きて之を弔す。自己を式を以てたとふ。〔二六〕 賈。吳の手札、徐君の墓に劍を掛けし故事。已にみゆ。季札を以て自己に比す。〔二七〕 漢道。唐の治世の道をいふ。〔二八〕 中興盛。代宗の朝をいふ。〔二九〕 章。章は漢の章賢、經は經學、亞相は賢が子玄成をさす、其の父の如く明經を以て相となる、故に亞相（つぎたる相）といふ。〔三〇〕 神融。和氣のたたふるさま。〔三一〕 標。標世業。代代の業をたかくかかげる。〔三二〕 磊落。不羣のさま。〔三三〕 映時賢。當時の賢人のあひだに光をうつるはせてゐる。漢道以下の四句、朱注には章之晉によき子あるをいふといへり。愚は之晉がその父業をつぎたるをいひしものならんと思ふ。〔三四〕 城府。潭州の城府。〔三五〕 深朱夏。深は夏のさかりなるをいふ、朱は夏の色。〔三六〕 江湖。ひろく南地をいふ。〔三七〕 綺樓。うつくしき樓、章の生前居りし所。〔三八〕 關。とざす。〔三九〕 旆。旆は路旌、生前の名をかきしはた。〔四〇〕 泛。浮動のさま、風にひるがへるをいふか。〔四一〕 帟幕。帟は小幕、上方に張るもの。〔四二〕 旋風燕。風をうけた燕がめぐる。〔四三〕 虛白室。章のしづかな室、「莊子」に、虛室生白、吉祥止止、とあり。已にみゆ。〔四四〕 孝廉船。劉棻が張憑の船を求めし故事、已にみゆ。章必ず生前作者を舟中に訪ひしことありしならん。劉を章に、張を自己に比す。〔四五〕 童孺。こども、二十歳のころ以前にわたりていふ。〔四六〕 強詩篇。むりにこの詩をつくる。〔四七〕 方隅理（治）。地方の治安。〔四八〕 朝難。朝廷が選任をかたしとする、章につぐ人物なきなり。〔四九〕 將帥權。章は湖南都團練・守捉觀察處置等使た

り、故に將帥の權といふ。【三〇】春秋 孔子の「春秋」。【三一】褒貶例 書法を以て一字のつかひかたにより史上の人物をほめたりおとしたりする例。【三二】名器重雙全 「左傳」成公二年に、惟名與器、不可兼也、とあり、これは名器二字の用典たるのみ、ここにては名は物の名、器はその實をいふ、たとへば觀察使・潭州刺史といふはその官職の名なり、その名ありて之にそふだけの人物たる實ある、これ器なり。雙全は名と器と二つながら完全なること。

【題義】 御史大夫・湖南觀察使・潭州刺史韋之晉の死を哭した詩。大曆四年夏、潭州(長沙)にての作。

【詩意】 郁瑕の邑のことをおもふとじつにものがなしくなる。むかし二十歳ばかりのころ、あそこで君とまじはつたことがある。あのころ丈人はじぶんにみだりに禮數を加へられた、さうして詩文の規則の世界に早くもたちまはりをした。それからあなたは帝都に於て臺閣に居られ、紫蓋のほとりに簪裾のすがたをしてをられた。さやうに尊榮の地位に居られても似つかはしくすこしもその地位をはずかしめず、さらりとして獨り端雅なる品位をたもつてをられた。じぶんはあなたが要位に居らると貢禹の様に喜んだが、あなたの音容とはへだたつてをり、馮唐の様に晩年に官途に招かれたものの病氣につきまとはれた。いつもしよんぼりとあなたの居らるる北の方を思ひつづけてゐたところ、あなたは急にこの湖南の南方へおいでになつたときはいかにそのにはかなのに駭いたであらう。ところでこの南地であなたはおなくなりになつた。長沙では鵬鳥は諱み物である。あなたの没後蜀郡ではなほ犀牛をみてはそれをあはれみしたうてをる。じぶんは素車を以て范式の如くなほ慟哭をなし、季札の様にあなたのお墓に劍を高く懸けたいとかがへてゐる。漢道が中興して盛であつた様に今の

御代は盛であるが、このとき丞相韋賢の經學はつぎの丞相たりし子の玄成が傳へた。さうして和氣沖融として代代の業を高くかけ、その磊落不羣のさまはいまも世の賢人のあひだにかがやいてゐる。あなたは玄成の如きものであつた。(朱注によれば「あなたは亡くなられてもお子がりつばになつてゐる。」)いま城府には夏がふかくなつた、江湖には霽れた天がはるかにつづいてゐる。このときあなたのすみなれた綺樓は樹木の頂にとざされ、飛びゆく銘旌は堂前の舟の中に浮動してゐる。樓の赤幕の懸つてゐるあたりには風を受けた燕がとびめぐり、箏簫の音につれ日暮の蟬までが咽ぶ様になつてゐる。盧白の室にはありし世の興が盡きずに残り、孝廉の船にはあなたの足あととはたえてしまつた。じぶんはこどものをりからの交遊はなくなつた。俗事にひかれて喧卑なことの多い。年老いてからは涙もろく、あなたに對する情はやむにやまれぬからかやうに無理にも詩篇をつづつた。あなたが亡くなられたならばだれがこの地方の治安を繼いでするか、朝廷でも將帥の權をだれに授くべきかについてなやんでをられる。「春秋」の褒貶の例を以てすればどうしても名と器とをふたつかねそなへた人を貴ぶのである、さういふ人物を任命しなければならぬ。」

江閣臥病、走筆寄呈崔盧兩侍御

江閣病に臥し、筆を走らせて崔盧の兩侍御に寄呈す

江閣臥病走筆寄呈崔盧兩侍御

客子庖廚薄。江樓枕席清。

客子庖廚薄し、江樓枕席清し。

衰年病祗瘦。長夏想爲情。

衰年病みて祗だ瘦す、長夏情を爲さむことを想ふ。

滑憶雕胡飯。香聞錦帶羹。

滑は憶ふ雕胡の飯、香は聞く錦帶の羹。

溜匙兼煖腹。誰欲致盃羹。

溜匙と煖腹と、誰か盃羹を致さむと欲する。

【字解】(一) 江開。湘江のほとりの開、潭州にての寓居とみゆ。(二) 崔廬兩侍御。崔は崔大漢、廬は廬十四弟なり。(三) 客子。自己をいふ。(四) 庖廚薄。庖廚は臺所、薄は物乏しきをいふ。(五) 江樓。即ち題の江開。(六) 枕席清。滑は滑涼、すすしきこと。(七) 想爲情。仇注にいふ、爲情とは用情と云はんがことし、と。こちらのために心をくばつてくれること。(八) 滑。飯のなめらかなこと。(九) 雕胡。まごも。【一〇】 錦帶。蓴菜のこと。(一一) 溜匙。さじにすべること、前に飯米のものをのべし時に、正想滑溜匙、とありたり。ここは飯と蓴菜と兩方をうけていへり。(一二) 煖腹。次の酒のこを先だつていへり。(一三) 致盃羹。致とはこちらへよこしてくれること、羹は「かめ」、酒をいれるなり。

【題義】江邊の閣で病に臥して、筆を走らせて崔侍御漢と廬十四侍御とへやつて、たべものと酒とをねだつた詩。大曆四年秋、潭州にての作なるべし。

【詩意】江邊の樓にねてゐると枕や席のあたりがすすしいが、旅客たるじぶんは臺所が物に乏しい。老衰の年になつて病んで瘦せるばかりだ。ひながの夏にだれかじぶんのためにこころをくばつてくれるものはゐないかなどと想像する。雕胡のご飯があつたらさぞ滑かだらう、蓴菜の羹があつたらさ

ぞ香ばしいだらうと鼻をうごめかす。匙のうへにつるりとすべるもののあるうへさらに腹のなかをあたたためるものもほしい、酒がめや盃をこちらへよこしてくれようとおもふ人はゐぬか。

【附録】

潭州留別杜員外院長

韋 迢

潭州にて杜員外院長に留別す

江畔長沙驛。相逢纜客船。

江畔長沙の驛、相逢ひて客船を纜にす。

大名詩獨歩。小郡海西偏。

大名詩獨歩、小郡海の西偏。

地濕愁飛鵬。天炎畏跼鳶。

地濕ひて飛鵬を愁ふ、天炎にして跼鳶を畏る。

去留俱失意。把臂共潸然。

去留俱に失意、臂を把りて共に潸然たり。

潭州送韋員外迢牧韶州

潭州にて韋員外迢が韶州に牧たるを送る

炎海韶州牧。風流漢署郎。

炎海韶州の牧、風流漢署の郎。

潭州留別杜員外院長 潭州送韋員外迢牧韶州

分符先令望。同舍有輝光。分符先づ令望あり、同舍も輝光有り。

白首多年疾。秋天昨夜涼。白首多年疾む、秋天昨夜涼し。

洞庭無過雁。書疏莫相忘。洞庭過雁無し、書疏相忘るること莫かれ。

【字解】 〔一〕 韋員外。員外は韋も亦た員外郎なるによりていふ。韋道は嶺南節度の行軍司馬に終るといふ、このときはなほ司馬ならず。〔二〕 牧。州。牧は牧民の官、刺史となるをいふ、韶州は廣東にあり。〔三〕 炎海。あついうみ、南海をいふ。〔四〕 韶州。牧。韋道をいふ。〔五〕 漢署郎。韋をいふ。〔六〕 分符。刺史に任ぜらるるをいふ、已にみゆ。〔七〕 令望。よき人望。〔八〕 同舍。郎官の故事、漢の直不疑のはなし、已にみゆ。これは自己をさす、作者亦た郎官なり。〔九〕 輝光。謂はゆる光榮をいふ。〔一〇〕 白首。自己をいふ。〔一一〕 昨夜涼。仇注、この句により、前夜は立秋なりしなるべしといへり、果して然るや否。〔一二〕 無過雁。衡山に回雁峰あり、雁は峰より以南にはゆかずといはる。こちらからやる手紙なきをいふ。〔一三〕 書疏。疏も亦た手紙なり、陶淵明に、與子敬等、疏あり。

【題義】 潭州で員外郎韋道が韶州の刺史となつてゆくのを送つた詩。大曆四年秋、潭州にての作。

【詩意】 君は炎海地方の韶州の牧民官で、風流な漢(唐)の役所の郎官だ。君は先づ令望があつたので符を分つて刺史に任せられた、同舍の郎たる自分もおかげで光榮を有する。じぶんは白首でながねん病んでゐるが、ゆうべから秋の天もすすしくなつた。洞庭のこちらから君の方へゆく雁は無いが、君の方からは手紙をくれてこちらを忘れぬ様にしてもらひたい。

【附録】

早發湘潭寄杜員外院長

韋 迢

早に湘潭を發し、杜員外院長に寄す

北風昨夜雨。江上早來涼。北風昨夜雨る、江上早來涼し。
楚岫千峯翠。湘潭一葉黃。楚岫千峯翠に、湘潭一葉黃なり。
故人湖外客。白首尚爲郎。故人湖外の客、白首尚ほ郎と爲る。
相憶無南雁。何時有報章。相憶ふも南雁無し、何時か報章有らむ。

酬韋韶州見寄

韋韶州が寄せらるるに酬ゆ

養拙江湖外。朝廷記憶疎。拙を養ふ江湖の外、朝廷記憶疎なり。
深慚長者轍。重得故人書。深く慚づ長者の轍、重ねて得故人の書。
白髮絲難理。新詩錦不如。白髮絲理め難し、新詩錦も如かず。
雖無南過雁。看取北來魚。南過の雁無しと雖も、看取せよ北來の魚。

【字解】(一) 章。韶州。韶州刺史章迢。【二】 見。寄。詩を寄せられた。章の詩は前篇「北風昨夜雨」これ。【三】 長者。陳平多難の故事、已にみゆ、長者は章をさす。【四】 故人。章をさす。【五】 新詩。章の詩。【六】 北來魚。湘水は北流す、故に魚に托して書かすべし。

【題義】韶州刺史章迢が詩をよこしたのに返答した詩。大曆四年秋、潭州にての作。

【詩意】自分は拙きもちまへを江湖の外で養うてをり、朝廷から記憶せられることもうとくなつてをる。そこへ長者たる君が車轍をつけてたづねてくれたのには深くはちいる、そのうへにふるなじみたる君の手紙までもらつた。自分の白髪のはみだれて理めがたい、君の新詩は錦もおよばぬほどうつくしい。「南へ過ぎる雁が無ければ返事はくれられぬ」と君はいふが、南する雁はなくとも北へ来る魚はあるだらう。その魚を氣をつけて見てそれに手紙をあづけてよこしてくれたまへ。

樓上

樓上

天地空搔首。頻抽白玉簪。天地に空しく首を搔く、頻りに抽く白玉の簪。

皇輿三極北。身事五湖南。皇輿は三極の北、身事は五湖南。

戀闕勞肝肺。掄材愧杞柁。戀闕肝肺を勞す、掄材杞柁に愧づ。

亂離難自救。終是老湘潭。亂離自ら救ひ難し、終に是れ湘潭に老いむ。

【字解】(一) 樓上。樓は「江開臥病」詩の江樓なるべし。【二】 抽簪。かんざしをぬくは首をかくだため、朝服用ふる所なきなり。

【三】 皇輿。君ののりたまふかこ、こし。浦注に云ふ、皇輿は京師を指す、と。皇輿の語楚辭にみゆ、必ずしも京師ととくに及ばず。【四】

三極。仇注にいふ、地に四極あり、皇輿は東西南の北に在り、故に三極といふ、襄辭の三極と同じからず、と。「易」の襄辭の三極は天地

人をいへり、こことは無關係なり。【五】 身事。一身謀生の事なり。【六】 五湖。史記索隱に、具區・洮湖・彭蠡・青草・洞庭を五湖となす。【七】 戀闕。長安の宮門をこふ。【八】 掄材。材木をえらぶ。【九】 杞柁。杞はかはやなぎ、柁はくすの類、蓋し二者は以て小大

の材をいふ。【一〇】 湘潭。湘江のふちをいふ。

【題義】樓上にての感をのぶ。大曆四年秋、潭州にての作ならん。

【詩意】自分は天地の間にあつて頻りに白玉の簪をぬいて首を搔く。吾が皇のおのりものは東西南三極の北にあり、吾が一身の生事は五湖南に於て謀らねばならなくなつてゐる。宮闕を戀ふために肝肺を勞してはゐるが、人材をえらぶとなると自分は杞柁の小大の材いづれにも及ばぬのではちいる。亂離にであうて自己ひとりさへ救ふことができぬのであるから、結局湘水の潭で老いてしまふのであらう。

遠遊

遠遊

江闊浮高棟。雲長出斷山。江闊くして高棟浮ぶ、雲長くして斷山出づ。

塵沙連越嶠。風雨暗荆蠻。塵沙越嶠に連る、風雨荆蠻に暗し。

雁矯銜蘆內。猿啼失木間。
雁は矯る銜蘆の内、猿は啼く失木の間。

【字解】 〔一〕 遠遊。遠くあそぶ。〔二〕 江國。江州。江ひろくして水面に高きむなぎのかけ浮ぶ。此の句によりて仇氏は本篇を潭州江開の作とせり。黃鶴は荆南の作とし、浦氏は出峽時の作ならんとせり。今仇氏に依る。〔三〕 斷山。きつたての山。〔四〕 越巂。四川寧遠府西昌縣。〔五〕 荆蠻。荆州の蠻。〔六〕 雁矯。矯はあがるなり。〔七〕 銜蘆内。淮南子に、雁從風而飛、以受氣力、銜蘆而歸、以避七機、とみゆ。危險にそなへつつ飛ぶなり。〔八〕 失木。木からはなれる、淮南子に、猿猱失木而擗、於狐狼、非其處也、とあり。〔九〕 蘇季子。蘇秦、已にみゆ。〔一〇〕 歷國。蘇秦遊説して諸國をへしこと。

【題義】 遠遊の感をのぶ。仇氏によれば大曆四年、潭州江開にての作。

【詩意】 江水がひろくて、高い棟の影が水面にういてゐる。雲が長くつらなつて、その間からきつたての山があらはれてゐる。塵沙は越巂の地方まで連り、風雨は荆蠻の方までかけて暗くなつてゐる。このとき雁は蘆をくはへながら用心してうへへあがり、猿は木からはなれながら啼いてゐる。(自分はその雁や猿の様である)。敵れた姿をきた蘇秦(ともいふべき自分)はいまだに諸國をへめぐつて故郷へかへることを知らずにゐる。

千秋節有感、二首

千秋節感有、二首

自罷千秋節。頻傷八月來。
千秋節を罷めしより、頻りに傷む八月の來るを。

先朝常宴會。壯觀已塵埃。
鳳紀編生日。龍池塹劫灰。
湘川新涕淚。秦樹遠樓臺。
寶鏡羣臣得。金吾萬國迴。
衛尊不重飲。白首獨餘哀。

先朝常に宴會あり、壯觀已に塵埃なり。
鳳紀生日を編す、龍池劫灰に塹す。
湘川涕淚新に、秦樹に樓臺遠し。
寶鏡羣臣得たり、金吾萬國に迴る。
衛尊重ねて飲まず、白首獨り哀を餘す。

【字解】 〔一〕 千秋節。皇朝の天長節なり。「舊唐書」玄宗紀にいふ、開元十七年八月癸亥、上(玄宗)降誕日を以て百僚を花萼樓下に宴す、百僚表して請ふ、毎年八月十五日を千秋節となさんと、王公以下寶鏡及び承露囊を獻す。天下諸州にはみな令して宴樂し、休暇三日ならしむ、仍つて繼ぎて令となす、と。「通鑑」にいふ、文社日に移して千秋節に就かしむ、と。〔二〕 先朝。玄宗の朝をいふ。〔三〕 壯觀。次篇に敘したる如きさかんなるもの。〔四〕 鳳紀。曆をいふ、曆は古く鳳鳥氏の紀する所といはる、已にみゆ、こは帝紀をいふ。〔五〕 編生日。帝紀のなかに天子の御誕生日をあみこむ。〔六〕 龍池。玄宗の王子たりし日の住宅の池、興慶宮の池なり、已にみゆ、この宮の勅政、花萼樓下にて宴行はる。〔七〕 湘劫灰。湘はほりなり、こは池がほりの如くにうづまりて小になりしをいふが如し、劫灰は昆明池の黒灰のこと、已にみゆ。〔八〕 湘川。湘江、作者の居る所。〔九〕 秦樹。長安の樹木。〔一〇〕 寶鏡羣臣得。往事をいふ、玄宗千秋節を以て四品以上に金鏡珠囊を賜ふ、又羣臣賦詩あり。〔一一〕 金吾萬國迴。金吾は已にみゆ、非常に備ふる警察官なり。こは玄宗が羽林軍を改編してつくりし龍武軍、即ち禁軍をさす。萬國迴とは禁軍散じて萬國に回りに去り、復た往日の如く侍衛するものなきをいふ。〔一二〕 衛尊。街路に出してある衆人接待の酒樽、淮南子に、衆人之道、其猶中衛而致樽耶、過者辭酌、多少不同、而各得其所宜、とみゆ。當時千秋節に必ず此の習俗ありしなるべし。

【題義】 千秋節の日にあひて威をのぶ。大曆四年八月、潭州にての作。

【詩意】 千秋節が罷められてから、自分は八月のくるのをしきりに傷ましくおもふ。先朝のころはいつもこのとき宴會があつたものだが、あのころの壯觀はもはや塵埃に化してしまつた。御誕生日はただ帝紀のなかに編入せられ、龍池は劫灰にうづまつてほりのごとくなつてしまつた。みやこの樓臺は樹色遠く、湘水のほとりでは涕涙新なるものがある。むかしは此の日に羣臣は寶鏡を頂戴したが、いまは禁衛の軍も散じて諸國へかへつてしまつた。あのころ飲んだ大道の接待酒は二度と飲むことがならず、白髪あたまをかかへて獨りかなしみきれぬあはれをのこしてをるのである。

【一】

【二】

御氣雲樓敞、含風綵仗高。氣に御すれば雲樓敞かなり、風を含みて綵仗高し。

仙人張内樂、王母獻宮桃。仙人内樂を張る、王母宮桃を獻す。

羅襪紅蕖艷、金羈白雪毛。羅襪紅蕖艷に、金羈白雪の毛あり。

舞階銜壽酒、走索背秋毫。舞階に壽酒を銜む、走索秋毫に背す。

聖主他年貴、邊心此日勞。聖主他年貴し、邊心此の日勞す。

桂江流向北、滿眼送波濤。桂江流れて北に向ふ、滿眼波濤を送る。

【字解】 【一】 御氣 天子高處の氣中に遊御せらるるをいふ。【二】 雲樓敞 雲樓は樓高く雲甲にあるなり、敞はひろくあきらかなるをいふ。【三】 含風 含の主語は綵仗。【四】 綵仗 いろとりどりのはたさしもの。【五】 仙人 天子をいふ。【六】 張内樂 宮廷の音樂を設け奏す。【七】 王母 西王母、作者の慣用として揚貴妃をさす。【八】 獻宮桃 西王母が侍女に命じて漢の武帝に桃を獻せしめしこと「漢武内傳」にみゆ。今借り用ふ。【九】 羅襪四句 四句つづけてみるべし、羅襪の句は走索の句へかかり、金羈の句は舞階の句へかかる。羅襪は婦人のはくうすぎのたび。【一〇】 紅蕖艷 くれなる蓮の花のごとくつややか、靴のさまをいふ、齊の東昏侯の潘妃の歩歩金蓮を生ずといふ類なり。黃金が注に、後人詠弓足者、斬獲無及、此語といへるが、當時弓足（後世の薩足、足に物をまとひて足の生長を妨ぐる習俗）ありしや明かならず。【一一】 金羈 黄金を飾りしきづな。【一二】 白雪毛 白き毛、白馬をいふ。【一三】 舞階 舞ひのきざはし、馬を舞はすこと已に、舞馬の詩にみゆ。【一四】 銜壽酒 馬が壽を獻する酒杯を口にくはへる。

【二】 走索 つなのうへを走る、つなわたりの藝をいふ、婦人が之を爲す。【三】 背秋毫 「通典」の注に、舞組（つなわたり）は、兩妓女各一、一面上より對舞し行きて舞上に於て相逢ひ、肩を比するも傾かずとみゆ。以て其の状を知るべし。仇注に、此言兩入背走索上、不、爽、秋毫也、とあり、背は背行背走なり、背をむけて兩人反對の方向にゆくをいふ、秋毫を解して「秋毫をたがはず」といふは無理なり、秋毫とは索のほそきことを形容していひしものなり。【四】 聖主 天子、玄宗。【五】 他年貴 他年は往年、貴は尊貴。【六】 邊心 邊境にたる自己の心。【七】 此日 千秋節日をさす。【八】 桂江 桂林より流れいづる江、湘水をいふ。【九】 滿眼送波濤 全眼力を以て北向する波濤を見送るをいふ。北は長安の方位なり。

【詩意】 雲樓の敞かなるところ、天子は虛氣のうちに進御あそばされた、ほとりには風を含んで綵仗が高くてつらねられる。仙人は内廷の音樂を設けられ、王母の仙女は桃をたてまつる。羅襪をつけた蓮花のごとく艶な足を以て、女人が秋毫の様にほそい繩のうへを二人で背向きになわたりする。白雪の様な毛をして黄金の羈をつけた馬が舞階にのぼつて獻壽の盃を口にくはへる。御誕生日にこん

な催しをあそばされた聖天子は往年に於てじつに尊貴なものでおはした、(それといまとはどうだ、だから)をりもをりけふのこの日にであうてはじぶんのこのおなかにある心は苦勞でならぬ。湘水をながめると北のかた長安に向うて流れてゐる、それでじぶんは至眼力をつくして江上の波濤を見送るのである。

奉贈盧五丈參謀琚

【原注】時丈人使自江陵在長沙待恩旨先支率錢米。

恭惟同自出。妙選異高標。

入幕知孫楚。披襟得鄭僑。

丈人藉才地。門閥冠雲霄。

老矣逢迎拙。相於契託饒。

賜錢傾府待。爭米駐船遙。

隣好艱難薄。心杼柚焦。

客星空伴使。寒水不成潮。

素髮乾垂領。銀章破在腰。

說詩能累夜。醉酒或連朝。

藻翰唯牽率。湖山合動搖。

時清非造次。興盡卻蕭條。

天子多恩澤。蒼生轉寂寥。

休傳鹿是馬。莫信鷓如鴉。

未解依依袂。還斟泛泛瓢。

流年疲蟋蟀。體物幸鷓鴣。

孤負滄洲願。誰云晚見招。

【字解】(一)盧五丈參謀。盧琚は姓名、五は排行、丈は丈人、參謀は行軍參謀、元帥府・副元帥府に屬し、軍中の機密に關預す。

琚は江陵節度府の參謀なるべし。(二)先支率錢米。支は支出する、率錢米は江陵へ運ぶべき錢米の幾分かをいふ。率は割合をいふ。

(三)同自出。自りて出づる所を同じくす、自出の語は「左傳」に出づ、已にみゆ。盧琚の母、作者の母、故に崔氏なり、故に自出を同じくすといふ。(四)妙選。すぐれたものとして選任せられしこと。(五)高標。高きめじるし。(六)入幕。幕府に入る。(七)孫楚。楚、石苞が揚州の都督たりしときその參軍となる、已にみゆ、以て琚に比す。(八)披襟。えりをひらく、心おきなきこと。(九)鄭僑。楚、石苞が揚州の都督たりしときその參軍となる、已にみゆ、以て琚に比す。(十)契託饒。えりをひらく、心おきなきこと。(十一)蕭條。楚、石苞が揚州の都督たりしときその參軍となる、已にみゆ、以て琚に比す。

郵備 郵の子産なり、吳の季札、郵に聘し、子産と交る、之に藟帯を興ふ、子産は貯衣を贈る、以て藟に比す、仇注にては子産が晉に聘したる點を詔が江陵より長沙に使用したる點に比すとく、今取らず。【一〇】丈人 藟をさす。【一一】藟才地 才地は人才の生ずべき門地、才地に藟るとは貴族の山なるをいふ。【一二】門閭 積功、積勞を伐といふ、伐あるものは之を表彰するためその門に特別の制を設けしむ、之を閭といふ、唐の六品以上の烏頭大門、又は表揚、後世の樞星門の類は是なり。【一三】冠雲霄 上述の門が雲霄のうへに華を抜きて立つ。【一四】老矣逢迎拙 自己をいふ、逢迎は他人を迎へること。【一五】相於契託餘 相於是相與の如し、親交するをいふ、契託餘とは盧琬と契り之に依託する所多きなり。【一六】賜錢傾府待 賜錢は恩賜の錢、傾府待の府は揚注に長沙府をいふとす、之に従ふ。傾府待とは長沙府がすべて待つなり。【一七】爭米駐船遙 爭米は府民賜米を得んと争ふなり、駐船は蓋し盧の坐乗する所の船にして現に長沙にとどまるものをいふ。【一八】隣好親離薄 親離に隣好薄しとすの意、恥心をいふ、隣好とは江陵府が長沙に對する好誼。【一九】恥心杼柚焦 杼柚に恥心焦るの意、杼柚は「歲晏行」に杼柚、梭と機の卷き軸と、杼柚空しの意をとる。恥は田野の民、農民耕織を勤むるも生活安からざるにより恩賜の錢米を得たしとあせるなり。【二〇】客星 自己をさす。【二一】空伴使 使とは使者盧琬をさす、空伴とは琬をして長沙民のために錢米を十分に支出せしめ得れば伴ふかひあるも、十分には支出せしめ得るに至らざるを以て空しく伴ふといふ。【二二】寒水不成潮 實量とたとへてを象れていふ、秋冬の水が寒水なり、秋冬には江湖の水潤れて少し、故に潮を成す能はず、錢米を少量に支給しても焼け石に水の様なものなることをかくいへり。【二三】素髮二句 自己をいふ、素髮は白髮。【二四】乾垂領 水分なくなりてえりに垂れさがる。【二五】銀章 銀魚袋をいふ、作者の慣用語。【二六】説詩二句 彼我兩者につきていふ。【二七】藟輸車半 湖山合動搖 作者自ら其の文藻を誇るとくものあり。微慢不遜といふべし。盧の文藻を稱揚すとくものあり、湖山の句は李白の興閣落筆驚五嶽、といふの類なりとす。それならば輸車可なるべし。鄒見は兩説に異なり。藟輸の句は自己につきていひ、湖山の句は長沙の治體につきていひしものかとおもはる。藟輸はあやある文筆をいふ、車半とはよい加減にその場のまにあはせにするをいふ、湖山の句は其の率半にする原因をいふ、湖山は長沙の湖と山となり、動搖とは治安が保てずして擾亂のために動搖するをいふ。【二八】時清 平和をいふ。【二九】非造次 造次に得べきに非ざるをいふ、造次はあわただしき貌。【三〇】興盡 治體上述の如くなるによりて詩酒の興も盡くるなり。【三一】蕭條 意中のさびしきさま。【三二】休傳鹿是馬 其信也如也 此の二句も寓意隱微にして探りがたし。鹿を指して馬となすは秦の趙高が二世を愚にせし故事、鶴如鶴は賈誼が鶴賦序中の語。仇注には鹿是馬は中央の權臣魚朝恩の如きを指し、鶴如鶴は湖南兵馬使戚瑒(尙は明年四月に至りて亂をなす)の如きを指すとす。蔡夢弼曰く、鹿是馬は天子聰明なるを言ひ、鶴如鶴は通諷を惹ふる母かれと言ふなりと。楊倫は曰く、鹿是馬は盧琬を過くして上を向みする無かれといふなり、鶴如鶴は外吏に任じて民を虐する母かれといふなり、と。殆んど定解なし、今暫く仇注に依る。【三三】未解依依 解袂は已にみゆ、依依はよりそふさま、慕はしきさま。【三四】泛泛風 泛泛と酒をうかべたひさま。【三五】夜懸輝 懸輝をさくにつかれしこと、懸輝をさくごとに歳暮れて一年うつる。「詩」に、懸輝在堂、歲事其暮、とみゆ。【三六】體物 物を吾が體とする、物にあやかるをいふ。【三七】鷓鴣 みそささい、鷓鴣巢林、不遇一枝、と「莊子」にみゆ。【三八】滄洲 仙嶼、已にみゆ。【三九】曉見招 馮唐白首にして招かれて郎官とせらる、以て自ら比す。

【題義】江陵節度の參謀盧琬に贈つた詩。琬はこのとき江陵から長沙へ使者に来て、許可を得ぬさまに江陵へ運ぶ錢米の幾分かを支出して、赦許を待つてゐた。大曆四年秋、潭州にての作。

【詩意】恭しくおもふにあなたと自分とはその由つて出で來つた系統は同一であるが、あなたは英物として參謀にえらばれ他と異つて高くめじるしをたててをられる。あなたにあうて幕府にはひつた孫楚を知り、胸襟をひらいて鄭の子産の様な人に接することができた。丈人は貴族の地を基とし、門閭は高く雲霄のうへにある。じぶんは年老いて人を迎へることに拙いが、あなたとは親しくお交りをしていろいろと契りおたのみすることも多いのである。いま吾が長沙府は府を擧げて恩賜の錢米を待つてをり、あなたが江上はるかに座船をとどめられるをりに争うて御賜の米を得ようとしてをるのであ

る。農民は耕織をしても貧困なので一刻も早くとあせつて、この艱難な時節に江陵府は隣に對する好
 が薄いのだとまでかかんがへてゐる。それにじぶんはあなたのお側にゐながら錢米の支出を十分なさし
 め得ぬのはむだにおそばにゐる様なもので、結果は秋酒れの水では潮を成せぬ様なものである。」じ
 ぶんは白髪がかわいてえりくびに垂れさがり、銀魚袋は破れて腰についてゐる。あなたといくばんも
 つづけて詩のおはなしをしたり、いくあさもつづけて酒に酔うたりするが、文筆はただまにあはせに
 とどまる、じぶんの心では騷亂が起つてこの地方の湖山が動きたすかとおもふ。(一説によれば、一あ
 なたはまにあはせに詩をつくつても、湖山を動かすほどの才がある。) 時世が清く治まるといふこと
 は率次にはできぬことである。これをおもふと詩酒の興もさめて心中かへつてさびしくなる。天子は
 多くおなさを下されるが、人民はいよいよさびしくなる。「鹿が馬だ」なんといふことをお傳へなさ
 るな。鵬は鵬で鴟の様な悪鳥である、そんなものを御信用になるな。」おなつかしい袂を分たぬうち
 は、またなみなみと酒をたたへた瓢をくみかはしませう。わたくしは年のうつりゆくあひだに蟋蟀を
 きくことに疲れてしまつた。幸に鶴鶴といふお手本があるからそれにあやかつてくらしてゐます。晚
 年に郎官に招かれたなどとだれがいふのか、むしろ自分は滄洲の仙境にでもゆきたくおもうてゐるの
 に、その願望にそむいてゐるのである。」

惜別行送劉僕射判官

惜別行、劉僕射判官を送る

聞道南行市駿馬、
 不限匹數軍中須。
 襄陽幕府天下異、
 主將儉省憂艱虞。
 祗收壯健勝鐵甲、
 豈因格鬪求龍駒。
 而今西北自反胡、
 騏驎蕩盡一匹無。
 龍媒眞種在帝都、
 子孫未落東南隅。
 向非戎事備征伐、
 君肯辛苦越江湖。

聞道南行駿馬を市ふ、
 匹數を限らず軍中須つと。
 襄陽の幕府は天下に異なり、
 主將儉省にして艱虞を憂ふ。
 祗だ收む壯健にして鐵甲に勝ふるを、
 豈に格鬪に因りて龍駒を求めむや。
 而今西北反胡よりこのかた、
 騏驎蕩盡して一匹も無し。
 龍媒の眞種は帝都に在り、
 子孫未だ落ちず東南の隅。
 向に戎事征伐に備ふるに非ずんば、
 君肯て辛苦して江湖を越えむや。

惜別行送劉僕射判官

七三三

【字解】(一) 劉僕射判官 劉の名は詳かならず、僕射は宰相より下ること一等、劉の主將梁崇義の帯ぶる官名、判官は僕射のもとに於ける判官。(二) 南行 襄陽より南のた長沙に来るをいふ。(三) 襄陽幕府 襄陽は湖北の襄陽府、當時は山南東道節度使の治所なり。(四) 主將 劉の主としてつかふる將、梁崇義をいふ。(五) 儉省 儉約にしてむだをはよく。(六) 艱虞 世のなんざしんばいすべきこと。(七) 壯健 馬のつよくして鐵のよろひをつくるにたふるもの。(八) 格鬪 うちたかふ、私闘をいふ。(九) 龍駒 名馬。(一〇) 自反胡 胡の反せしよりの意、胡は安・史をさす。(一一) 龍 龍駒 已にみゆ。(一二) 龍

江湖凡馬多顛顛。
衣冠往往乘蹇驢。
梁公富貴於身疎。
號令明白人安居。
俸錢時散士子盡。
府庫不爲驕豪虛。
以茲報主寸心赤。
氣卻西戎回北狄。
羅網羣馬籍馬多。
意在驅除出金帛。
劉侯奉使光推擇。
滔滔才略滄溟窄。
杜陵老翁秋繫船。

江湖の凡馬多く顛顛す。
衣冠往往蹇驢に乗る。
梁公富貴身に於て疎なり。
號令明白にして人居に安んず。
俸錢時に士子に散じ盡くす。
府庫驕豪の爲に虚しからず。
茲の報主の寸心の赤きを以て、
氣西戎を卻けて北狄を回さむ。
羣馬を羅網して馬を籍すること多し、
意は驅除に在りて金帛を出す。
劉侯奉使推擇を光らす、
滔滔たる才略滄溟窄し。
杜陵の老翁秋船を繫ぐ、

【一】 子孫
【二】 東南隅
【三】 長沙地方
【四】 梁公、梁崇義なり。
浦注にいふ、史を考ふるに、廣德の初、崇義は來瑱が襄陽に鎮するに従ふ。瑒誅せらるるや自立して留後となる。代宗討つこと能はず、因つて山南東道節度に拜す。のち德宗の建中二年に至り、つひに朝命を拒ぎしを以て李希烈がために誅せらる、と。
【五】 蓋し正直の人物に非ず、作詩の時は或は名聲ありしものか。
【六】 於身疎、富貴をうとんする。
【七】 人安居、人民其の居處にやすんず。
【八】 士子、わかもの。
【九】 羅網、おごり贅澤な生活。
【一〇】 府庫のからになること。
【一一】 籍、馬を自己の管轄にし帳簿に記入する。
【一二】 驅除、戎狄をおひやりのぞく。
【一三】 出金帛、金銀や帛をだして馬を購ふなり。
【一四】 劉侯、列官をさす。
【一五】 光推擇、梁公の推薦選擇に負かず光輝あらしめる。
【一六】 滄溟、長沙につなぐをいふ。
【一七】 胡盧、ふくべ。
【一八】 九州、天下。
【一九】 重陽、陰曆九月九日の節句、作詩のこの時にあるを知るべし。
【二〇】 老夫、自己をさす。

扶病相識長沙驛。
強梳白髮提胡盧。
手把菊花路旁摘。
九州兵革浩茫茫。
三嘆聚散臨重陽。
當杯對客忍流涕。
不覺老夫神內傷。

病を扶けて相識る長沙驛。
強ひて白髮を梳りて胡盧を提げ、
手に把る菊花の路旁に摘めるを。
九州の兵革浩として茫茫たり、
聚散を三嘆して重陽に臨む。
杯に當り客に對して流涕を忍ぶ、
覺えず老夫神内に傷む。

【詩意】 聞けば君は南にでかけて駿馬を買ふ、その馬は軍中で入用のもので匹數を限らぬものであると。襄陽の幕府は天下の他の幕府とはちがひ、その主將は儉約で世のなんぎを憂へてをられる。このたびの馬買ひにもただ壯健の馬で鐵甲をきてはたらけるものだけをとらあつめるとのことだ、私の關争のためになど名馬を求めたのではない。西北で胡がそむいてからはいまは驕驕の駿馬はすつかりなくなつて一匹も無くなつた。龍媒天馬の眞の種は帝都にあつて、その子孫はまだ東南の隅には落ち

てこの。さきに軍事のため、征伐の用に備へるためでなかつたら、よもや君は辛苦して江湖を越えてはこなかつたであらう。江湖の地では凡馬は多くつかれてしまひ、衣冠の官員は馬にはのれず、びつこひきの驢馬に乗つてゐる。」君の主將梁公（崇義）は一身に於ては富貴をうとんじ、號令は明白で人民はその居に安んじてゐる。梁公は時として俸錢をすつかりわかいものに散じてやる、その府庫は自己の豪奢のためにはからにはならぬ。梁公はこの天子に報いたてまつる赤きまごころを以て、その意氣は西戎をしりぞけ、北狄をおひかへしてしまふつもりなのであらう。だから羣馬を網羅して多くの馬を簿籍にいれる、その意は戎狄を驅除するに在るから金帛を出されるのである。」劉君はこの梁公の使命を奉じてその推擇にそむかず却つてそれを光輝あらしめる、君の才略は滔滔としてひろき海をもせましとするおもむきがある。杜陵のおやちたる自分は秋この地に船をつないでゐたので、病軀を扶けられながら長沙驛で君としりあうた。じぶんはむりに白髪をくしけつてふくべを提げ、路ばたで摘んだ菊の花を手にとり、茫茫たる九州の兵亂のうちに、人生聚散の常ならぬことを三嘆しながら重陽の節にのぞむ。このときお客たる君に對し酒杯に向うて涕をながすまいと我慢はするが、このおやちは覺えず精神が内部で傷むのである。」

重送劉十弟判官

重ねて劉十弟判官を送る

分源豕韋派、別浦雁賓秋。

分源豕韋の派、別浦雁賓の秋。

年事推兄忝、人才覺弟優。

年事推兄を忝くす、人才弟の優なるを覺ゆ。

經過辨豐劍、意氣逐吳鉤。

經過豐劍を辨す、意氣吳鉤を逐ふ。

垂翅徒衰老、先鞭不滯留。

垂翅徒らに衰老、先鞭滯留せず。

本支凌歲晚、高義豁窮愁。

本支歲晚を凌ぐ、高義窮愁豁なり。

他日臨江待、長沙舊驛樓。

他日江に臨みて待たむ、長沙の舊驛樓。

【字解】【一】重送、前篇に送詩あり、故に重といふ。【二】劉十弟判官、即ち前篇「惜別行」の劉僕射判官なり、十は排行、弟は年少者。【三】分源豕韋派、「左傳」に、陶唐氏の後に豕韋氏・唐杜氏あり、又陶唐氏の後に劉累ありしことをいへり、故に劉氏も杜氏も同じ豕韋の派より源を分つといふ。卷二十一「敬寄族弟唐十八使君」詩を參看せよ。【四】別浦、支浦をいふ。【五】雁賓秋、雁の來賓する秋、來賓とは賓客のごとく來るなり。「禮記」月令に、季秋之月、鴻雁來賓」とみゆ。【六】年事、年がらに於ては。【七】推兄、兄として推さるることなかたじけなくす。【八】覺弟優、弟とは劉判官をさす。優はまさる。【九】經過、劉の居を訪ふをいふ。

【一〇】豐劍、豐城の劍、雷煥が故事、已にみゆ。【一一】意氣、劉の意氣。【一二】逐吳鉤、逐の字俗用、追字の義、吳鉤は「後出塞」詩（卷四、三二八頁）をみよ。劍鉤みな劉を比す。【一三】垂翅、つばさをたれる、鳥の勢なきさま、語は「後漢書」馮異傳にみゆ。【一四】先鞭、祖逖が故事、已にみゆ。【一五】本支、本枝なり、本家と分家、杜劉の關係をいふ。【一六】凌歲晚、九月は已に歲のくれの方な

【一七】高義、劉の義の高きこと、或は劉より作者に厚き贈物などせしものか。【一八】新蜀志、因蜀憂愁の念散す。【一九】他日、將來をいふ。【二〇】湘江、湘江にのぞんで。【二一】長沙書樓、後日より今日をさして書といふ、此の終りの湘江樓の語は謝靈運が族弟惠連に贈りし詩中の語を活用せり。

【題義】重ねて劉判官を送つた詩。前篇と同時に、大曆四年秋、潭州にての作なるべし。

【詩意】君と自分とは冢韋氏の派から源が分れてゐる。今江の支流の浦では雁がわたつてくる秋である。じぶんは年がらでは兄分に推されてゐるのはかたじけないが、才の方は弟がまさつてゐる様におもはれる。君のところへゆくと君が豊城の劍の如く紫氣斗牛を衝くことがわかる、君の意氣のするといことは吳鉤の武器を追はんとする。自分は翅を垂れて徒らに老衰してゐるが、君は祖述の様にじぶんよりも先鞭をつけてこんな南方に滯留してゐる様なことをせぬ。いま親類同士で歳のくれをすごし、君の義の高いおかげでこまりごとしんばいごとがからりとはれた。じぶんは今別れても長沙のあひかはらすの驛樓で江にのぞみながら君と再會するのを待つてゐよう。」

杜少陵詩集 卷二十三

湖中〔南〕送敬十使君適廣陵 湖中〔南〕にて敬十使君が廣陵に適くを送る

相見各頭白。其如離別何。相見れば各頭白なり、其れ離別を如何にせむ。

幾年一會面。今日復悲歌。幾年一たび會面す、今日復た悲歌す。

少壯樂難得。歲寒心匪他。少壯樂得難し、歲寒心匪他なり。

氣纏霜匣滿。冰置玉壺多。氣は霜匣を纏ひて滿つ、冰は玉壺に置かるること多し。

遭亂實漂泊。濟時曾琢磨。亂に遭ひて實に漂泊す、濟時曾て琢磨す。

形容吾較老。膽力爾誰過。形容吾較老ゆ、膽力爾誰か過ぎむ。

秋晚嶽增翠。風高湖湧波。秋晚れて嶽翠を増す、風高くして湖波を湧かす。

騫騰訪知己。淮海莫蹉跎。騫騰知己を訪ふ、淮海蹉跎たること莫かれ。

【字解】〔一〕湖中、中は一に南に作る、南字まされり。湖南は洞庭湖の南、潭州（長沙）をいふ。【二】敬十使君、作者の「道明

湖南送敬十使君適廣陵

高蜀州人日詩の序に、昭州教使君超先あり、仇氏は數十は教超先をいふならんとせり。【一】廣陵、揚州なり。【二】歲寒、晩年をいふ。【三】心匪他、匪他とは兄弟の情の如くなるをいふ。「詩」に、豈伊異人、兄弟、匪他、とみゆ。晉の盧諶が贈劉琨詩にこの匪他の二字を切りとりて兄弟の義として用ふ、曰く、劉琨委心、自問匪他、と。【四】氣、劍の紫氣。【五】霜、霜を帯びたるは、霜とは劍の色をいふ。【六】冰、心の清きをたとふ、鮑照が樂府に、清如玉壺氷、とみゆ。【七】琢磨、玉をみがくこと、嘗て共に論じあひしをいふ。【八】嶽、南嶽をいふ。【九】湖、洞庭湖。【一〇】羣、鳥や馬のあがること、教の意氣壯なるをいふ。浦注に、この二字を作者に屬せしめしは從ひがたし。【一一】訪知己、教が其の知己を訪ふをいふ。【一二】淮海、廣陵をさす、淮水及び海のある處。【一三】題此、つまづくさま。

【題義】 湖南で敬超先が廣陵へゆくのを送つた詩。大曆四年の秋のくれ、潭州にての作。

【詩意】 おたがひにであうてみるとどちらも白髪あたまになつてをるが、別れねばならぬとはどうしよう。なんねんめかにいちど面會したかとおもふと、けふはまた悲しい歌をうたはねばならぬ。』むかしわかかつたころの樂みは得られぬが、晩年の心もちはやはり兄弟同様である。君は霜さへさむき匣のなかにいつばいに紫の劍氣がまとうてゐるが如く、また玉壺のなかに清き氷をたくさんいれてある如き人物だ。自分は亂にあうて漂白してゐるが、時世を濟ふためにかつては君とすることについてみがきあうたものだ。形容は自分の方がすこしふけてゐるが、膽力はだれもおまへにまさるものはない。』秋がおそくなつて南嶽は翠をまし、風が高くて洞庭湖は波をわかしてゐる。このをりおまへは躍りあがつて知己をたづねにゆくが、淮海のあちらでつまづく様なことをしないやうにしてもらひたい。』

たい。』

晚秋長沙蔡五侍御飲筵送殷六參軍歸澧觀省

晚秋長沙蔡五侍御が飲筵にて、殷六參軍が澧に歸り觀省するを送る

佳士欣相識。慈顏望遠遊。佳士相識を欣ぶ、慈顏遠遊を望む。

甘從投轄飲。肯作致書郵。甘んじて從ふ投轄の飲、肯て書郵を致すを作さむや。

高鳥黃雲暮。寒蟬碧樹秋。高鳥黃雲暮る、寒蟬碧樹秋なり。

湖南冬不雪。吾病得淹留。湖南冬雪らず、吾病みて淹留することを得。

【字解】 【一】蔡五侍御、侍御史蔡某。【二】殷六參軍、參軍殷某。【三】澧、州の名、岳州府に屬す。【四】觀省、親にお目みえし、安否をとふ。【五】佳士、殷をさす。【六】慈顏、殷の母をいふ。【七】望遠遊、遠遊したるわが子を望む。【八】投轄飲、陳遵が故事、已にみゆ、蔡侍御の飲筵をいふ。【九】致書郵、「世説」に云ふ、殷羨、字は洪喬、豫章太守となる、都下の士人、羨に因りて書を致すもの百餘函、羨行きて石頭に次り、皆之を水中に棄てて曰く、沈むものは沈め、浮ぶものは浮べ、殷洪喬書郵を致すを爲す能はず、と。書郵を致すは手紙を先方へとどけるをいふ、作者前に「送侍御四舅之澧州」詩あり、蓋し殷六に托してこの舅に書を致さんとするなり。同姓の故事を用ふ。

【題義】 秋のくれに長沙に於て侍御史蔡某が酒席で參軍殷某が母御を見舞ふために澧州へ歸るのを送

つた詩。大曆四年秋晚、長沙にての作。

【詩意】 自分はうれしくも股侍御の様な佳士を識つた。君の母御は君が遠遊してをるのを待ちこがれてながめてをられる。自分は主人蔡侍御が陳遵の如く客の車轡を井に投じてまで酒を飲ませるのに平気で従つて酒を飲む。股君よ、君は自分のためにしひても澧州の方へ手紙をとどけてくれることはできまいか。いま鳥は高くとんで黄雲の色暮れんとし、寒蟬なきて碧樹も秋ならんとしてゐる。湖南は冬も雪がふらぬといふから、病める自分はここでひさしく滞留することができらるであらう。

別張十三建封

張十三建封に別る

嘗讀唐實錄。國家草昧初。
劉裴首建議。龍見尙躊躇。
秦王撥亂委。一劍總兵符。
汾晉爲豐沛。暴隋竟滌除。
宗臣則廟食。後祀何疎蕪。
彭城英雄種。宜膺將相圖。

嘗て唐の實錄を讀むに、國家草昧の初。
劉裴首として議を建つ、龍見尙ほ躊躇す。
秦王撥亂の委、一劍兵符を總ぶ。
汾晉豊沛と爲る、暴隋竟に滌除せらる。』
宗臣は則ち廟食す、後祀何ぞ疎蕪なる。
彭城の英雄の種は、宜しく將相の圖に膺るべし。

爾惟外曾孫。側儻汗血駒。
眼中萬少年。用意盡崎嶇。
相逢長沙亭。乍問緒業餘。
乃吾故人子。童卯聯居諸。
揮手灑衰淚。仰看八尺軀。
內外名家流。風神蕩江湖。
范雲堪結友。嵇紹自不孤。
擇材征南幕。潮落回鯨魚。
載感賈生慟。復聞樂毅書。
主憂急盜賊。師老荒京都。
舊丘豈稅駕。大厦傾宜扶。
君臣各有分。管葛本時須。
雖當霰雪嚴。未覺栝柏枯。

爾は惟れ外曾孫なり、側儻なり汗血の駒。』
眼中萬の少年、意を用ふる盡く崎嶇なり。
相逢ふ長沙の亭、乍ち問ふ緒業の餘。
乃ち吾が故人の子、童卯居諸を聯ぬ。』
手を揮ひて衰涙を灑ぐ、仰ぎ看る八尺の軀。
内外名家の流、風神江湖に蕩す。
范雲友を結ぶに堪へたり、嵇紹自ら孤ならず。』
材を擇ぶ征南の幕、潮落ちて鯨魚回る。
載ち感ず賈生が慟、復た聞く樂毅が書。
主憂へて盜賊急なり、師老いて京都荒る。
舊丘豈に駕を税かひや、大厦傾宜しく扶くべし。』
君臣各々分有り、管葛本時に須たる。
霰雪の嚴なるに當ると雖も、未だ覺えず栝柏の枯るるを。

高議在雲臺。嘶鳴望天衢。高議雲臺に在り、嘶鳴天衢を望む。

羽人掃歸碧海。功業竟何如。羽人碧海に掃歸らば、功業竟に何如。

【字解】 張十三建封。『善所書』にいふ、大曆の初、道州刺史裴虬、建封を湖南觀察使韋之晉に薦む、之晉辟して參謀に署し、

左清道兵曹參軍を授く、職を樂しまずして輒ち去る。後ち徐泗濼節度使となる、と。案するに韋之晉の潭州刺史、湖南觀察使たるは大

曆四年二月にあり、この年夏、之晉卒し、七月崔瑊繼ぎ、五年四月に至りて威珣の亂起りて瑊殺さる。本篇に、『當富雲臺』の句あり、

雲臺のみならず、被れて時令をいひしものならん、然らば本篇は四年冬の作にて、之晉が下に在るを樂しまざるに非ず、崔瑊が下にあ

るを樂しまずして去るとき別れしことないへるものならん。【二】唐實錄。唐の天子の事實を書したる記録。【三】韋味初。くまわけ

のはじめ。【四】劉毅。劉文靜、裴寂。劉文靜傳に云ふ、文靜、大業の末、晉陽の令となる、晉陽の宮監裴寂と善し。文靜太宗を見、寂

に謂つて曰く、唐公子は非常の人なり、と、因つてともに議を定めて兵を起す、と。『通鑑』に云ふ、大業中、高祖太原を鎮す、時に劉

文靜晉陽の令となり、裴寂晉陽の宮監となる、天下騒起るを見、隋の必ず亡ぶるを知り、首として議を建て大事を舉げしむ、帝(高祖)

猶ほ未だ尤さず、秦王(太宗)之を贊す、遂に兵を汾晉に起す、と。【五】首建。裴寂の兵を起す、と。上にみゆ。【六】龍

見。龍があらはれでる、姿を出して兵を起す、と。語は『易』乾卦にみゆ。【七】時。時。ためらふ貌、高祖の志未だ決せざりしをいふ。

【八】秦王。高祖の子李世民、後の太宗。【九】裴寂。裴寂。裴寂をさむる姿、語は公平傳にみゆ。【一〇】總兵符。軍事のわりふを總べ

にざる、兵權を執りしをいふ。【一一】汾晉。汾水、晉陽、山西太原の地方をいふ。唐の高祖太宗の舉兵の地。【一二】爲豐。豐沛は

二地の名、漢の高祖劉邦が舉兵の地。【一三】暴隋。暴虐なる隋朝。【一四】裴寂。その汚濁をそそぎのぞく。【一五】宗臣。國家が宗と

したつと大臣、劉、裴をさす。【一六】廟食。宗廟に祀られて食をなす。【一七】後祀。劉、裴二人の子孫たる者の祭祀。【一八】疎燕。う

とんじられ、あるる、祀らるるもの無きをいふ。子孫ふるはざればなり。【一九】彭城英雄。英雄は劉文靜をさす、種はたれ、英雄種

とは文靜の子孫たるものをいふ、文靜傳にいふ、文靜自ら言ふ、系は彭城より出づ、と、世に京兆の功に居る、父祖は隋に仕へて職死

し、開府儀同三司を贈らる。【二〇】齊將相國。文武の謀國の任にあたるをいふ。【二一】附。汝、建封をさす。【二二】外曾孫。文靜の

女が張氏へ嫁してできたひこま。【二三】側。不羈の才をいふ。【二四】汗血駒。血を汗する名馬の子。【二五】眼中。作者の眼

中。【二六】萬少年。萬は多をいふ。【二七】用意。こころの用ひかた。【二八】崎嶇。山路のてぼこさま、ひねくれてあるをいふ。

【二九】長沙亭。亭は驛亭。【三〇】乍間。乍はたちまち。【三一】結業餘。仇氏いふ、世緒家業。【三二】故人子。故人は舊知の人、建封

が父弟をさす、朱注にいふ、作者の父周、兗州司馬たり、作者周を訪ひしとき張翥と同遊し、建封も相從ひしなるべしと。【三三】童卵

卵はうごまげ、つのがみ、童の變形なり。【三四】驅辰。辰は助字、日月をさす、詩に、日居月諸とあり、居諸を以て日月の意を代

表せしむ。驅とはとにするの意。【三五】揮手。涙のついた手かうちふるふ。【三六】八尺。建封の大男のすがた。【三七】内外

内は張家、外は劉家をいふ。【三八】風神。様子、こころ。【三九】滿江湖。滿は放蕩、拘はらざるさま。楊注に風神滿江湖とは建封の

眉宇の間展せるをいふとせり。【四〇】范雲。『業書』にいふ、雲、節を好み奇を尚び、専ら人の意に趣く、少時、領軍長史王暕と善し、

暕官舎に亡す、雲にして居宅なし、雲乃ち雲を迎へて家に還り、刺ら除贖を營む、と。又『南史』にいふ、何遜、窮寇にして秀才に舉

げらる、范雲其の對策を見て大に相稱賞し、結んで忘年の友となる、と。【四一】結友。上にみゆ、自己を范雲に、建封を謝朓に比す。

【四二】管相自不孤。管康、山濤と神交を結ぶ、康、誅せらるるに臨み其の子紹に謂つて曰く、巨源(濤が字)在り、汝、孤ならず、と。

建封を山濤に、自己の子を管紹に比す。【四三】擗材。人材をえらぶ。【四四】征南幕。晉の社預、征南大將軍となる、韋之晉を比してい

ふ。【四五】湖海回鯨魚。前にものべし如く、湖海とは之晉卒し崔瑊之に代りしをいふならん、鯨魚は以て建封に比す。【四六】買生。買

買生時事につき痛哭涕泣すべきものあるを論ぜり、以て建封の時世を憂ふるをいふ。【四七】樂毅書。樂毅は戰國燕の昭王の將なり、趙

に降る、燕の惠王毅に書を遣り且つ之を謝す、毅も亦書を作りて王に報ず。建封必ず書を崔瑊に遣りしならん。【四八】主憂。主は天子。

【四九】師老。師は軍隊、老は衰弱をいふ。【五〇】黃丘。故郷をいふ、建封は鄧州南陽の人、兗州に遷れしことあり。【五一】稅駕。馬

を車より解きはなつ、休息すること。【五二】大風。大風。【五三】各有分。分は分限、職分。【五四】管葛。齊の管仲、蜀の諸葛亮、

【五五】時須。時世の必要とするもの。【五六】嚴雪。冬節をいふ。【五七】栝柏枯。栝はひのき、栝柏とは松栢といふの類。【五八】高

議。高處にての議論、高とは次の雲臺をさす。【五九】雲臺。後漢の明帝、功臣を南宮の雲臺に畫く、雲臺は宮中の高き臺をいふ、倍り

て宮中をさす。【六〇】嘶鳴。馬の鳴くをいふ。【六一】望天衢。天衢は天上のみち、句意は天衢にての嘶鳴を望むをいふ。【六二】羽人

仙人、仙人は空中に飛騰す、身に羽毛あるが如し。語は楚辭「遠遊」にみゆ。【空】 揚碧海 仇氏は揚は揚に作るべしとイヘリ、之に従ふ、碧海に歸るとは海上の仙境へかへり去るをいふ。【西】 竟何如 竟に何如とは功業立つべからざるをいふ。

【題義】 張建封が湖南を去るとき之に別れた詩。大曆四年冬、潭州にての作ならん。浦氏は本詩、章之晉の死に言及せざる故を以て之を大曆三年冬の作とせるは恐らくは非なり。

【詩意】 自分がかつて唐の實録を讀んだに、吾が唐の國家は草わけの初るとき、劉（文靜）・裴（寂）等が首として建議して兵を擧げさせようとしたが、高祖ははつきり龍の如く立ちあがることをためらはれた。そのをり秦王は亂世ををさむる姿をそなへてをられ、一劍によりて兵符を總轄し、汾晉の地方を漢の豊沛の如く發祥の地となし、暴虐な隋の汚濁な政治がつひにとりのぞかるに至つた。劉、裴の如き宗臣は廟に祀られて食事をしてをるが、その後の子孫たるものの祀りはなんであらうとんせられ、あれたるさまになつてをるのか。彭城の英雄たる劉文靜の子孫ならば榮達して將相となり文武の謀圖の任にあたるべきである。おまへはその彭城公の外のひこまごで、不羈の才を負うた汗血の駒である。じぶんは多くの少年を見てをるが、彼等は心の用ひかたがみんなひねくれたこせついたものどもである。（おまへはさうではない）。おまへとこの長沙の驛亭であひ、にはかに家すち職業など問うてみると、おまへはじぶんの舊友の子で、おまへのこどものをりにはともに月日をすごしたことがあつたのである。じぶんは涙のそそがるる手をうちふりながら、おまへの八尺の軀を

仰ぎ看る。おまへは内家外家とも名家の流れで、江湖の天地に放蕩する風神をもつてゐる。（楊注によれば「眉つきがまびろな相貌である」の意。）おまへは范雲に於ける謝朓で、雲も之と友を結ぶに足る。おまへは嵇紹に於ける山濤で、紹も之によつて孤とならざることを得るといふものだ。さておまへは征南大將軍の幕に人材として擇ばれたが、潮がひいたために鯨魚も居られずかへつてゆく。おまへは買誼が時事に慟哭する様に世のことを憂ふことは自分も感じさせられる。またおまへは樂毅の様に置き手紙をしたといふことも聞いてをる。いま盜賊急にして天子はごしんばいになり、軍隊は衰へて京都は荒れてゐる。どうして故郷のものと丘などへ歸つて車の駕をといてやすんでをられよう、大厦の傾かんとするときはそれを扶けておこすがよろしい。君も臣も各、その本分がある。管仲・諸葛亮の如き人物は時世の必要とする所のものだ。いま霰や雪の嚴しくさむい時節にあたつてはをるが、栝や柏は決して枯れるものとみえぬ。雲臺の高いところで國を救ふための議論が行はれつつある、自分はどうかおまへが天衢にいななく様にと望んでをる。羽をはやした仙人も碧海の仙境へ歸つてしまつたのでは、その功業といふものはつひにどうなることか、樹て得られぬではないか。（だから引つ返すに出てはたられ。）

送盧十四弟侍御護章尚書靈輓歸上都二十四韻

盧十四弟侍御が章尚書の靈輓を護して上都に歸るを送る 二十四韻

素幙度江遠、朱幡登陸微。
 悲鳴駟馬顧、失涕萬人揮。
 參佐哭辭畢、門闌誰送歸。
 從公伏事久、之子俊才稀。
 長路更執紼、此心猶倒衣。
 感恩義不小、懷舊禮無違。
 墓待龍驤詔、臺迎獬豸威。
 深衷見士則、雅論在兵機。
 戎狄乘妖氣、塵沙落禁闈。
 往年朝謁斷、他日掃除非。
 但促銅壺箭、休添玉帳旂。

素幙江を渡る遠し、朱幡陸に登る微なり。
 悲鳴駟馬顧る、失涕萬人揮ふ。
 參佐哭辭し畢る、門闌誰か歸るを送る。
 公に従ひて伏事すること久し、之子俊才稀なり。
 長路更に紼を執る、此の心猶ほ倒衣。
 感恩義小ならず、懷舊禮違ふこと無し。
 墓は待つ龍驤の詔、臺は迎ふ獬豸の威。
 深衷士則を見る、雅論兵機に在り。
 戎狄妖氣に乗ず、塵沙禁闈に落つ。
 往年朝謁断ゆ、他日掃除非なり。
 但だ銅壺の箭を促せ、玉帳の旂を添ふるを休めよ。

動詢黃閣老、肯慮白登園。

動もすれば黃閣の老に詢ふも、肯て慮らむや白登の園。

萬姓瘡痍合、羣兇嗜慾肥。

萬姓瘡痍合る、羣兇嗜慾に肥ゆ。

刺規多諫諍、端拱自光輝。

刺規諫諍を多くせよ、端拱自ら光輝あらむ。

儉約前王體、風流後代希。

儉約は前王の體、風流後代希ふ。

對駁期特達、衰朽再芳菲。

對駁特達を期せよ、衰朽再び芳菲あらむ。

空裏愁書字、山中疾采薇。

空裏愁へて字を書す、山中疾みて薇を采る。

撥杯要忽罷、抱被宿何依。

杯を撥して要忽ち罷む、被を抱きて宿するに何れにか依。

眼冷看征蓋、兒扶立釣磯。

眼冷かに征蓋を見る、兒に扶けられて釣磯に立つ。

清霜洞庭葉、故就別時飛。

清霜洞庭の葉、故らに別時に就きて飛ぶ。

【字解】 一、盧十四弟侍御、侍御史盧某、弟とは表弟、作者の祖母は盧氏、盧侍御は作者の母方の年したのいとこなり。二、草尚書、章之督なり、卷二十二に「哭章大夫之督」詩あり、之督必ず尚書に除せられしならんも何尚書なるか明かならず。三、靈輓、靈柩。四、上都、長安。五、素幙、白きまく、舟に張りしもの。六、朱幡、あかきぼた、章の部下の軍の建つるもの。七、駟馬、四匹の馬、轅を引く馬ならん。八、失涕、覺えずなみだなだす。九、參佐、佐史參軍、下役のもの。十、門闌、長沙にある章宅の門、まぜ。十一、送歸、靈輓の故郷にかへるを送る。十二、從公伏事、盧侍御についていふ、次句の子が從字及び伏事の字の主語、公は章をさす、伏事はつかへしこと。十三、之子、盧をさす。十四、執紼、紼は繩索、指をひくつな、執紼は紼をとりて從

ひゆくをいふ。【三】 例衣「詩に、朝服衣裳、自公召之」とみゆ。生前衣裳をあべこべに着けて命に赴きしと同じ心なるをいふ。
 【二〇】 龍驤 晉の王濬龍驤將軍たり、卒して大に華城を營む。趙注にいふ、韋の墓、大に華城を營むこと王濬の如くなるには詔を俟つべきなり、と。【二七】 臺 御史臺。【二八】 翻考 翻考は一角の歌、法冠は之を冠す、盧侍御をいふ。【二九】 深衷 盧の喪を送る誠心をいふ。【三〇】 士則 士人のてほん。【三一】 雅論 盧の平生の議論。【三二】 兵機 軍事の機會。【三三】 戎狄 吐蕃。【三四】 朝高 謁見やむ、代宗陝州に出奔せられしこと。【三五】 他日 往日。【三六】 掃除非 仇氏いふ、魏政策なきをいふと。掃除とは不潔のものをはきすてること、従つて善人を逐ひはらふをいふ。【三七】 促銅壺箭 銅壺は水時計の水を蓄ふるつぼ、箭は期限を指示する「や」、促箭とは時を早くし、朝早く朝政を視ることを勸むべきをいふ。【三八】 添玉帳 玉帳はうつくしき陣幕、箭は「ばた」、添箭とは兵を増すをいふ。【三九】 詢 とひはかる。【四〇】 黃閣老 大臣元老をいふ。【四一】 白登圍 漢の高祖匈奴を征伐して白登に於て圍まる、代宗の蕃人に攻めらるるをいふ。【四二】 萬姓 人民。【四三】 衛合 衛合はさす、合は集合の意、仇注に兵賦に困しむをいふとせり。【四四】 羣兒 多くのわるもの、武臣をさす。【四五】 嗜慾肥 欲する所をほしのままにして肥ゆ。【四六】 朝規 そしり、いましむ。【四七】 端拱 端拱として手をこまぬく、天子の容なり。【四八】 前王 前代の賢王。【四九】 風流 法風といふ類。【五〇】 從代希 希はこひれがひ法るべきをいふ。【五一】 對歌 敵は揚に同じ、語は詩、書にみゆ。天子の命に對へ、稱揚する。【五二】 特達 盧が同様に天子のおそばへでるをいふ。【五三】 衰朽 自己の老態をいふ。【五四】 芳菲 かなる、再び人生の春に逢ふをいふ。【五五】 空裏書字 殷浩が故事、已にみゆ。【五六】 采薇 貧生活をいふ。【五七】 癡杯 癡は杯のなかの酒をほらひのけること。【五八】 要 相遊なり、酒席にむかへらるること。【五九】 抱被 かいまきないだく。【六〇】 宿何依 同宿すべき所なきをいふ。【六一】 征盡 盧の車の建てがき。【六二】 兒扶 ことどもに扶けられて。【六三】 前霜 霜のおくときをいふ。【六四】 故 故意、わざとらしく。

【題義】 とししたのいとこ侍御史盧某が尙書韋之晉の柩を護送して長安へかへるのを送つた詩。黃鶴は大曆四年冬、潭州の作とせり。

【詩意】 白い幕が遠く江邊をわたつてゆき、朱いはたが微に陸にのぼりゆく。驕馬はかなしみ鳴いて左右をよりかへる、萬人は覺えず涙をおとしてそれを手でうちほらふ。部下の下役たちは哭して柩にいとまごひをしをはつたが、さて官邸の門闌からだれが尙書書之の柩の歸るのを送つてゆくのであるか。この人（盧侍御）は稀なる俊才であつて、韋公に従ひ事へてゐることが久しい。それでこのうへにも長道中を柩のつなをとつてゆかうといふ、その心ではいままも生前と同じく衣裳を顛倒して公事に赴く氣もちであるのである。かほどに恩に感ずるはその義は小なるものでなく、もとのことをおもうてすこしも禮からはづれぬのである。尙書が歸葬されるときはその墓はさだめし、詔を待つて龍驤將軍王濬の様に壯大な塋域をつくられるであらう、盧侍御が送つてゆくのであるから御史臺は威ある獬豸の冠容を迎へることであらう。盧君のふかい誠衷は士人のてほんを見るに足る。また君の平生の議論は軍機に關することに存してゐたのである。かつて戎狄が妖氣に乗じて起り、塵沙が宮門に落ちてきた。之がためそのむかし朝廷での謁見は斷絶してしまひ、また不潔なものをはきすてることでもできなかつた。（こんなことではならぬのであるから、君がみやこへついたらならば）ただ水時計の箭を早くすませせて天子に朝政にお勤めになることをすすめ、武將の玉帳の旂などをやたらに増加させぬ様にするがよい。天子はともすれば黃閣の老臣に政務のことをおたづねにはならうが、臣下はだれも漢の時に白登の圍みがあつて夷狄に困しめられた様なことをしんばいするものはない。人民はさまざまのきずをあつめてうけ、多くのわるものは嗜慾を満足させて肥えふとつてゐる。君はわるいことを

ばそしりいましめ多く諫諍を爲せ、さすれば端然として手をこまぬいてござる天子のおすがたにもひとりでに光輝が生じてくる。前代の賢王の政治の體は儉約に在る、そのありさまを後代もねがうてをるのである。君は天子の御命令にお答へをしそれを稱揚するには他をまたすひとりて君前に達する様に心がけるべきである。さすればこの衰朽のわが身もふたたび花さく春に逢ふことであらう。」
 自分は時事を愁へて殷浩のごとく空中に字を書き、疾にかかりながら山のなかでわらびをとつてたべてゐる。君と別るれば招宴もやんでしまふから杯をはらひのける。夜具をかかへて同宿しようとしてもどこにとまつてよいか、たよるべきはしよもない。力のない眼つきで君ののりゆく車蓋を看ながら、こどもに扶けられて釣磯にたたすんでゐると、清き霜のおくころの洞庭湖畔の木の葉は、わざと吾が悲しみを深めがほに、この別れのをりにつけこんで飛ぶのである。」

蘇大侍御訪江浦賦八韻記異

蘇大侍御、江浦に訪ふ、八韻を賦して異を記す

蘇大侍御渙靜者也、旅於江側、不交州府之客、人事都絶久矣、肩輿江浦、忽訪老夫舟楫已而茶酒内、余請誦近詩、肯吟數首、才力素壯、辭句

動人、接對明日、憶其湧思雷出、書篋几杖之外、殷殷留金石聲、賦八韻記異、亦見老夫傾倒於蘇至矣。

蘇大侍御渙は靜者なり、江側に旅し、州府の客に交らず、人事都て絶つこと久し。江浦に肩輿し、忽ち老夫を舟楫に訪ふ。已にして茶酒の内、余近詩を誦せむと請ふ、肯て數首を吟す。才力素壯に、辭句人を動かす。接對せる明日、其の湧思雷のごとく出で、書篋几杖の外、殷殷として金石の聲を留むるを憶ひ、八韻を賦して異を記す、亦た老夫が蘇に傾倒すること至れるを見じ。

【字解】(一) 蘇大侍御 名は渙、大は排行第一なるをいふ。(二) 江浦 湘江の浦。(三) 八韻 八韻十六句の詩。朱注にいふ、題には八韻といひて詩は七韻に止まる、疑ふらくは八の字誤れるか、或は詩、一聯を脱せしならん、と。余は一韻二句を脱せしのかとおもふ。説は後にいだし。(四) 記異 異事を記す。(五) 靜者 閒靜にふける人。(六) 江側 湘江の側。(七) 州府 潭州のやぐしよ。(八) 人事 人との交際のこと。(九) 肩輿 かたにてかつぐかごにのる。(一〇) 老夫 自己。(一一) 舟楫 舟次をいふ。(一二) 已而 もと而已とありしを固若曦によりて改む。(一三) 近詩 蘇渙のつくりし近時の詩。(一四) 接對明日 であうた翌日。(一五) 湧思雷出 わきだす思想が雷のごとく發動する。(一六) 書篋 ほんば。(一七) 几杖 脇息、つま。(一八) 殷殷 雷聲のま。【一九】 金石聲 金石器を以て奏する音樂の聲。【二〇】 傾倒 心をかたむけつくす。

龐公不浪出蘇氏今有之

龐公浪りに出でず、蘇氏今之れ有り。

再聞誦新作、突過黃初詩。

再び聞く新作を誦するを、突過す黃初の詩。

乾坤幾反覆、揚馬宜同時。

乾坤幾たびか反覆す、揚馬宜しく時を同じくすべし。

今晨清鏡中、□□□□□□□□□□。

今晨清鏡の中、□□□□□□□□。

□□□□□□□□勝食齋房芝。

□□□□□□□□齋房の芝を食ふに勝る。

余髮喜卻變、白間生黑絲。

余が髮卻つて變するを喜ぶ、白間に黑絲を生ず。

昨夜舟火滅、湘娥簾外悲。

昨夜舟火滅す、湘娥簾外に悲しむ。

百靈未敢散、風破〔波〕寒江遲。

百靈未だ敢て散せず、風破〔波〕寒江遲し。

【字解】 〔一〕 蘇公。後漢の蘇德公、東陽の峴山の南に居り、未だ嘗て城府に入らず。〔二〕 浪出。みだりにでかける。〔三〕 蘇氏。漢をさす。〔四〕 新作。即ち序の新詩。〔五〕 突過。つきぬける。〔六〕 黃初。三國の魏の年號、曹植等所謂鄴中七子の輩出せし時期。〔七〕 乾坤二句。世の變遷しはばなるをいふ。〔八〕 揚馬宜同時。揚馬は揚雄、司馬相如、仇注に此の句は蓋し以蘇氏已なりといひ、蘇と自己とは相如揚雄が時を同じくして出でしこととけるに似たり。師氏の説には蘇は今人に似ず相如揚雄と名を當時に齊しくすべしといへり。この説まされるが如し。〔九〕 今晨清鏡中。此の句以下は原文は直ちに勝食齋房芝へつづけり。故に七韻となれり。仇氏は十韻のままに依りて句の位置を、今晨清鏡中、白間生黑絲、余髮喜卻變、勝食齋房芝、と變更せり。余は句の位置は原文に依り、今晨清鏡中の次に押韻の句一、又その次に不押韻の句一を脱したるものと考ふ。因つて□□の符號を補ひて脫落の部分を示せり。〔一〇〕 齋房芝。漢の武帝の元封二年に芝、甘泉宮の齋房に生ず、九靈連葉、とあり。芝は靈芝、藥草にして身を軽くし年を延ばし、老いざらしむるもの、齋房とは天子、神を祭る齋戒のおへやなり。〔一一〕 髮。色のかはるること。〔一二〕 白間。白絲のあひだ。〔一三〕

無絲。くろきいと、絲とに髮をたとへいふ。〔一四〕 湘娥。湘夫人なり、已にみゆ。〔一五〕 百靈。多くの神靈。〔一六〕 風破。破は吹破の意か、一に波或は浪に作るといふ、風波又は風浪にらば其の義明かなり。〔一七〕 寒江遲。遲とは流れのおそきをいふならん。容書隨筆にいふ、蘇漢、少くして劉暉を喜び、善く白琴を用ふ、巴蜀の商人之に苦しむ、白路と稱し、以て莊諧に比す。後ち節を折りて書を讀み、進士及第す、湖南の崔瑒、從事に降す、繼ぎて交廣に走り、哥舒晃と反し、殊に伏す、と。苻堅また漢が廣州に在りしとき作りて長官に上りし變律詩十九首のうち二首をあぐ、其の中の一は下の如し。曰く、海終一成、高掛懸木枝、行人自歩外、日斷魂爲飛、長安大道遠、挾彈彈家兒、手持黃金丸、引滿無所疑、一、中、紛、下來、勢若風雨隨、身如萬箭攢、宛轉迷所之、徒有疾、惡心、奈何不知、知、これは後日物語なれども漢の詩なるものは凡そ此の如きものなりしなるべし。參考のため此に附記す。

【題義】 侍御史蘇漢が自分を湘江の浦に訪うた。それで自分は八韻の詩をつくつてかはつたこともあつたものだといふことをした。漢は閉靜にふける人物で、湘江のそばに旅しながら州のやくしよの人たちには交際をせず、ながらく人事を絶つてゐたのだ。それが湘江の浦へかごでやつてきて忽ちこのおやちを舟がかりのばしよにたづねたのだ。しばらくするとお茶や酒のあひだに自分は彼に近作の詩を誦してくれとたのんだところ、彼は承知して數首を吟じてくれた。彼の才力はもと壯なものでその辭句は人を感動させるものがある。自分はあるた翌日、彼のわきたつ詩思が雷の様にうごきたして、ほんばこや脇息・杖のあたりにまで殷殷と金石の聲をとどめてゐることをおもつて八韻の詩をつくつてこの異事をするした、これでどれほどこのおやちが彼れ蘇漢に十分心を傾けてゐるかがわかるであらう。大曆四年、潭州にての作。

軍符侯印取豈遲。
 紫燕驟耳行甚速。
 聖朝尙飛戰鬪塵。
 濟世宜引英俊人。
 黎元愁痛會蘇息。
 戎狄跋扈徒逡巡。
 授鉞築壇聞意旨。
 類網漏網期彌綸。
 郭欽上書見大計。
 劉毅答詔驚羣臣。
 他日更僕語不淺。
 明公論兵氣益振。
 傾壺簫管動白髮。

軍符侯印取ること豈に遅からむや、
 紫燕驟耳行くこと甚だ速かなり。
 聖朝尙は飛ぶ戦鬪の塵、
 濟世宜しく引くべし英俊の人。
 黎元愁痛會す蘇息せしむべし、
 戎狄跋扈徒らに逡巡す。
 授鉞築壇意旨を聞かむ、
 類網漏網彌綸を期す。
 郭欽が上書大計を見る、
 劉毅が答詔羣臣を驚かす。
 他日更僕語淺からず、
 明公論兵氣益振ふ。
 壺を傾ぐれば簫管白髮に動く、

り。(卷三、二〇頁)。(三) 花映肉、血色のよきをいふ。(四) 軍符侯印、軍中に用ふるわりふ、趙注に節度使の用ふるものとす、侯に封ぜらるる印。(五) 紫燕、漢の文帝の良馬。(六) 驟耳、則の穆王の八駿の一、翼の俊才をたとふ。(七) 黎元、人民。(八) 會蘇息、會は必ず、蘇息はよみがへり、やいむ。(九) 跋扈、あばれる。(一〇) 逡巡、ためらふ。(一一) 授鉞、まさかりを授ける、兵權を委ぬるなり。晉書禮志にいふ、漢魏の故事に將を遣はし出征せしむるときは符節郎、節鉞を朝堂に授く、と。(一二) 築壇、大將に任命すること、韓信が故事。(一三) 聞意旨、天子のおほしめしのあることを耳にする。(一四) 類網、漏網、くづれたつな、もれるあみ、陸機が諸侯論の語。(一五) 彌綸、

儻劍霜雪吹青春。
 宴筵曾語蘇季子。
 後來傑出雲孫比。
 茅齋定王城郭門。
 藥物楚老漁商市。
 市北肩輿每聯袂。
 郭南抱甕亦隱几。
 無數將軍西第成。
 早作丞相東山起。
 鳥雀苦肥秋粟菽。
 蛟龍欲蟄寒沙水。
 天下鼓角何時休。
 陣前部曲終日死。

劍を儻はせば霜雪青春に吹く。
 宴筵曾て語る蘇季子、
 後來傑出雲孫の比ならむと。
 茅齋定王城の郭門、
 藥物楚老漁商の市。
 市北肩輿毎に袂を聯ぬ、
 郭南甕を抱き亦た几に隱る。
 數ふる無かれ將軍西第の成るを、
 早く丞相と作り東山より起たむ。
 鳥雀苦だ肥ゆ秋の粟菽、
 蛟龍蟄せむと欲す寒沙水。
 天下の鼓角何時か休まむ。
 陣前の部曲は終日死す。

いとをひきはへること。(一六) 郭欽上書、郭欽は晉人、内地にある夷狄を邊地に徙すべきことを建議せり。(一七) 劉毅答詔、劉毅は晉人、武帝自己を如何なる主ぞと問へるに、陛下は官錢を賣りて私門に入るるゆゑ漢の桓・靈にも及ばずと答へたり。(一八) 他日、往日をいふ。(一九) 更僕、僕は大僕、君の朝見宴會に君の輔佐となるもの、その事久しきにわたるときは僕むによりて之をかふ。僕を更ふるは時の久しくたつをいふ。(二〇) 禮記、儀行篇の語。(二一) 語不淺、ふかくかたる。(二二) 明公、裴。(二三) 論兵氣益振、元氣をふるひ兵を論ずる。(二四) 傾壺、壺は酒つば。(二五) 動白髮、白髮の前に動き鳴る。(二六) 簫管、白髮にあたりて霜雪吹きそそがるること

附書與裴因示蘇

書を附して裴に與へ因つて蘇に示す、

此生已愧須人扶

此の生已に愧づ人の扶くるを須つを。

致君堯舜付公等

君を堯舜に致すは公等に付す、

早據要路思捐軀

早く要路に據りて捐軀を思へ。

し。【四七】曾語 語りて之に及ぶ
ないふ。【四八】蘇季子 蘇秦。
【四九】雲孫比 雲孫は七世の孫、比
とは似るなり。【五〇】茅齋 漢の
書齋。【五一】定玉城 卷二十二、清
明をみよ。【五二】藥物 仇氏い

ふ、作者藥を賣る、と。作者の進三、大禮賦、表に、賣藥都市、寄食朋友、の語あれば藥を賣ることが、(賣藥に隱るるの意)或は疾病の
身ゆふ藥物に親しむをいふか、文面にては明かならず。【五三】楚老 楚地の老人、自己をさす。【五四】漁商市 その市に近き處に寓
するをいふ。【五五】抱壺 かめを抱き水を汲みて田にそそぐ、漢陰丈人の故事、「莊子」にみゆ。【五六】隱几 脇息による、漢につき
ていふ。【五七】西華成 後漢の馬融、大將軍梁冀に朝びんがために西華頰をつくる。【五八】早作丞相 希望をいふ。【五九】東山起
晉の謝安が故事。【六〇】鳥雀 小人をたとふ。【六一】翠菰 あは、まめ。【六二】鮫龍 英傑をたとふ。【六三】部曲 部隊をいふ。
【六四】終日死 あさからばんまで戰死する。【六五】須人扶 他人から扶けてもらふことを必要とする。【六六】致君堯舜 君を堯舜の
地位に致す。【六七】公等 裴蘇等をさす。【六八】捐軀 からだをさす。

【題義】 秋のくれに道州刺史裴虬から手紙をもらつたので、にはかに興を遣る詩をつくつて虬に寄せ、
さらにそれを近く住む侍御史蘇渙におくつた。大曆四年、潭州にての作。

【詩意】 ながらく旅客になつてゐる自分は朋友からたくさん手紙をもらひ、一ヶ月には凡そ一束の
がみがたまふ。自分が虚名を得てゐるためにその人人からたづねられることは寒さあつきの挨拶はか
りて御世辭の愛では自分が溝壑にのたれ死にをする辱にあふことを救ふよしもない。自分は齒は落

ちてもまだ心を無くした人間ではないが、張儀の様に舌が存在しながら阮籍の如くゆきつまつた途で
慟哭してゐることは恥かしいことである。ちやうどこのとき裴道州からの手紙がとどいた、なかなか
長い手紙だが自分はずつとそれをつまんで三べんもくりかへしてよんだ。この手紙を得ては、掌にみつ
るほどの滄海の珠もいらぬ。この手紙が手許にあることは懐にはひつてきた崑山の玉に倚りそうてゐ
る様なものだ。潭州の百斛の酒もほしくなくなつてそれをはふりだしてしまひ、瀟水の岸の千株の菊
の花も手折る氣になれずかつてにあらさしておく。晝は立ちながら讀みふけるとして兒孫を煩はし、夜
はすわつて讀みふけるとして、燭を費させられる。いまでも記憶してゐる、君がはじめて永嘉郡へ尉官
となつていつた時には、紅顏白面の若者で花の色が肉にうつろうてゐた。徵軍の割符、封侯の印も君
にとつてはそれを取ること決しておそくはない、紫燕・驂耳の駿馬はあるくことは甚だはやいものだ、
君はその駿馬でないか。いま聖朝にかかはらずまだ戰鬪の塵が飛んでゐる、世をすくふには英俊の
人を引き用ひねばならぬ。人民たちはひどくしんばいしてゐるがこれは必ずよみがへらせ安息させね
ばならぬ、しかるに戎狄があはれてゐるのに當局はいたづらにぐづぐづためらうてゐる。君の如き英
俊のためにはきつと鉞を授け壇を築かるといふ聖旨のあることを聞くであらう、いまの國家のくづ
れた綱紀疎漏な法網はどうしても正しきつなをひきわたして修理することを期せなければならぬ。郭
欽は夷狄を遷徙させよとの上書をしたがいかにも國家の大計が見られる、劉毅は武帝の詔に無遠慮

なお答へをして羣臣を驚かした。(君は今の郭欽・劉毅である。)「往きつ日僕を更ふるの久しきにわたつて君と深く語りあうたときには、明公は兵を論ずるや元氣ますます振ふものがあつた、そのをり酒壺を傾けては蕭管の音吾が白髪の前に動き、劍を舞はせば霜雪の色青春にあたつて吹きそそがれた。」かかるさかもりのむしろで蘇季子(漢を比す)のことについて語り及んだことがあつた。それは彼(漢)は後來傑出するもので蘇秦の遠孫の類たるにふさはしいものであるといふのであつた。いま蘇(漢)はこの定王城の郭門に茅齋をかまへてをる、自分は楚老となつて漁商の市にそうて藥物と親んでをる。蘇は市の北へ肩輿でやつてきていつもじぶんと袂を聯ね、また彼が郭南で甕を抱いて水を灌いだりしてゐるところへじぶんもいつて脇息によつたりする。將軍輩が贅澤な西第を落成させようともそんなことはかぞへたてとりあふにおよばぬ。早く蘇の様な人物が謝安の様に東山から起ちあがつて丞相になつてくれることをのぞむのである。鳥雀の様なつまらぬよりは秋の粟菽に肥えてゐるのに、他方には蛟龍の様なすぐれたものは寒天の沙水にあなごもらうとしてをる。天下の鼓角はいつになつたらやむのか、陣前の部隊は朝から晩まで死にとほしてある。」自分はこの手紙を表に附與しついでにそれを蘇に示す、じぶんはこの生活に於てもはや老衰して人の手扶けをからねばならぬ様になつてゐることをはちる。だから君を堯舜の地位に致すといふ様な大事業は之を諸君にまかせる、諸君はど

うぞ早く要路に立つてそこをあしだまりとし、天下國家のためには一身をなげうつことをかながへてくれたまへ。」

奉贈李八丈暉判官

李八丈暉判官に贈り奉る

我丈特英特、宗枝神堯後。
珊瑚市則無、驂人得有。
早年見標格、秀氣衝星斗。
事業富清機、官曹貞獨守。
頃來樹佳政、皆已傳衆口。
艱難體貴安、冗長吾敢取。
區區猶歷試、炯炯更持久。
討論實解頤、操割紛應手。
篋書積諷諫、宮闕限奔走。
入幕未展材、秉鈞孰爲偶。

我が丈は特に英特なり、宗枝神堯の後なり。
珊瑚市には則ち無し、驂人有ることを得。
早年標格を見る、秀氣星斗を衝く。
事業清機に富む、官曹貞にして獨り守る。
頃來佳政を樹つ、皆已に衆口に傳はる。
艱難體安を貴ぶ、冗長吾敢て取らむや。
區區猶は歷試、炯炯更に持久。
討論實に頤を解く、操割紛として手に應ず。
篋書諷諫積む、宮闕奔走に限らる。
入幕未だ材を展べず、秉鈞孰か偶を爲さむ。

所親問淹泊。泛愛惜衰朽。垂白辭南翁。委身希北叟。眞成窮轍鮒。或似喪家狗。秋枯洞庭石。風颯長沙柳。高興激荆衡。知音爲回首。

所親淹泊を問ふ、泛愛衰朽を惜む。垂白南翁を辭せむ、委身北叟を希ふ。眞成に窮せる轍鮒なり、或は似たり喪家の狗。秋枯る洞庭の石、風は颯たり長沙の柳。高興荆衡に激す、知音爲めに首を回らせ。

【字解】 一、李八丈、李鴻賓、判官李暉、丈は丈人、長者の稱。二、我丈、我が丈人。三、英特、すぐれたる人物。四、宗族、宗族のわかれ。五、神苑、唐の高祖。六、瑯琊市則無、瑯琊は實、市は市場。七、馳驅、馳驅、驍騎、穆王の駿馬。八、人得、人中には之れあるをいふ、或は曰く、不可得の意にて反語なりと、今取らず。九、標格、すぐれたすがた。十、秀氣、すぐれた意氣。十一、衡星斗、豐城劍の故事。十二、富清樓、樓は樓閣、清は飾りの辭。十三、官曹、官の部屋、周課の類、下級の官をいふ。十四、貞獨守、貞は正し。十五、頃來、このころからかけて。十六、樹佳政、よき政治をたてる。十七、羸羸、時世のなんざなとき。十八、澹貴安、澹は治體、安は安泰。十九、尤長、事務の繁くむだ多きこと。二十、吾取取、吾とは李に即していふ。二十一、歴試、下級の官職から一だんだんに試みられる、語は書經にみゆ。二十二、炯炯、かがやく貌、守貞の心の明かなるをいふ。二十三、持久、ながく車職に忍耐して居る。二十四、解頤、おとがひをとく、笑はせる、おもしろく説くこと。二十五、操割、刀をとりにて物を割く。二十六、紛應手、紛然たる事も手に應じてさばきがつく。二十七、黃書、朝廷にあるかこのながにおかれた書類。二十八、積風、風は政治につき天子をおいさめする書といふ。二十九、宮闕、宮城の小門。三十、限奔走、宮門に奔走せんとするも遠方に置かるる故それを制限せられる。三十一、入幕、武將の幕府にはひる、判官たるをいふ。三十二、風材、材力をのばす。三十三、乘釣、國政の鈞衡を手ににぎる、大臣などの職務をいふ、語は詩にみゆ。三十四、執爲偶、ならぶものなし。三十五、所親、仇氏李を指すとす、余

は一般にいふものと考え。六、問淹泊、淹泊は久しく舟を泊しおくこと。七、泛愛、ひととほりのひろき愛、已にみゆ。八、情衰朽、自己の老衰をなむ。愚案するに「所親」二句は「暮秋在襄州手札」詩の虛名但蒙寒暄問、泛愛不救滯憂辱、の意なるべし。九、垂白、白髪をたれる、自己の老體。十、辭南翁、辭は辭し去る、南翁は南國の父老等、已にみゆ、或は辭を亂に作り、亂南翁とは南方の老人と混居し同類となるの意ととく。今取らず。十一、委身、からだをなすがままにまかす。十二、希北叟、北叟は塞北の老人、塞翁が馬の塞翁をさす、「乘白」二句は作者北歸の意あるをいふ。十三、眞成、まことに、俗語。十四、窮轍鮒、窮せるわたちのふな、「莊子」にみゆ。十五、喪家狗、喪儀ある家のいぬ、人に顧みられずやせつかる。「史記」孔子世家にみゆ。十六、秋枯、枯は水の涸るるをいふ。十七、風、風の吹くさま。十八、激荆衡、南地に於て激動す、荆は荆門、衡は衡山。十九、知音爲回首、知音は李をさす。この句書解は「我、知音(李)の爲めに我が首を回らす」ととく。余は「知音よ、我がために君の首を回らせ」の義ならんと考ふ。窮を訴ふるなり。

【題義】 判官李暉に贈りたる詩。大曆四年秋、潭州にての作。

【詩意】 我丈は特別にすぐれた人物で、皇族の別れで高祖神堯の子孫であらせられる。瑯琊の寶は市に求めようとしても有るものではない、しかし人間のうちでは驍駢、騏驎の駿馬は有り得るのである。(あなたがそれだ)。あなたは早年からすぐれたすがたをあらはし、秀でた意氣は豐城の劍の様に星斗を衝く勢があつた。事業に於ては機略に富み、官署に於ては正しくして自己の守を失はない。このころはよい政治をたててをられるといふことは衆人の口に傳へられてをる。國事艱難なるをりには政治の體は安泰を貴ばねばならぬ、やたらにくだくだしくむだな事務をつくることは決して取るところではないとしてをられる。かかる人物がこせこせした卑職に試みられてをらるるにも拘はらず、炯

炯として貞心を久しく保持しておいでになる。」あなたの討論をきくとおもしろくてあごがはずれる様であるし、事務はどんなにみだれたことでもあなたは手に應じてさばいてしまふ。あなたの朝廷にたてまつられた諷諫の書は積りつもつて朝廷の儀にいつばいになつてをるが、あなたはかたのなかにおかれて宮門にいたつて奔走しようとしても奔走し能はざる制限をうけてをられる。あなたは幕府の屬官となつてまだ十分材力を展べることができぬが、國政の要をとらせたならばだれがあなたとならび得るものがあらう。」わたくしは親しい人人から長い舟の生活についてたづねられる。また御世辭に自分を愛してくれる人人はじぶんの衰朽を惜んでもくれる。(しかしそれがなんになる、なんにせらぬ、だから)わたくしは垂白の身を以て南方の父老のところから辭し去り、一身を運命にまかせること塞翁の様にありたいとねがうてをる。いまのわたくしは眞に莊子の所謂困窮した轍の鮒である、或は喪家の狗に似てゐる。今秋となつて洞庭湖の石には水がすくなくなり、風が颯然として長沙の柳を吹いてゐる。このとき荆衡の地方に於てわたくしの高興が激發し、北の方へかへりたいとおもつてをります。どうぞわたくしに取つて知音であらせられるあなたは、わたくしの爲めにこちらをふりむいてやつてくださいませ。」

奉送魏六丈佑少府之交廣

魏六丈佑少府が交廣に之くを送り奉る

賢豪贊經綸。功成空名垂。

賢豪經綸を贊け、功成りて空しく名垂れ、

子孫不振耀。歷代皆有之。

子孫振耀せざるは、歷代皆之れ有り。

鄭公四葉孫。長大常苦饑。

鄭公四葉の孫、長大常に饑に苦しむ。

衆中見毛骨。猶是麒麟兒。

衆中毛骨を見れば、猶ほ是れ麒麟兒なり。

磊落貞觀事。致君樸直詞。

磊落なり貞觀の事、君を致す樸直の詞。

家聲蓋六合。行色何其微。

家聲六合を蓋ふ、行色何ぞ其れ微なる。」

遇我蒼梧陰。忽驚會面稀。

我に遇ふ蒼梧の陰、忽ち驚く會面の稀なるに。

議論有餘地。公侯來未遲。

議論餘地有り、公侯來ること未だ遅からず。

虛思黃金遺。自笑青雲期。

虚しく思ふ黄金の遺、自ら笑ふ青雲を期することを。

長卿久病渴。武帝元同時。

長卿久しく渴を病む、武帝元同時。

季子黑貂敝。得無妻嫂欺。

季子黑貂敝る、妻嫂の欺る無きを得むや。

尙爲諸侯客。獨屈州縣卑。

尙ほ諸侯の客と爲り、獨り州縣の卑なるに屈す。

南游炎海甸。浩蕩從此辭。

南炎海の甸に游ばむ、浩蕩此れより辭せむ。

窮途仗神道。世亂輕土宜。
 解帆歲云暮。可與春風歸。
 出入朱門家。華屋刻蛟螭。
 玉食亞王者。樂張遊子悲。
 侍婢艷傾城。綃綺輕霧霏。
 掌中琥珀鍾。行酒雙透迤。
 新歡繼明燭。梁棟星辰飛。
 兩情願盼合。珠碧贈于斯。
 上貴見肝膽。下貴不相疑。
 心事披寫間。氣酣達所爲。
 錯揮鐵如意。莫避珊瑚枝。
 始兼逸邁興。終慎賓主儀。
 戎馬闇天字。嗚呼生別離。

窮途神道に仗る、世亂れて土宜を輕んず。
 解帆歲云暮に暮る、春風と與に歸る可し。
 出入す朱門の家、華屋蛟螭を刻す。
 玉食王者に亞ぐ、樂張りて遊子悲しむ。
 侍婢傾城艶なり、綃綺輕霧霏ぶ。
 掌中琥珀の鍾、行酒雙に透迤たり。
 新歡明燭繼ぐ、梁棟星辰飛ぶ。
 兩情願盼に合す、珠碧斯に贈らる。
 上は肝膽を見すを貴ぶ、下は相疑はざるを貴ぶ。
 心事披寫の間、氣酣にして爲す所を達す。
 錯りて揮ふ鐵如意、避くる莫し珊瑚の枝。
 始は逸邁の興を兼ぬとも、終には賓主の儀を慎め。
 戎馬天字闇し、嗚呼生別離。

【字解】 一、窮途、六丈、少府。少府は縣尉の職稱。二、神道、交州、廣州、廣州は廣東、交州は交趾地方。三、解帆、國初の天下の政治を計畫せしこと。四、鄭公、太宗の臣職微なり、貞觀七年に左光祿大夫、鄭國公に進む。五、四葉孫、四代の孫、佑をさす。六、長大、身軀の大きなこと。七、氣酣、不羈いさま。八、貞觀、唐太宗の年號。九、致君、君を堯舜に致す。十、僕直詞、かざらぬまつすべのことば、微が直諫せしをいふ。二、六合、四方上下。三、行色、旅行のさま、車馬などの様子。四、有餘地、餘裕あるをいふ。五、公侯未遑、公侯の子孫、必復其始の意、佑もやがて公侯となるべきをいふ。六、虛思黃金遺以下、莫避珊瑚枝まで三十二句は蓋し魏佑自述の語。黃金遺は他人より黃金をおくろむること、浦氏は、これは武帝の陳皇后が黃金百斤を以て司馬相如の賦を買ひしことをさすものとし、下の長脚二句へかかるものとし、仇氏は、これは單に空囊を敷するものにて下の季子二句へかかるものとせり。今仇氏に依る。七、青雲期、仇氏、この句を以て長脚二句へかかるものとす。八、長脚、久病漏、長脚は司馬相如が字、已にみゆ。九、武帝元同時、武帝、相如が子虛賦を讀みて曰く、朕獨り此の人と時を同じくするを得ざるかと。十、手子黑貂敝、蘇秦、秦王に説きて言行はれず、黑貂の裘やぶれて歸る、妻は機より下らず、嫂は爲めに炊がす。十一、妻嫂欺、上にみゆ、欺は侮らなり。十二、諸侯客、地方長官の幕客。十三、州州縣卑、屈は身を屈する、卑は官のひくきこと、少府は尉なれば卑し。十四、炎海句、炎海は南海をいふ、句は鄭旬、郭外を郊といひ、郊外を句といふ、句の字ぬなかと、いふほどの義に用ひたり。十五、浩瀟、ひろく大なるさま。蓋し前程をさす。十六、從此辭、辭は辭去。十七、仗神道、神力によるをいふ。十八、輕土宜、土宜とは地味に宜しき所のものなり。米のよくてできる地ならば米はその地の土宜なり。十九、こは土宜を輕んずるとは郷土を容易に離れ去るをいふ。二十、出入朱門家、以下、莫避珊瑚枝までは交廣のさま。二十一、玉食、美食。二十二、綃綺、薄きあやぎぬ。二十三、琥珀鍾、鐘はさかづき。二十四、行酒、酒をつぐこと。二十五、雙透迤、雙は左右双方、透迤は美人のしなやかなさま。二十六、新歡、新に得た友をいふ。二十七、燭明燭、一燭消ゆれば他燭を以てつぐ。二十八、星辰飛、仇注にいふ、星辰は樂上の燈をさすと。愚案するに星の散落する夜ふけをいふならん。二十九、兩情、彼我の情。三十、珠碧、眞珠、碧玉。三十一、見肝膽、こころの心をありのまま示す。三十二、不相疑、先方を信すること。三十三、披寫、ひらきき、うつす、うつすとは我が心を先方へいれるなり。三十四、達所爲、なさんと欲する所をそのとほり

しとげる。【四】珊瑚枝、暗に石崇が故事を用ふ。晉の石崇かつて武帝が王愷に賜ひし二尺許の珊瑚枝を鐵如意にてうち碎く、愷之をなしむ、崇左右に命じ更に珊瑚樹の高き三四尺なるもの六七株を取らしむ。【四六】始兼逸遇興、以下は作者の意。遇の字はそへたるまで。【四七】賓主僕、賓は魏佑、主は土地の長官。

【題義】縣尉魏佑が南方交廣の地方へゆくのを送つた詩。大曆四年冬、潭州にての作。

【詩意】賢人豪傑がその初め天下の經綸をたすけ、功ができたがつて、いたづらにその名が後世までこのり、其の子孫がすこしも耀きをふるはぬといふことは、歴代みな有ることであらう。魏鄭公の四代の孫にあたる人（魏佑）がある、その人は長大の軀幹をもちつついつも饑に苦しんでをる。衆人のをるなかでこの人の毛骨を見てみるとこの人はやつぱり麒麟兒でただのものではない。鄭公が貞觀の時代になされた事の磊落不羣なりしことよ、公は樸直の詞を以て君を堯舜に致さうとつとめられた。魏氏一門の名聲は六合をおほふばかりである、しかるにこれはまたその人の四代の孫にいたつてどうしてかくまでも旅行のいでたちのふるはぬ様子なのであらうか。君は自分と蒼梧の北であうた、じつにめつたにない面會であるのに驚かされた。君の議論には餘裕がある、おぢぶれたとはいふものの祖先の様に公侯の地位が君のところへ來ることは決しておそくはあるまい。君はいふ、自分は貧乏でいたづらにひとから黄金をおくられたらばと思ひ、また青雲の高位にのぼりたいと期してをることは自分ながらをかしとおもふ。武帝とは元來同時に生れあはせたのだがこの司

馬長卿はながく消渴の病にかかつてゐる。この蘇季子は黑貂の裘がやぶれてしまつたから家にも歸つたら妻嫂にも侮られるかもしらぬ。いまだに諸侯の客となつて身を州縣の卑官に屈してをるが、これから南の方炎海のみなかにあそびたくおもふ、前途廣遠であるがこれからおいとまごひをする。ゆきつまつた途では神の力にたよるほかはない、世が亂れてゐるのではかろがろしく郷土を見棄てることもやむを得ない。歳の暮れに出帆はするが春風の吹き起るころには歸ることができるだらう。『あちらへゆけば、朱門富貴の家に出入する、そこにはりつばな家屋に蚊蟻などが雕刻してある。その美食は王者にもつぐし、音楽を張られると遊子の心は悲しくなる。そばにひかへてる婢は城を傾けさすほどに艶麗で、その綺綺は輕き霧がこまかく飛ぶ様である。彼の女は掌の中に琥珀の杯をもち左右からうねうねとして酒をついでくれる。新に得た友たちと燭を繼ぎてはともし、梁棟には星辰が飛ぶころとなる。このときみかはず間に彼我の情意が投合すればそのところで眞珠や碧玉が贈りものにされる。上はこちらのところをすつかりみせてやるのがよいし、その次には先方を信じてかかるのがよろしい。こちらの心事を先方へつぎこめば、こちらの意氣のさかんなときにはなにをしようとかまはぬ。まぢがつて鐵の如意をふるふときは珊瑚の枝でも避けはせぬ、』なるほど君の意氣はさかんだ、しかし始は豪興の逸するまにやるのもよいかも知れぬが、しまひには主人と賓客との間の威儀について心を用ひらるるがよろしい。いま戎馬がさかんで天宇がくらしい。ああ君とはこれが生き別

れた。つらいことだ。』

北風

北風

北風破南極。朱鳳日威垂。

北風南極を破る、朱鳳日に威垂。

洞庭秋欲雪。鴻雁將安歸。

洞庭秋雪らむと欲す、鴻雁將た安くにか歸らむ。

十年殺氣盛。六合人煙稀。

十年殺氣盛なり、六合人煙稀なり。

吾慕漢初老。時清猶茹芝。

吾は慕ふ漢初の老、時清くして猶ほ芝を茹ひしことを。

【字解】 〔一〕破、吹破、つよく吹くをいふ。〔二〕朱鳳、朱羽の鳳凰。〔三〕威垂、威勢の揚がらざるをいふ。〔四〕十年、大略にていふ、乾元元年入蜀よりかぞふれば大曆四年にて十二年となるなり。〔五〕六合、前篇にみゆ。〔六〕漢初老、商山の四皓をいふ、已に屢々見ゆ。〔七〕茹、くらふ。

【題義】 北風の吹くをり威したることをのぶ。大曆四年秋、潭州にての作。

【詩意】 北風が南極を破らんばかりつよく吹き、朱色の鳳凰は日に日に威勢が揚がらなくなつてゐる。洞庭では秋、雪がふらうとしてをる、鴻雁はどこへ歸るつもりなのであらう。十年このかた殺氣が盛で、上下四方どこをみても人家の煙が稀である。漢の初に商山の四皓たちは時世が清らかであつたにかかはらずなほ山で靈芝をとつてたべてゐたといふが、自分は彼等を慕ふものである。

幽人

幽人

孤雲亦羣游。神物有所歸。

孤雲も亦た羣游す、神物歸する所有り。

靈鳳在赤霄。何當一來儀。

靈鳳赤霄に在り、何か當に一たび來儀すべき。

往與惠詢輩。中年滄洲期。

往に惠詢が輩と、中年滄洲の期あり。

天高無消息。棄我忽若遺。

天高くして消息無し、我を棄つる忽ち遺るるが若し。

內懼非道流。幽人見瑕疵。

内には懼る道流に非ずして、幽人に瑕疵とせられしかと。

洪濤隱笑語。鼓枻蓬萊池。

洪濤笑語を隱す、枻を鼓かす蓬萊の池。

崔嵬扶桑日。照曜珊瑚枝。

崔嵬たる扶桑の日、照曜す珊瑚の枝。

風帆倚翠蓋。暮把東皇衣。

風帆翠蓋に倚る、暮に把る東皇の衣。

嘖漱元和津。所思煙霞微。

嘖漱す元和の津、思ふ所煙霞微なり。

知名未足稱。局趣促商山芝。

名を知らるるは未だ稱するに足らず、局趣〔促〕たり。

五湖復浩蕩。歲暮有餘悲。

五湖復た浩蕩たり、歲暮れて餘悲有り。

【字解】 〔一〕羣游、むらがりてさまよふ。〔二〕神物、龍をさす。朱注は首二句の關係を「雲は龍に従ふ」の考にてときたり。余は

龍は雲の在る處にかへることないへるものとみる。【三】歸 おちつく。【四】何當 何は何時。【五】來儀 容體振つて來ること、語は「尙書」にみゆ。【六】往 往日、往年。【七】蕙蘭 蕙蘭は靈道と許詢なりとの説あり、朱注は「送蕙二過東溪」詩により蕙二の名が或は詢ならんかといへり。何人なるか定めがたし。但その仙道を學びしものなることを推すべきのみ。【八】中年 少老の中間のとし、四十歳がらまりないふ。【九】滄洲期 滄洲は仙境、期は會合の約束ありしをいふ。【一〇】遺 遺忘。【一一】内懷 内心におそる。【一二】道遠 道敷を奉ずるともがら。【一三】幽人 幽靜にふける人、蕙蘭が徒をさす。【一四】瑕瑜 ます。【一五】隱笑語 笑語のさまが見えざるをいふ。【一六】鼓椎 かちをうごかす。【一七】蓬萊池 蓬萊の仙山の池。【一八】崔嵬 たかき貌。【一九】扶桑 枝のささへあへる處、山海經にいふ、扶桑は日の出づる處に生ず、九日は下枝に、一日は上枝に居り、皆鳥を載すと。【二〇】翠蓋 翠羽を以て飾りしがさ、舟に建つるもの。【二一】東皇 日の神、屈原の九歌に、東皇太一の歌あり。【二二】嘒嘒 のみ口そそぐ。【二三】元和津 黃庭經の注に、口中の液水を玉津といふとし、中黃經に、津液を元和といふことみゆ。元和の津とは口中のつばきをいふ。此句まで道友のさまをいふ。【二四】所思 道友をさす。【二五】煙霞微 煙霞の微なるにへだてらるるをいふ。【二六】知名 世人に名を知らるること。【二七】周題 題は促、周促なり、かがまる、こせつくこと。【二八】商山芝 四皓の採りし芝。【二九】五湖 洞庭をいふ。【三〇】浩蕩 煙波のひろくうごきさま。【三一】餘悲 悲しみきれぬかなしみ。

【題義】 幽靜にふける人をおもひし詩。大曆四年秋、潭州にての作なるべし。

【詩意】 ひとひらうかんでゐる雲でもまたむらがつてさまよふことがある、するとそこへふしぎな龍の如き神物が來ておちつくのである。ところが靈鳳はいま赤い霧のうへにをるが、これはいつになつたら地上へおりて容體をさらすことだらう。自分はまへかた蕙蘭などと中年ながら滄洲の仙境にゆかうと約束してあつた。ところが秋天は高いが彼からの消息は無い、彼は我を棄てること忽ちうちわすれたかの様である。自分はもと道家のなかまではないから、幽靜にふける人からさすあるものとし

ていやがられはせぬかと内心おそれてゐる。彼等道家のなかまの笑語はいま大きな濤からかくされてゐる、彼等は蓬萊の池でかちをうごかしてゐる、扶桑からのぼる太陽は高く懸つて珊瑚の枝を照らしてかがやいてゐる。舟中にたてた翠蓋によりそうて風を孕んだ帆を揚げつつ、彼等は暮には日の神の衣にすがり、元和の氣を含んだ玉の唾をのみこんでゐる、吾がななまはこんなことをしてゐるが、吾が思ふ彼等をここから望んでもただ微に煙霞がうかんで見えるばかりだ。商山の四皓は山の中で靈芝を採つてゐたが、あれなどはまだこせついた仕業だ、あんなことで世間に名を知られてゐることなどはほめたはなしではない。いま五湖（洞庭）にはまた煙波が浩蕩としてうごいてゐる、自分は之をみては歳の暮にあたつて悲しんでも悲しみきれぬかなしさがあつた。（早く仙境へたどりつけぬのがかなしいの意。）

江漢

江漢

江漢思歸客。乾坤一腐儒。
片雲天共遠。永夜月同孤。
落日心猶壯。秋風病欲蘇。

江漢歸るを思ふ客、乾坤一腐儒。
片雲に天と共に遠く、永夜に月と同じく孤なり。
落日に心猶ほ壯に、秋風に病蘇せむと欲す。

古來存老馬。不必取長途。古來老馬を存す、必ずしも長途に取らず。

【字解】(一) 江漢 仇氏曰く、杜詩の江漢に二種あり、岷江以前は涪江に注ぐ西漢水をさし、岷江以後は長江に注ぐ東漢水をさす。本篇の江漢は東漢水をさす。即ち漢陽にて大江に入る漢水をいふ。長沙に居て江漢といふは作者の例のひろく言ひなすくせなり。

【二】 乾坤 副詞、天地の間に於ての義。【三】 片雲 副詞、片雲の浮ぶところの意。【四】 天共遠 遠字の主語は上句の腐儒即ち自己。

【五】 永夜 副詞。【六】 月同孤 孤字の主語は腐儒即ち自己。【七】 落日 晩年の義を裏面に帯びたり。【八】 存老馬 存は遺棄せず存養するをいふ。「韓詩外傳」にいふ、田子方、出でて老馬を道に見る、喟然として歎じて曰く、少くして其の力を盡くせしに、老いて其の身を棄つるは、仁者は爲さざるなりと、束帛して之を贖ふ、と。又齊の桓公孤竹を伐つとき途に迷ひ、老馬の智用ふべしとて老馬を放ちて途を求めしこと「韓非子」にみゆ。【九】 取長途 長途を行き得る能力ある點に於て取る所あるの意。

【題義】 老いて邊地に棄ておかるるを歎きたる詩。題は首二字を切りとりて用ふ。本篇は或は夔州、或は江陵の作とせらる。仇氏は蔡氏に依り次篇「地隅」と同じく湖南の詩とし、大曆四年秋の作とせり。之に従ふ。

【詩意】 江漢の流るる地方に於て歸郷を思うてゐる旅客であり、茫茫たる天地の間に於て一人の腐儒たるにとどまる自分といふもの。この自分はひとひらの雲の浮ぶところ、天が故郷からかけはなれると共に遠くはなれてをり、永き夜には月が唯ひとつ懸つてゐると同じ様にひとりぼつちである。日は落ちかからうとしても自分の心はまだ勇壯である、秋風がすすけたつたから病氣の身もよみがへらうとしてをる。むかしから老馬も役に立つとしてこのしてゐるのは、必ずしもそれが遠途ができること

ろに取りえがあるとしてではないのである。(それに自分は老馬のごとく棄てられてをることはなげかはしいの意)。

地隅

地隅

江漢山重阻。風雲地一隅。

江漢山重阻す、風雲地の一隅。

年年非故物。處處是窮途。

年年故物に非ず、處處是れ窮途。

喪亂秦公子。悲涼楚大夫。

喪亂秦の公子、悲涼楚の大夫。

平生心已折。行路日荒蕪。

平生心已に折る、行路日に荒蕪す。

【字解】(一) 江漢 前篇と同義。【二】 秦公子 王粲をいふ、王粲は秦川の貴公子なりといふこと謝靈運が詩序にみゆ。以て自ら比す。【三】 楚大夫 楚の屈原は三閭大夫たり、以て自ら比す。

【題義】 邊隅の地に居る感をのぶ。この篇或は閩州又は江陵の作とせらる。仇氏は前篇とおなじく大曆四年、湖南の詩とせり。

【詩意】 江漢の地方で山が重り故郷とのじやまをしてをる、風雲ただよふところのなかのかたすみである。一年一年とふるままにであふ所の事物はみな故のものではなく、到るところすべてみなゆきつまつた途ばかりである。たとへば自分は喪亂にあうた秦川の貴公子王粲の如く、また悲涼の感をいだ

いてゐる楚の三閭大夫屈原の如きものである。ふだんから吾が心は已に挫折しきつてをるのに、ゆく
ての路はさらに日に日に荒れまざるばかりである。

舟中夜雪、有懷盧十四侍御弟

舟中の夜雪に、盧十四侍御弟を懷ふこと有り

朔風吹桂水。大雪夜紛紛。朔風桂水を吹く、大雪夜紛紛たり。
暗度南樓月。寒深北渚雲。暗には度る南樓の月、寒には深し北渚の雲。
燭斜初近見。舟重竟無聞。燭斜にして初めて近く見ゆ、舟重くして竟に聞ゆる無し。
不識山陰道。聽雞更憶君。識らず山陰の道、雞を聽きて更に君を憶ふ。

【字解】(一) 盧十四侍御弟 本巻に前に「送盧十四侍御弟奉尚書靈輿上郡」詩ありたり。盧は章の標を送りゆきしにより之を
懐ふなり。(二) 桂水 卷二十二の「暮歸」の詩にみゆ。「寫懷」にては仇氏は桂水即ち湘水とみるも、余は區別する意見なる
ことをいへり。こゝも區別して桂水は實の桂水とみる、長沙にて桂水をいふは例のひろく言ひなすくせなり。(三) 暗度 度字の主語
は月。(四) 南樓月 庾亮が武昌樓上の故事、已にみゆ、こゝは長沙の城樓をいふ。(五) 寒深 深字の主語は雲。(六) 北渚雲 北
渚は湘江の北渚、「九歌」に、帝子降兮北渚」とみゆ。(七) 燭斜 燭光の斜にさすをいふ。(八) 近見 雪が光に近くちらちら見ゆ
る。(九) 無聞 おとのきこえざるをいふ。(一〇) 不識山陰道 識は辨識、山陰道は王子猷が雪夜山陰に戴安道を尋れし故事。已にみ
ゆ。(一一) 聽雞 曉に近きをいふ。(一二) 君 盧をさす。

【題義】 雪のふりし夜、舟中にて盧侍御をおもつた詩。大曆四年冬、潭州にての作。

【詩意】 北風が桂水の地方を吹いて、夜、大雪が紛紛とふつてきた。南樓の月は暗がり帯びてうつ
りゆき、北渚の雲は寒氣のうちに深くよこたはる。燭の光が斜にさすときはじめて雪のちらちらす
るさまが近く見えるが、舟のうへに重くなるまでつもつてもあくまで音がせぬ。王子猷が訪ねたとい
ふ山陰の道はどこか自分にはわからぬ、自分はいま雞のこゑを聴くにつけてさらにあなたのことを
おもつてをる。

對雪

雪に對す

北雪犯長沙。胡雲冷萬家。北雪長沙を犯す、胡雲萬家に冷かなり。
隨風且間葉。帶雨不成花。風に隨ひて且つ葉に間はる、雨を帯びて花を成さず。
金錯囊垂罄。銀壺酒易賒。金錯囊罄くるに垂んとす、銀壺酒賒り易からむや。
無人竭浮蟻。有待至昏鴉。人の浮蟻を竭くさしむる無し、待つ有りて昏鴉に至る。

【字解】(一) 胡雲 北方胡地からきた雲。(二) 萬家 城中の多くの家。(三) 間葉 間は雜なり、葉にまさつて飛ぶ。(四) 金
錯 金錯刀なり、王莽の鑄し錢の名。王莽は大錢・契刀・錯刀・五銖錢の四種の錢を造りたり、錯刀は黃金にて文字を交錯して一刀直五
十とあらはしたり。こゝは單に錢の意に用ふ。(五) 罄 盡なり。(六) 銀壺 銀製の酒壺。(七) 易賒 賒はおぎのる、かげにて買

ふこと、易は豈易・不易なり。【六】無人獨浮蟻。余は蟻は使・香蟻の意とみたり、浮蟻は酒の泡の狀、従つて酒をいふ。【七】有待。待とは送酒の人を持つなり。

【題義】雪に對したときの感をのぶ。蓋し前の雪夜の後の日の作ならん。人に酒をねだりて贈りしものならん。

【詩意】北方の雪が長沙まで犯してきた。胡地の雲が城中の萬家のうへにつめたくかかつてゐる。雪は風のまにまに木の葉といりまじつて飛ぶが、雨を帯びてゐるために花とはならずとけておちる。このをり自分の財布には刀錢が盡きかけてゐて、銀壺の酒はとも掛け買ひすることがむづかしい。だれも自分に浮蟻の泡立つ酒を飲みつくさせてくれる人はをらぬ、それであてどもなく待つてとうとうひぐれの鴉がさわぐころになつてしまつた。

冬晩送長孫漸舍人歸□州

參卿休坐幄。蕩子不歸鄉。南客瀟湘外。西戎鄠杜旁。

衰年傾蓋晚。費日繫舟長。會面思來札。銷魂逐去檣。

冬晩、長孫漸舍人が□州に歸るを送る。參卿幄に坐するを休む、蕩子郷に歸らず。南客瀟湘の外、西戎鄠杜の旁。衰年傾蓋晚し、費日繫舟長し。會面來札を思ふ、銷魂去檣を逐ふ。

雲晴鷗更舞。風逆雁無行。匣裏雌雄劍。吹毛選將。

雲晴れて鷗更に舞ふ、風逆にして雁行無し。匣裏雌雄の劍、吹毛選將に任す。

【字解】【一】長孫漸舍人。舍人は官名、長孫漸は姓名。【二】歸州。浦注に歸字の下に脫字あらんといへるは當れり。州の名を逸したるなり。ただ北方に歸るものなることは推し得べし。【三】參卿。仇注浦注註に作者が嚴武の幕府に參せしことし首四句を自敘とみたり。之に依れば參卿・蕩子・南客みな作者自己をさすこととなる。愚案するに作者豈にかかる拙き敘法を爲すものならんや。蓋し參卿は自己につき、蕩子は舍人につき、南客は彼我兩人についていひしものならん。參卿とは幕府の軍事に參與するをいふ。晉の孫楚、石苞が參軍となり、任に至るや長掛して曰く、天子我に命じ、參卿軍事と。これ參卿二字の出典なり。【四】休坐幄。帷幄の中に坐することをやむ、作者かつて嚴武が參謀たり、それをやめしをいふ。【五】蕩子。のらむす、こゝは單に遠遊の人をいひ、舍人をさす。【六】南客。南國の旅客、舍人と自己とをこめていふ。【七】西戎。吐蕃。【八】鄠杜。鄠縣、杜陵、竝に長安の近地。【九】匣裏劍。來札とは別後舍人のかたより來る手紙をいふ。【一〇】去檣。舍人の舟の去りゆくほばし。【一一】雌雄劍。干將・莫耶の劍、舍人の英材を比す。【一二】吹毛。劍鋒の利きこと毛を吹きつけても之を斷つことを得。【一三】選將。將はひきあふる、無用するをいふ。

【題義】冬のくれに舍人長孫漸が某州へ歸るのを送つた詩。大曆四年冬の作。

【詩意】自分はかつて幕府の軍事に參與してをつたが帷幄のなかに坐して軍謀にあづかることをやめてしまつた。あなたはこれまで旅人として遠地をうろついて故郷にはかへらずにゐた。かくておたがひ瀟湘のほかで旅客の身となつてをるが、みやこの近地である鄠・杜のそばでは西戎がはびこつてをる。自分は老衰の年になつてあなたと傾蓋の交りをむすぶことがおそかつた、それがいくにちとな